

いき　め　こ　ふん　ぐん
生目古墳群 VI

—生目21号墳発掘調査報告書—



2016

宮崎市教育委員会

いき　め　こ　ふん　ぐん
生目古墳群 VI

—生目21号墳発掘調査報告書—

2016

宮崎市教育委員会

序

本書は、史跡生目古墳群保存整備事業に伴う生目 21 号墳の発掘調査報告書です。この生目 21 号墳の発掘調査では二つの大きな驚きがありました。

一つ目は古墳の「形」が変わったことです。生目古墳群は昭和 18 年 9 月 8 日に国史跡に指定されましたが、その際、21 号墳は円墳として指定を受けていました。ところが平成 14 年度、史跡整備に伴う発掘調査をおこなったところ、古墳の周りの溝の状況から、円墳ではなく前方後円墳である可能性が浮かび上がってきました。そして平成 19 年度、20 年度の追加調査によって、古墳周囲の溝が鍵穴形に巡ることが確認され、円墳ではなく前方後円墳であることが明確になりました。また造られた時代も 4 世紀前半と、生目古墳群の前方後円墳の中でも最も古い段階に造られたことも明らかになりました。

二つ目は、古墳の周囲の溝から地下式横穴墓が 13 基もみつかったことです。21 号墳は古墳の長さが 36 m と小さな前方後円墳ですが、その周囲の溝の中に、ところ狭しと地下式横穴墓が造られていたのです。また平成 22 年度に、その中の 7 基の発掘調査をおこなったところ、5 世紀初め墳という最も古い段階に造られた地下式横穴墓が含まれていることが明らかになり、更なる驚きを与えてくれました。

今後は発掘調査で得られたこれらの成果を基に、貴重な文化財として適切に保存されると共に、多くの皆様に歴史学習の場として、憩いの場として活用いただけるよう整備を進めて参りたいと思います。

最後になりましたが、発掘調査にあたりご協力いただきました関係機関の皆様、ご指導、ご助言をいただきました諸先生方、古墳を大切に守り伝えて下さっている地域の皆様、そして発掘調査、整理作業に従事していただきました作業員の皆様に、心より感謝申し上げます。

平成 28 年 3 月

宮崎市教育委員会

教育長 二見俊一

例　　言

1. 本書は史跡生目古墳群保存整備事業に伴い宮崎市教育委員会が平成 14、19、20、22 年度に実施した生目 21 号墳の発掘調査報告書である。

2. 生目古墳群史跡公園整備専門委員会

委員長 西谷 正（宗像市郷土文化学習交流館 海の道 むなかた館長）

委員 石野博信（兵庫県立考古博物館名誉館長）

北川義男（元南九州大学教授）

白石太一郎（大阪府立近つ飛鳥博物館長）

高瀬要一（元独立行政法人奈良文化財研究所文化遺産長）

北郷泰道（宮崎県教育庁文化財課専門主幹）

柳沢一男（宮崎大学名誉教授）

整備指導 文化庁記念物課

宮崎県教育庁文化財課

3. 調査組織

調査主体 宮崎市教育委員会

発掘調査

〈平成 14 年度〉

調査総括 文化振興課長 小掠 聖

文化財係長 永井 淳生

調査事務 主 事 仁尾 忠尊

調査担当 技 師 稲岡 洋道

技 師 宇田川美和

嘱 託 河野賢太郎

嘱 託 門田奈津子

〈平成 19 年度〉

調査総括 文化振興課長 野田 清孝

主幹兼理文化財係長 山田 典嗣

調査事務 主 査 松崎 留美

調査担当 主 任 技 師 稲岡 洋道

嘱 託 井上 誠二

嘱 託 島井 伸幸

〈平成 20 年度〉

調査総括 文化財課長 小掠 聖

主幹兼理文化財係長 山田 典嗣

調査事務 主 査 松崎 留美

調査担当 主 任 技 師 稲岡 洋道

嘱 託 井上 誠二

嘱 託 島井 伸幸

嘱 託 鈴木 弘子

〈平成 22 年度〉

調査総括 文化財課長 田村 泰彦

副主幹兼理文化財係長 富永 英典

調査事務 主 事 戸高 佑輔

調査担当 主 任 技 師 竹中 克繁

嘱 託 井上 誠二

報告書作成

〈平成 27 年度〉

調査総括 文化財課長 日高 貞幸
埋蔵文化財係長 井田 篤
調査事務主任 主事 谷口 広清
調査担当主任 技師 石村 友規
嘱託 潤内美智子
嘱託 小牟田智子

4. 掲載した現場図面の実測及び現場写真の撮影は、稻岡、竹中、井上、島井、鈴木が分担しておこなった。
5. 掲載した図面の製図、図版作成は石村、潤内、小牟田が、遺物の写真撮影は石村が行った。
6. 本書の執筆、編集は石村が行った。
7. 本書で使用する 1 号墳、3 号墳、5 号墳、7 号墳、14 号墳、22 号墳、23 号墳及びその周辺の測量図は宮崎大学考古学研究室が作成し、それ以外の古墳及びその周辺部の測量図は宮崎市教育委員会が作成した。
8. 本書の図で使用する方位記号はすべて真北を示す。
9. 地下式横穴墓の記述において、本書では竪坑より玄室に向かって「右・左」と述べる。
10. 本書の土層注記に関しては、複数年度にわたって各調査員がおこなったため、詳細な文言に関しては統一することで本来の解釈と異なる可能性があるためあえて統一していない。
11. 出土遺物及び掲載図面、写真等は宮崎市教育委員会で保管している。資料の閲覧・利用等に関しては、事前に宮崎市教育委員会までお問い合わせいただきたい。

本文目次

第Ⅰ章 生目古墳群の概要	第 9 図 生目 21 号墳 C 調査区北東壁土層 断面図、44 号地下式横穴墓 平面図 13-14
第 1 節 地理的環境と歴史的環境 1	第 10 図 生目 21 号墳 H 調査区 土層断面図 16
第 2 節 生目古墳群の既往の調査 4	第 11 図 生目 21 号墳 D 調査区 土層断面図 17
第Ⅱ章 生目 21 号墳の発掘調査成果	第 12 図 生目 21 号墳 L 調査区 北東壁土層断面図 18
第 1 節 生目 21 号墳の概要 7	第 13 図 生目 21 号墳遺物出土状況 20
第 2 節 調査の経過と概要 7	第 14 図 生目 21 号墳墳丘上堆積土 出土遺物実測図 21
第 3 節 墳丘と周溝の調査成果 8	第 15 図 生目 21 号墳周溝出土遺物 実測図① 22
第 4 節 地下式横穴墓の調査成果 19	第 16 図 生目 21 号墳周溝出土遺物 実測図② 23
第 5 節 その他遺構の調査成果 54	第 17 図 生目 20 号地下式横穴墓実測図、 出土遺物実測図 25
第Ⅲ章 総括	第 18 図 生目 37 号地下式横穴墓実測図、 出土遺物実測図 27
第 1 節 生目 21 号墳の墳形について 59	第 19 図 生目 38 号・47 号地下式横穴墓 遺物出土状況、置土範囲 実測図 29-30
第 2 節 生目 21 号墳出土遺物について 59	第 20 図 生目 38 号地下式横穴墓置土上 遺物出土状況実測図 32
第 3 節 生目 21 号墳周溝内の 地下式横穴墓について 61	第 21 図 生目 38 号・47 号地下式横穴墓 実測図 33
第 4 節 生目 21 号墳と地下式横穴墓 62	第 22 図 生目 38 号地下式横穴墓置土 断面図 34
挿図目次	第 23 図 生目 38 号地下式横穴墓 出土遺物実測図① 35
第 1 図 生目古墳群周辺主要古墳・ 古墳群分布図 2	第 24 図 生目 38 号地下式横穴墓 出土遺物実測図② 36
第 2 図 生目古墳群周辺主要遺跡分布図 3	第 25 図 生目 47 号地下式横穴墓 出土遺物実測図 36
第 3 図 生目古墳群主要古墳位置図 5	第 26 図 生目 41 号地下式横穴墓 実測図 37
第 4 図 生目 21 号墳調査前地形測量図 及び調査区配置図 8	
第 5 図 生目 21 号墳平面・断面図 9	
第 6 図 生目 21 号墳墳丘上覆土及び 周溝内堆積土土層断面図 11	
第 7 図 生目 21 号墳墳丘・周溝 セクション位置図 12	
第 8 図 生目 21 号墳 I 調査区 南西壁土層断面図 13-14	

表目次

第 27 図 生目 41 号地下式横穴墓 出土遺物実測図①	38	第 1 表 生目古墳群一覧	6
第 28 図 生目 41 号地下式横穴墓 出土遺物実測図②	39	第 2 表 生目 21 号墳周辺地下式横穴墓 整理表	55
第 29 図 生目 42 号地下式横穴墓 実測図	40	第 3 表 出土土器観察表①	56
第 30 図 生目 42 号地下式横穴墓 出土遺物実測図	41	第 4 表 出土土器観察表②	57
第 31 図 生目 43 号地下式横穴墓平面図 及び遺物出土状況	43-44	第 5 表 出土土器観察表③	58
第 32 図 生目 43 号地下式横穴墓 土層断面図	45	第 6 表 出土玉類観察表	58
第 33 図 生目 43 号地下式横穴墓 遺物取り上げ時土層断面図	45	第 7 表 出土鉄器観察表	58
第 34 図 生目 43 号地下式横穴墓平面図 及び立面図	46		
第 35 図 生目 43 号地下式横穴墓 遺物出土状況実測図	46	写真図版目次	
第 36 図 生目 43 号地下式横穴墓 出土遺物実測図①	47	図版 1 生目 21 号墳空中写真	64
第 37 図 生目 43 号地下式横穴墓 出土遺物実測図②	48	図版 2 生目 21 号墳空中写真	65
第 38 図 生目 43 号地下式横穴墓 出土遺物実測図③	49	図版 3 生目 21 号墳北側周溝 遺物出土状況	66
第 39 図 生目 46 号地下式横穴墓 実測図	51	図版 4 生目 21 号墳墳丘・周溝出土遺物	67
第 40 図 生目 46 号地下式横穴墓 出土遺物実測図	52	図版 5 生目 21 号墳周辺地下式横穴墓 及び出土遺物①	68
第 41 図 生目 39 号・54 号地下式横穴墓 出土遺物実測図	53	図版 6 生目 21 号墳周辺地下式横穴墓 及び出土遺物②	69
第 42 図 生目 21 号墳周溝内地下式横穴墓 出土高坏変遷図	53	図版 7 生目 21 号墳周辺地下式横穴墓①	70
第 43 図 周溝状遺構 1 実測図	54	図版 8 生目 21 号墳周辺地下式横穴墓 出土遺物①	71
第 44 図 生目 21 号墳平面復元図	60	図版 9 生目 21 号墳周辺地下式横穴墓②	72
第 45 図 生目 21 号墳に伴う二重口縁壺・ 単口縁壺・壺形埴輪	60	図版 10 生目 21 号墳周辺地下式横穴墓 出土遺物②	73
第 46 図 生目古墳群主要古墳・ 主要地下式横穴墓変遷図	62	図版 11 生目 21 号墳周辺地下式横穴墓 及び出土遺物③	74

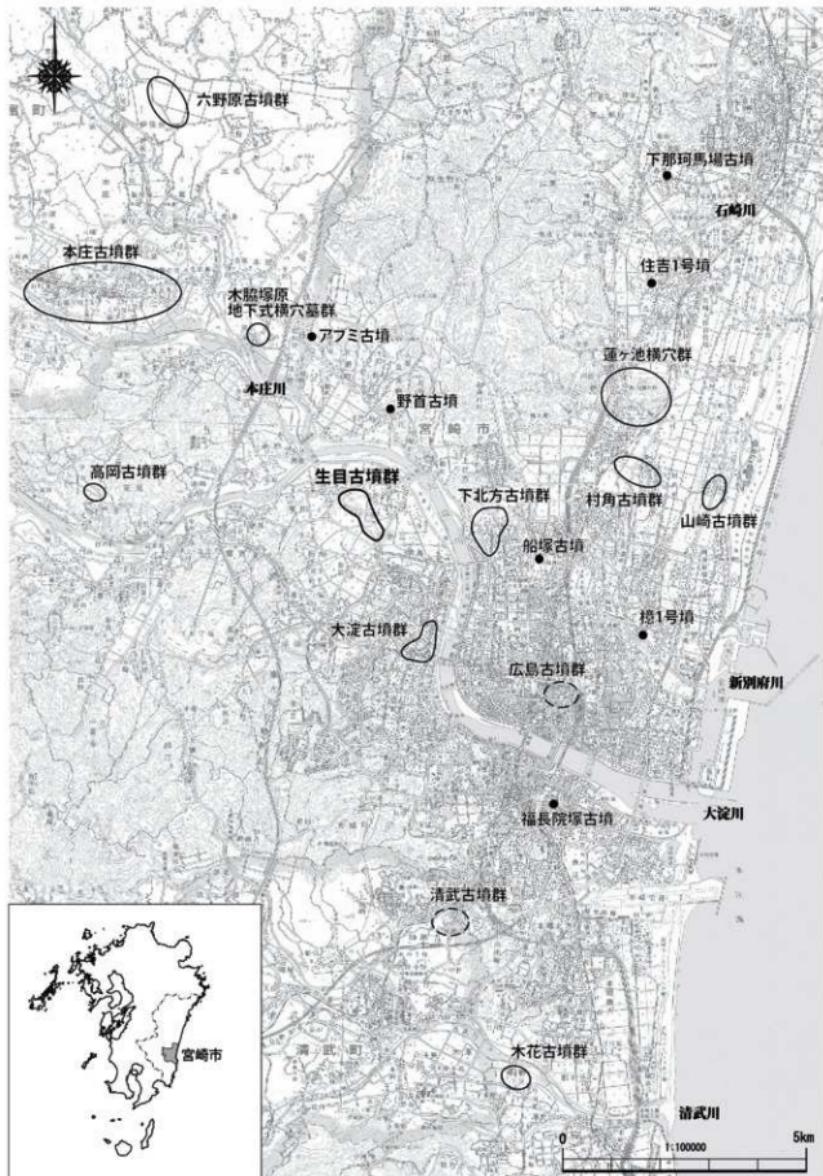
第Ⅰ章 生目古墳群の概要

第1節 地理的環境と歴史的環境

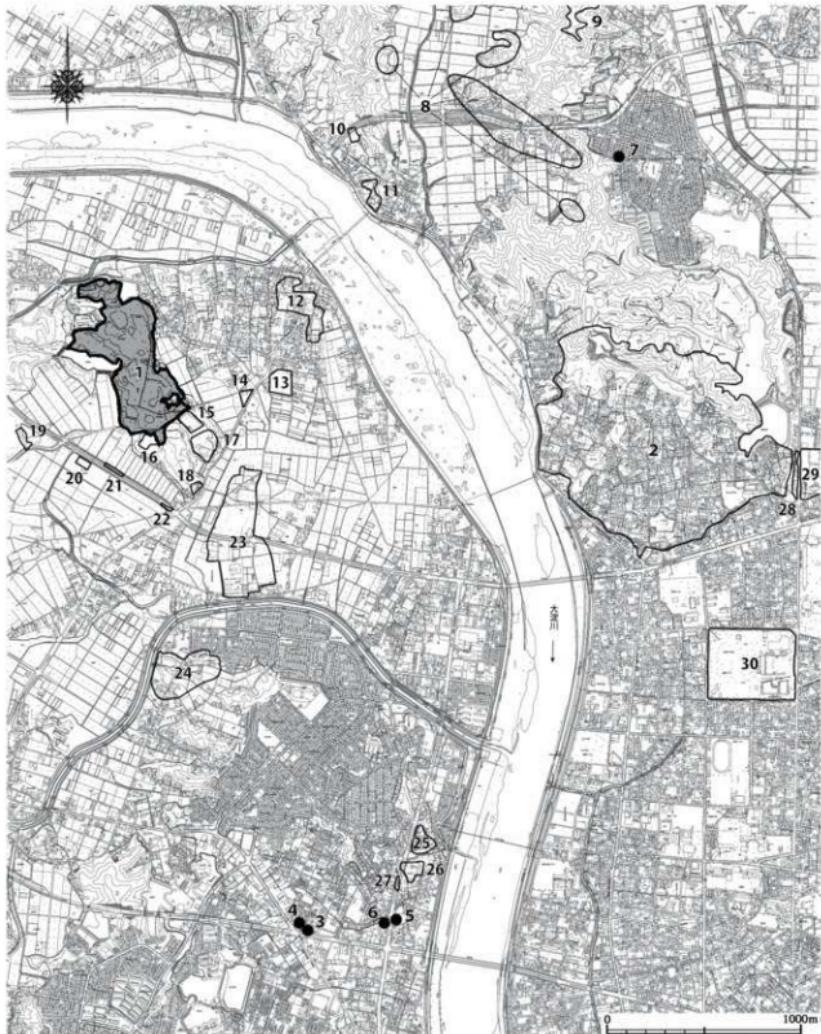
生目古墳群が所在する宮崎県宮崎市は九州島の南東部に位置する。市域の大部分は、耳川河口～西都～綾～青島を結んだ三角地帯に広がる宮崎平野の南端に位置するが、北西側は九州山地、南西側は南那珂山地が連なる。市街地の中心には、県下最大の河川である大淀川が流れ、この大淀川の沖積作用によって、現在の宮崎市街地が位置する低地部が形成された。

生目古墳群は、宮崎市街地から北西へ直線距離で約6km、内陸丘陵部の手前に位置する独立丘陵である跡江丘陵上とその周辺に位置する古墳の総称である。跡江丘陵は、宮崎平野の基盤層である宮崎層群の上に約1m程度の砂岩円礫層を挟み、その上に始良入戸火碎流堆積物（通称シラス：26,000～29,000年前）が5m～10m程度堆積し形成されている。丘陵の平面形はへの字形で、南北1.3km、東西1.2kmを測る。丘陵の北西部は小谷が入り組む地形となっているが、中央から南東部は、標高25～28m程度の比較的平坦な台地状の地形を呈し、生目古墳群の50基を数える古墳の大半はここに築かれている。丘陵眼下の北東側には、現在の跡江集落が広がる微高地が存在し、その向こう側には大淀川が流れている。この大淀川は内陸部から東流してきた流れが跡江丘陵を取り巻くように南へと変える。また丘陵の北西側で、大淀川の支流である本庄川と大淀川が合流することから、河川を非常に意識した立地といえる。

生目古墳群が所在する跡江丘陵上とその周辺には多くの遺跡が分布する。跡江丘陵の南端には、縄文時代早期の塞ノ神式土器や押型文土器が出土している跡江貝塚が所在する。同時期の貝塚として、大淀川を挟んだ対岸側に柏田貝塚がある。弥生時代には、丘陵の南東部に弥生時代中期の環濠集落である石ノ迫第2遺跡が所在する。石ノ迫第2遺跡では弥生時代中期の集落の他、弥生時代後期の集落、弥生時代終末期の円形周溝墓、土坑墓が確認されている。古墳時代の遺跡としては、大淀川の対岸の下北方遺跡群内に、中期から後期にかけて下北方古墳群が造営されている。この下北方古墳群は、生目古墳群と前方後円墳の築造時期をずらすように造られており、大淀川下流域における首長墓系譜の変動が明瞭に現れている。また生目古墳群から南東に直線距離で3kmほどの位置に、前期末から中期の古墳群と考えられている大淀古墳群が所在する。大淀古墳群は生目古墳群とは異なり低地に立地し、3号墳では壺形埴輪が採用されているものの、生目古墳群とは系譜が異なる。跡江丘陵に近接する古墳時代の集落遺跡としては、丘陵の南東約0.8kmの位置に古墳時代中期から後期の堅穴住居が確認されている間越遺跡や、現在の跡江集落が立地する微高地に営まれた古墳時代中期の大屋敷遺跡がある。古墳時代以降の遺跡としては、丘陵の南に近接する微高地上、現在の生目の杜スポーツ公園が立地する場所に、古代の掘立柱建物、井戸などが検出された深田遺跡が所在する。中世になると、跡江丘陵の南東端に跡江城が築かれる。また生目3号墳、22号墳では、後円部3段目の肩口を削る形で薬研堀を巡らせていることから、陣城のような施設が後円部墳頂平坦面に構築されていた可能性がある。跡江集落とその周辺には、近世の庚申塔、供養塔が点在しており、生目古墳群周辺では、連綿と人々の営みが続いてきたことがわかる。



第1図 生目古墳群周辺主要古墳・古墳群分布図 ($S=1/100000$)



第2図 生目古墳群周辺主要遺跡分布図 (S=1/25000)

第2節 生目古墳群の既往の調査

生目古墳群は前方後円墳8基、円墳42基、総数50基の古墳群である。昭和18年9月8日の国指定の際には、前方後円墳7基、円墳36基の計43基であったが、その後の発掘調査によって、墳丘が消滅した古墳の確認や、墳丘と思われたマウンドが昭和初期に切通しの道を造る際の廃土山であったことが確認されるなどによって、現在の数字となっている。

生目古墳群には、九州島で唯一、古墳時代前期に位置付けられる3基の100m級前方後円墳が存在する。その中で最大規模の3号墳は、墳長137m、後円部3段、前方部2段築成である。これまでに19ヶ所の調査区を設定し調査をおこなっているが、3号墳に伴う遺物は出土していない。3号墳は墳丘斜面を葺石、平坦面を敷石で覆われており、墳丘全面が石で覆われている。また墳丘外にも幅約1.5mの礫敷帯が巡ることが明らかになっている。墳形から4世紀中頃の築造と考えられている。

3号墳に次ぐ規模である1号墳は、丘陵の北端から小谷を隔てた独立丘陵上に立地する。墳長は前方部先端の削平のため、現況長となるが120mを測る。平成25～27年度に発掘調査によって後円部、前方部共に3段築成であることが明らかになった。3ヶ年で700m²以上の調査区を設定し調査をおこなったが、1号墳に伴う遺物は出土しておらず、築造時期は未だ確定的ではないが、葺石の退化傾向や古墳の立面形から4世紀中頃以降の築造の可能性が高い。

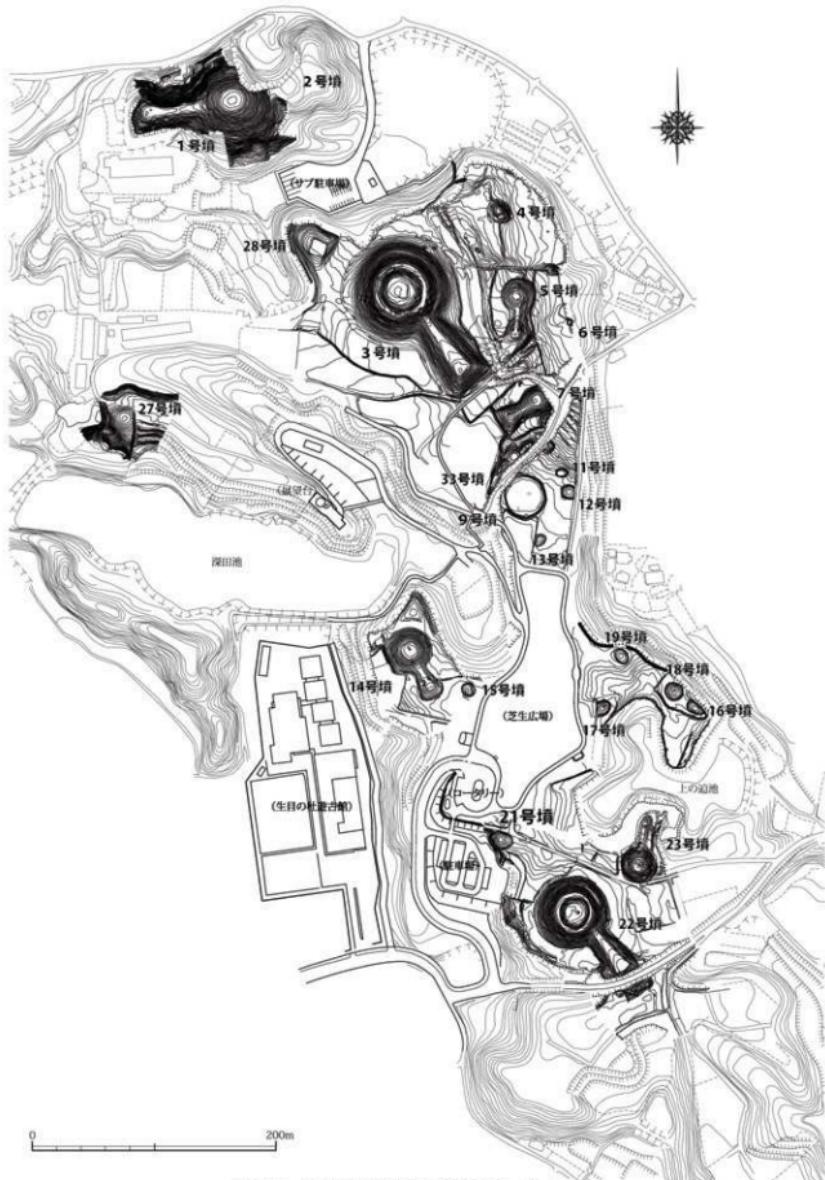
22号墳も前方部の先端が削平されており、復元長は101mである。発掘調査によって、後円部は3段築成であり、焼成前穿孔の壺形埴輪をもつことが明らかになっている。また前方部は、現地表の観察から2段築成と考えられる。前方部の右側面には発掘調査によって張り出し部が確認されており、そこから集成編年4期に位置付けられる土師器が出土している。

墳長63mの14号墳は、後円部、前方部共に2段築成で、葺石が良好な状態で残存しており、墳丘斜面、平坦面共に石で覆われていたことが明らかになっている。また壺形埴輪を、墳頂平坦面、スロープ上に樹立していたことが明らかになっている（テラス面にも樹立していた可能性が高い）。この壺形埴輪の形状から、14号墳は22号墳に後続する時期に位置付けられている。

14号墳に後続する5号墳は、墳長57mを測り、後円部、前方部共に2段築成である。14号墳と同様に壺形埴輪を樹立するが、後円部、前方部墳頂面の平野部側にのみ少量樹立している。また、葺石も斜面部に限定され、埴輪、葺石共に退化傾向にある。

墳長46mの7号墳は、後円部南西側から後円部墳丘内の中心方向に玄室をもつ、大型の妻入り地下式横穴墓が確認されており、構築状況、規模から7号墳の中心埋葬施設の可能性が高い。また、この地下式横穴墓と墳丘主軸を挟んだ対面側の位置から造り出しが検出され、多量の土師器、須恵器が出土しており、これらの遺物から集成編年8期に比定されている。

前方後円墳以外の円墳に関しても、その実態が明らかになりつつある。前方後円墳の空白期に築造されるもの（16号墳：集成編年10期）や前方後円墳と並存する可能性があるもの（12号墳：集成編年5期）とそのあり方は一様ではない。また古墳群中最大規模の円墳である9号墳（径38m）は33号墳を前方部とする墳長60mの前方後円墳である可能性が非常に高いが、くびれ部が完全に失われているため断定は困難である。



第3図 生目古墳群主要古墳位置図 (S=1/4000)

第1表 生目古墳群一覧

現No	旧No	墳形	規模(m) 長×巾径×高	規格	葺石	出土遺物	備考
1	6	前円	120以上×73×12.7	後円部3段、前方部3段	有		平成25~27年度調査
2	5	円	30	2段	無		
3	17	前円	137×77×11	後円部3段、前方部2段	有		後円部上段に中世の墓研堀が遡る
4	18	円	21		無		
5	19	前円	57×29×4.4	後円部前方部2段	有	壺形埴輪、土師器壺、高杯	周溝外側で19号地下式横穴墓を確認
6	20	円	8		無		
7	21	前円	46×24×3.9	後円部2段、前方部2段、造出し有	有	土師器(壺、蓋、楕、高杯)、須恵器(杯、高杯、ハソク、把手付鉢、大甕、脚台付壺、筒形器台)石製乗玉、石製小玉、石製防錐車	後円部中心に向かって、18号地下式横穴墓を構築。その他周溝内5.8m、周溝外から4基の地下式横穴墓を確認。
8	22	円		無段築	無		周溝内に2基の地下式横穴墓
9	25	円(前円)	38(60)	墳丘上部削平	無		33号墳を前方部とする前方後円墳か
10	24		11				古墳ではない
11	23	円	10				
12		円	12				昭和37年度確認
13	26	円	11				
14	27	前円	63×39×4.4	後円部、前方部2段	有	壺形埴輪	周溝内より22号地下式横穴墓を確認
15		円	11		無		昭和37年度確認
16	30	円	16		無	須恵器	
17	32	円	17		無	土師器(壺、高杯)	周溝内より地下式横穴墓を確認
18	29	円	17		無		
19	28	円	15		無		周溝外側で地下式横穴墓を確認
21	35	前円	36×22×3.3	無段築か	無	壺形埴輪、土師器(高杯、蓋、鉢、小型丸底壺等)	周溝内より地下式横穴墓を確認
22	34	前円	101×60×9.2	後円部3段、前方部2段か?	有	壺形埴輪、土師器(壺、高杯、蓋)	周溝内より、張り出し部、23号地下式横穴墓を確認
23		前円	57×30×4.9		無		
24	2	円	10				
25	3	円	11				
26	4	円	14				
27	13	円	19				
28	14	円	20		無		
29	15	円					
30	16	円					
31	未F	円			無		平成17年度確認(5号墳と7号墳の間)
32	未G	円			無		平成16年度確認(7号墳南側)
33	41	円			無		平成14年度確認(9号墳・新30号墳間)・概要VIで旧5号墳と認証・調査記
34	42	円					
35	36	円					平成25年度調査、古墳ではない
36	1	円					
37	7	円					
38	8	円					
39	9	円					
40	10	円					
41	11	円					
42	12	円					
43	37	円					
44	38	円					
45	39	円					
46	40	円					
47	未A	円	10.5		無		11号地下式横穴墓を埋葬主体
48	未B	円	9.5		無		12・13号地下式横穴墓を埋葬主体
49	未C	円	17		無		
50	未D	円	10.5		無		14号地下式横穴墓を埋葬主体
51	41	円					
52	42	円					
53	43	円					

第II章 生目21号墳の発掘調査成果

第1節 生目21号墳の概要

生目21号墳の位置 生目21号墳は、現在は史跡公園の入口付近に位置し、来園者が最初に目にする古墳の中の1基である。公園開園以前から周辺の土地改変が著しく、旧地形の復元は困難であるが、跡江丘陵の西側端部付近に後円部を設けていたと考えられ、西から南方向の眺望を意識した立地といえる。南東側に近接する位置には、復元墳長101m、古墳群中3番目の規模をもつ生目22号墳が存在する。22号墳のすぐ北側には現況57mの生目23号墳が所在し、21号墳を含む3基の前方後円墳が近接する位置に築造されている。21号墳は昭和18年の国史跡への指定では円墳として指定されており、その時点においてすでに前方部を削平され、円丘部のみ残されていたと考えられる。平成14年度の調査時には、墳丘の北側に市道と私道が結節するT字路が存在し、墳丘の西側は高さ2mの崖となっており、大きな改変を受けていることを物語っていた。

基本層序 生目古墳群が所在する跡江丘陵では以下が基本的な層序となり、21号墳周辺も同様であるが、丘陵縁辺部に位置することから、北東から南西へと地山面が降る地形となっている。基本層序の詳細は『生目古墳群I』の第I章第2節を参照されたい（宮崎市教委2010）。

I層：表土。

II層：黒褐色土(0～50cm)桜島第3テフラ（文明ボラ1471年）、新燃享保軽石（1717年）を含む。

III層：黒ボク土（0～30cm）Th-S（霧島高原スコリア11～13世紀）を含む。

IV層：黒ボク土（0～30cm）自然堆積層。V層と基本的に土質は同一。古墳構築後に堆積した層。

V層：黒ボク土（0～50cm）自然堆積層。IV層と基本的に同一であるが古墳構築以前の層。同層下部はVI層との漸移層となり両者の混合土となる場合がある。

VI層：アカホヤ火山灰層（0～30cm）K-Ah（約7300年前）。テフラ層。橙色系の色調。

VII層：褐色～暗褐色土（80cm前後）ローム層。下位に霧島小林降下軽石（約16,700年前）を含む。

VIII層：シラス（500cm以上）テフラ層。上位にATが見られる地点もある。上位から下位に向かって黄色、ピンク、白色と色調が変化する。姶良入戸火碎流堆積物（26,000～29,000年前）。

その他V層とVI層の間に褐色ローム層が、VI層とVII層の間に牛の脛ローム層が確認される地点もあり、細かな層序は地点毎で異なる。

古墳を調査対象とした場合、V層以下が地山となる。21号墳もV層（場所によってはVI層）以下を削り出し、その上部に盛土を施すことによって墳丘を構築している。

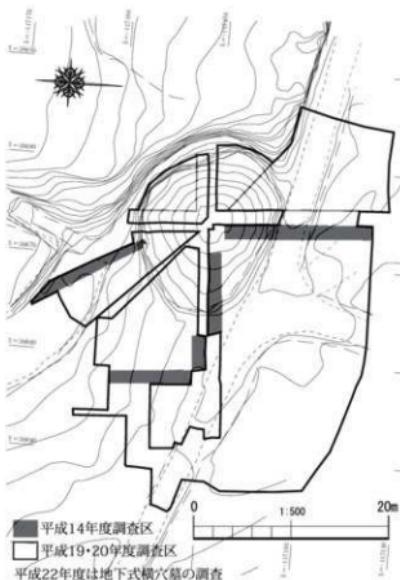
第2節 調査の経過と概要

生目21号墳は前述のとおり、昭和18年に円墳としての指定を受けており、調査前の状況も円丘部が残存するのみであった。しかし、平成14年度にトレンチ調査をおこなった結果、円墳であれば検出されるであろう位置から周溝が検出されず、前方後円墳もしくは造出付円墳と

想定されるような状況で周溝が検出された。この結果を受け、平成19・20年度に全面的な発掘調査を実施し、前方部が削平された前方後円墳であることが確認された。またこの発掘調査の中で、周溝内から13基の地下式横穴墓の可能性がある遺構が検出された。周溝内に構築されており、古墳に付随する埋葬施設であることから、その取り扱いについて文化庁、宮崎県文化財課と協議を重ね、検出状態で留めた場合、地下式横穴墓と断定ができないこと、そのため正確な基数が把握できること、また今後同種の遺構が検出された場合に資すること等を目的として、13基のうち7基の地下式横穴墓において、平成22年度に発掘調査を実施した。発掘調査の結果、宮崎平野部最古に位置付けられる38号、43号地下式横穴墓の確認や、稀有な事例である地下式横穴墓の切り合い（38号、47号地下式横穴墓）などの成果があった。

第3節 墳丘と周溝の調査成果

生目21号墳は前節での記述どおり、前方部が削平を受けていたため、発掘調査以前は径20m程度の円墳と認識されていた。平成19・20年度の調査では、平成14年度のトレンチ調査の結果に基づき、墳丘、周溝共にセクション部分と一部擾乱が著しい部分を除いた上で、全面的に表土、堆積土を除去した。前方部の削平は墳丘下部の地山削り出し部分にまで及び盛土部分は完全に失われていたが、周溝が遺存していたため前方後円形の墳丘を明らかにすることができた。

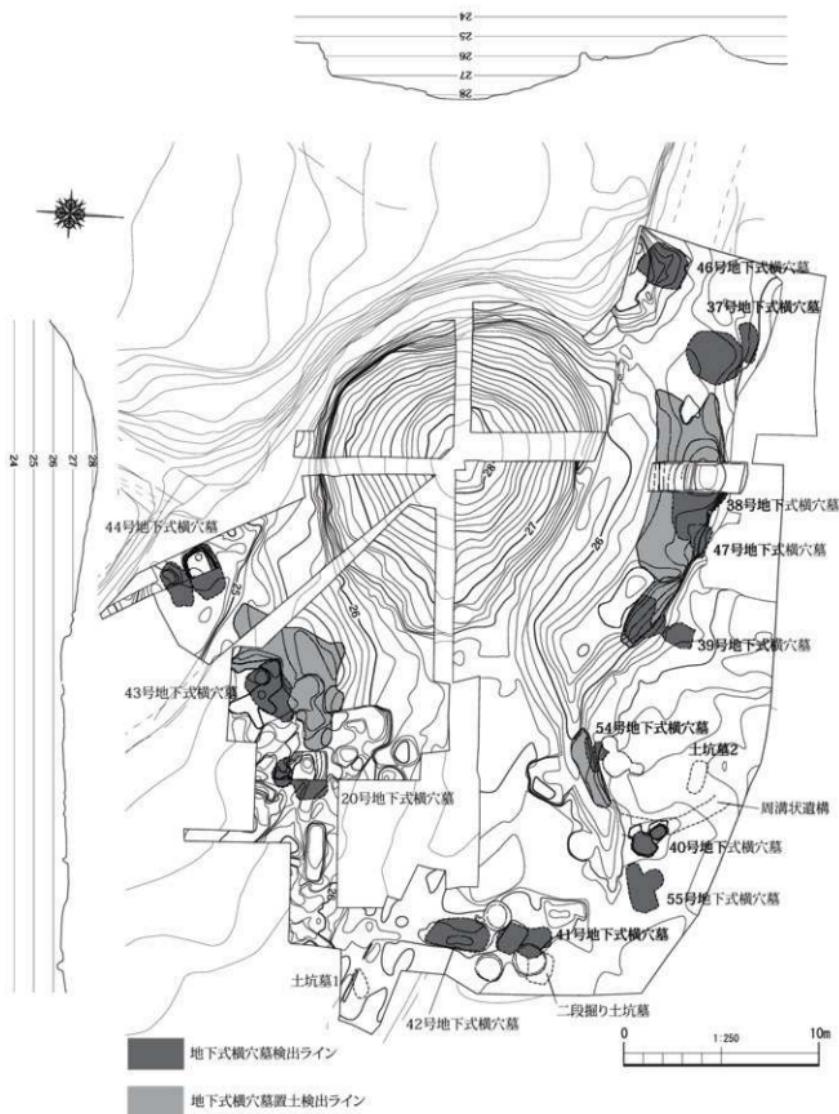


第4図 生目21号墳調査前地形測量図及び調査区配置図(S=1/500)

墳丘 21号墳は丘陵縁辺部に築造された古墳であり、前述した墳丘下部の地山の状況を確認すると、北東から南西へと旧地形が下降傾斜している（第6図：断面図）。ここから墳丘の築造にあたっては、丘陵端部の旧地形を最大限に活用し、大きな造成をおこなうことなく墳丘基底部を削り出し、盛土をおこなったと考えられる。眺望に優れる西側から南側の丘陵下から見上げた場合、丘陵縁辺部際に後円部が位置することから、墳丘をより大きく見せる視覚的効果があったと思われる。

現況墳丘表面から葺石は検出されておらず、周溝内からも転落石が全く検出されていないため、築造当初から葺石は未施工と考えられる。

墳丘の盛土は微小なアカホヤやロームの粒子を含有する褐色土で構成されている。遺構保護の観点から墳丘の断ち割りをおこなっておらず、墳丘上の堆積土と墳丘盛土が非常に近似することから判断が困難であったが、上記2種の土の粒子を含有する点で区分し、盛土と判断した。盛土は、周溝掘削時に最も多く得られる土



第5図 生目21号墳平面・断面図(S=1/250)

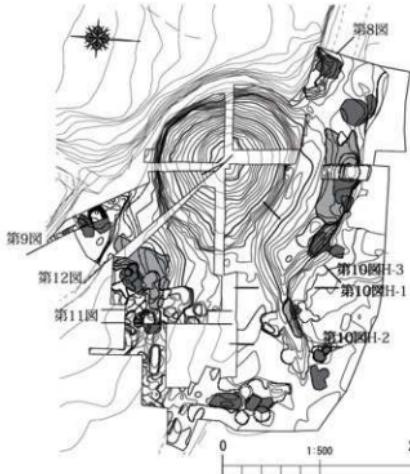
が、堆積が厚い基本層序VII層の褐色、もしくは黒褐色のロームであることから、それをベースとする土と想定される。ただし基本層序V層の黒ボク層や基本層序VI層のアカホヤ火山灰層も掘り抜いているにもかかわらず、それらの土が盛土内に集中する箇所は確認されていない。このことから掘削土を攪拌し盛土として利用した可能性もある。

墳丘の段築に関しては、後円部墳丘断面ラインをみると2ヶ所の傾斜変換点が確認されるが、墳丘基底部からの立ち上がり角度や、極めて狭い墳頂平坦面の状況を鑑みると、検出された墳丘斜面は本来の形状を保っているとは考え難く、段築について明らかにすることは困難である。後円部の墳頂では6m弱の範囲でシラスブロックを顕著に含む盛土が検出されている。墳丘、周溝共に削平、搅乱が著しいため盛土量の計算は困難であるが、周溝最深部ではシラス層に達している箇所も存在することから、構築順序からみると、周溝最深部の土が墳丘最上部に盛られることに関して違和感はない。ただし概要報告書でも指摘されているが、墓坑の埋土の可能性も否定はできない。前述のとおり墳頂平坦面は土の流出により大きく変形していると考えられ、墳頂平坦面端部が流れ落ち、中央の墓坑埋土部分が高く残され検出された可能性もある。墳頂平坦面からは、このシラスブロック含有土以外、顕著な土の違いは確認されていない。

前方部は盛土部分に加え、後円部で確認されることから、前方部にも存在したはずの基本層序V層の地山削り出し部分まで削平されている。また前方部南側は周溝も含め、搅乱が著しく本来の形状を保っている部分は極僅かである。搅乱の影響が比較的少ない北側周溝から前方部の形状をみると、くびれ部から前方部隅角に向かって大きく開く、いわゆる撥形の形状を呈す。

周溝 21号墳の周溝は「九州南部型前方後円墳」（橋本2012）の特徴の一つである、前方部隅角で周溝が収束する形状を呈す。周溝の全体形状をみると、墳丘の形状に即した龜穴形であるが、後円部側が周溝の幅、深さの値が共に大きく、くびれ部から前方部に入ると幅、深さ共に値が小さくなり、前方部隅角付近で収束する。ただし、21号墳の場合、隅角で一度途切れた周溝が、前方部前面から幅1m、深さ30cmの規模で検出されている。大きく削平を受けているため本来の規模は不明であるが、この位置に生目41号地下式横穴墓が構築されていることから、ここが前方部端より外側であることは間違いない。また21号墳周囲の地下式横穴墓が、例に漏れず周溝内に竪坑を設けることから、この位置に周溝が存在した蓋然性は高い。尚、周溝外縁肩部は、遺存状態の良い北側周溝においても、アカホヤ火山灰層下位まで削平を受けていることから、周堤の有無は確認できない。また南側周溝は、前述のとおり搅乱が激しく、周溝床面から外縁側に向けての立ち上がりは僅かにL調査区（第12図）で確認されたのみである。以上の点から南側周溝外縁肩部の状況は明らかにすることはできないが、南側周溝内にも周溝外縁の立ち上がりを活用する地下式横穴墓が構築されていることから、旧地形が南側に向け下降傾斜しているものの、外縁立ち上がりは一定程度の高さを有していたと考えられる。

土層堆積 21号墳の墳丘上の土層堆積は、削平が著しい前方部は無論のこと、後円部に関しては墳丘面上の堆積土はほぼ表土という状況であった。一方で周溝に関しては、一部調査区では古墳構築後の自然堆積土も残存しており、周溝埋没の過程を窺い知ることができると共に、地



第7図 生目21号墳墳丘・周溝セクション位置図(S=1/500) C調査区北東壁土層断面（図9）後円部南東側に墳丘主軸から南へ65°振った位置に設定した。上層は大きく搅乱を受けており、搅乱土直下から削平を受けた墳丘、周溝が検出された。墳端も削平を受けており本来の立ち上がりは確認できなかった。生目44号地下式横穴墓をちょうど半分割する位置にセクションが設定されており、竪坑のみをそれに合わせ半裁している。羨門付近に異なる埋土がみられ、追葬が想定される土層堆積状況である。玄室は崩落している。セクションの南東端付近には、Th-Sを多量に含む中世の溝状遺構が検出されている。断面形は緩いU字形で幅は3.2m以上、深さは0.9mを測る。

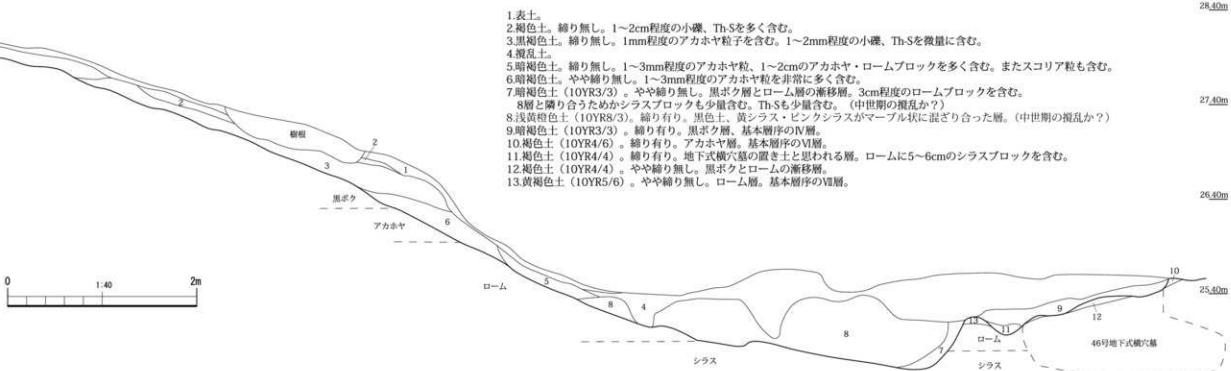
H調査区周溝土層断面（第10図） 残りが比較的良好北側周溝に、くびれ部付近主軸直交（H-1）、前方部隅角寄り（H-2）、後円部（H-3）の3ヶ所を設定した。いずれのセクションでも墳丘裾部の立ち上がりが検出されているが、上層は搅乱を受けており、前方部側の2ヶ所では墳丘、外縁側共に削平が著しい。周溝は基本的にレンズ状の堆積を呈しており、自然に埋没したと考えられる。

D調査区土層断面（第11図） 前方部南側の中程の位置に主軸に直交する形で設定した。上層は大きく搅乱され、周溝の形状も明らかではない。周溝外縁立ち上がり付近と見られる位置に生目20号地下式横穴墓が検出されている。詳細は地下式横穴墓の節で記載する。

L調査区北東壁土層断面（第12図） 後円部南東側に墳丘主軸から南へ45°振った位置に設定した。墳丘南側に設けた他のセクションと同様に上層は大きく搅乱されている。周溝内からは僅かに基本層序IV層の黒色土が検出され、その下層から生目43号地下式横穴墓に伴う置土が検出されている。南側周溝では唯一、周溝外縁側の立ち上がりの変換点が検出されている。

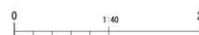
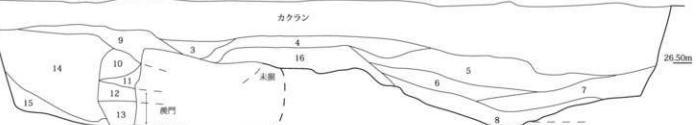
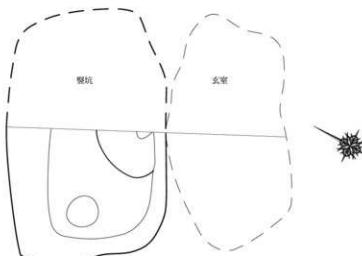
下式横穴墓の構築状況も把握可能であった。

I調査区南西壁土層断面（第8図） 後円部北西側、墳丘主軸から北へ45°振った位置に設定した。セクション位置では、墳丘面、周溝底部の残りが非常に悪く、基本層序IV層が残存しているのは周溝外縁立ち上がり部分のみであった。その周溝外縁立ち上がりを利用して46号地下式横穴墓が構築されている。46号地下式横穴墓の上面からは置土が検出されている。周溝底部はTh-Sを含む中世段階と思われる造作により大きく搅乱され、墳端は不明である。



第8図 生目21号墳I調査区南西壁土層断面図(S=1/40)

- 1.表土。
2.褐色土。縦り無し。1~2mm程度のアカホヤ粒を含む。
3.黒褐色土。縦り無し。Th-Sを多量に含む。地下式横穴墓玄室天井崩落に伴う流れ込み。
4.暗褐色土。縦り無し。Th-Sを多量に含む。地下式横穴墓玄室天井崩落に伴う流れ込み。
5.黒褐色土。縦り有り。Th-Sを多量に含む。中世溝理土。
6.暗褐色土。縦り有り。Th-Sを多量に含む。中世溝理土。
7.黒褐色土。縦り有り。Th-Sを多量に含む。中世溝理土。
8.褐色土。やや縦り有り。Th-Sを多量に含む。中世溝理土。
9.黒褐色土。やや縦り有り。1~5cm程度のシラスブロックを含む。追跡時の地下式横穴墓蓋土。
10.黒褐色土。縦り無し。1~3cm程度のシラスブロック多量に含む。追跡時の地下式横穴墓竪坑埋土。
11.褐色土。縦り無し。1~3cm程度のシラスブロック微量に含む。追跡時の地下式横穴墓竪坑埋土。
12.黒褐色土。縦り無し。1~3cm程度のシラスブロック微量に含む。追跡時の地下式横穴墓竪坑埋土。
13.褐色土。縦り無し。1~3cm程度のシラスブロック多量に含む。追跡時の地下式横穴墓竪坑埋土。
14.褐色土。縦り有り。1~10cmのシラスブロック多量に含む。初耕時の地下式横穴墓竪坑埋土。
15.黄褐色土。縦り有り。1~10cmのシラスブロック多量に含む。初耕時の地下式横穴墓竪坑埋土。
16.褐色土。縦り有り。1~15cm程度のシラスブロック多量に含む。地下式横穴墓天井の崩落土。



第9図 生目21号墳C調査区北東壁土層断面図、44号地下式横穴墓平面図(S=1/40)

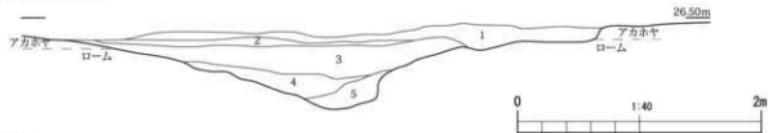
遺物出土状況（第13図） 遺物は墳丘上堆積土、周溝内、地下式横穴墓から出土している。この中で墳丘上堆積土から出土している遺物は、墳丘を築造する際に、周溝掘削土、周溝外縁を濾き取った土を墳丘盛土としていると考えられるが、その盛土に混入していた遺物が、雨水等の影響で盛土が流出し、堆積土となった際に混入したものである。そのため21号墳築造以前の遺物が主体である。

周溝内の遺物出土状況は明らかな粗密がみられる。地下式横穴墓が構築されている近辺では、地下式横穴墓の堅坑上や置土上に配置されたとみられる遺物が転落し出土している。それらを除けば、北側周溝のくびれ部付近から集中的に出土する傾向にある。出土遺物をみると二重口縁壺や穿孔が施された壺底部（接合はしなかったが二重口縁壺、壺形埴輪の可能性が高い）が散見されることから、周溝内に選択的に遺棄された祭祀遺物ではなく、本来は墳丘上に配置された遺物を多く含んでいると考えられる。つまり墳丘北側くびれ部付近に二重口縁壺、壺形埴輪が配置されていたと想定される。また後円部北側周溝からも二重口縁壺が出土していることから、少なくとも墳丘の北側には二重口縁壺、壺形埴輪が配置されていたと考えられる。21号墳は丘陵縁辺部に位置するが、丘陵下からの眺望が優れているのはむしろ南側から西側であり、南側、西側にも二重口縁壺、壺形埴輪が配置されていたと思われるが、搅乱、削平が著しいため出土しなかったと想定される。

墳丘上堆積土出土遺物（第14図） 1、2は弥生土器の器台である。1は外面に細かなミガキを施している。2は大型の器台で、口縁部が貼付部から剥離しているが、やや内湾しながら立ち上がる形状になると思われる。口縁部外面に重弧文を施す。胴部外面はハケメ調整で円孔がみられる。3～5は弥生土器の壺である。3は復元口径13.4cmの小型の複合口縁壺で、口縁部はやや内湾しつつ立ち上がる。口縁部外面には荒い波状文が施され、口縁端部はシャープに仕上げられている。肩部は撫肩気味で胴部は強く張り出さない。4は広口壺、もしくは器台の口縁部付近の破片と思われる。口縁端部がヨコナデにより凹線状に窪む。5は壺肩部片である。外面は細かなハケメが施されている。6は鉄器片である。小片のため全容は不明であるが、小型の袋状鉄斧の袋部、もしくは鉄錘の袋部と思われる。1～5の土器に関しては、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭に位置付けられ、21号墳に伴う遺物ではなく、墳丘盛土に混入した遺物が流土と共に堆積したものと考えられる。6の鉄器は、21号墳の墳頂埋葬施設が搅乱を受けた痕跡はみられないため、1～5の土器類と同様に弥生時代の土坑墓などに副葬された遺物の混入と思われる。

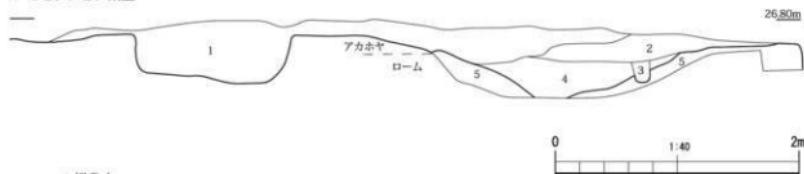
周溝出土遺物（第15・16図） 7は土師器高坏脚部である。剥離の状況から脚部と坏部の接合を充填法によりおこなっている。8も高坏であるが器壁が厚手で坏部と脚部の接合状況が明瞭ではない。外面は縦方向のミガキが施されている。9は土師器小型丸底壺である。口径は11.9cm、器高は14.1cmを測る。口縁部は僅かに内湾し、胴部は中位付近が最大径となる。10は弥生土器の鉢である。破片資料であるが、口径23.7cmに復元できる。浅いボウル状の胴部に、ぐの字状に屈曲する頸部を有する。11は甕頸部片である。外面は細かなハケメ調整が施されて

H-1セクション西壁



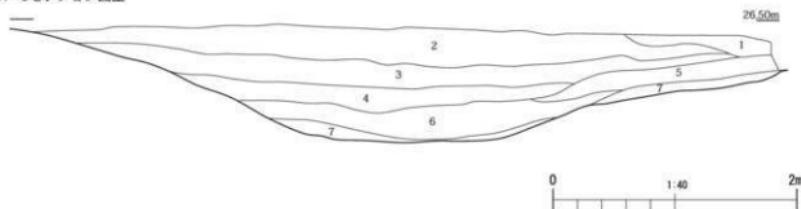
1. 潜乱土。
2. 黒褐色土(Hue7.5YR3/1)。締りやや弱い。砂質土。
3. 黒色土(Hue7.5YR4/1)。締り有り。砂質土。
4. 褐色土(Hue10YR4/4)。締り有り。砂質土。
5. 暗褐色土(Hue10YR3/4)。締りやや有り。砂質土。2cm程度のアカホヤブロックを少量、2~3mm程度のアカホヤ粒を含む。

H-2セクション東壁



1. 潜乱土。
2. 黒褐色土。締り有り。砂質土。基本層序IV層にあたる黒ボク層。1mm程度の暗褐色粒子を含む。
3. 黑褐色土。締り無し。樹根か。
4. 暗褐色土。締り有り。1~10cm程度のアカホヤブロック、1cm程度のロームブロックを多量に含む。周溝埋土。
5. 灰褐色土。締り有り。1cm程度のロームブロック含む(地山)。

H-3セクション西壁



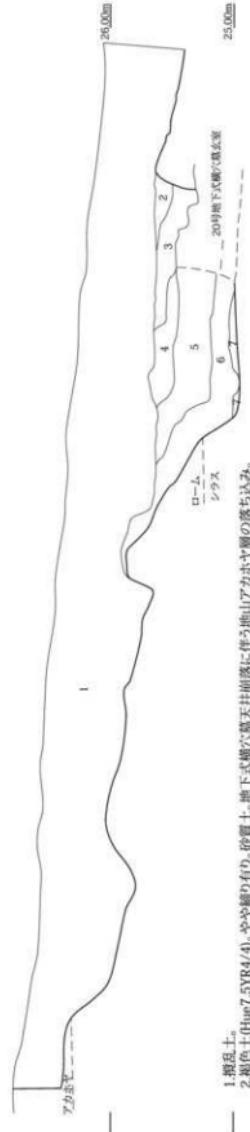
1. 潜乱土。
2. 黒褐色土(Hue7.5YR3/1)。締り有り。砂質土。基本層序III層にあたるスコリア層。Th-S多量に含む。
3. 黑褐色土(Hue7.5YR2/1)。締り有り。砂質土。2層と4層の漸移層。微量にTh-Sを含む。
4. 黒色土(Hue7.5YR2/1)。締り有り。砂質土。基本層序IV層にあたる黒ボク層。
5. 黑褐色土(Hue10YR2/3)。締り有り。砂質土。3層と7層の漸移層。
6. 暗褐色土(Hue10YR3/4)。締り有り。砂質土。4層と地山(基本層序VII層)の漸移層。
7. 暗褐色土(Hue10YR3/4)。締り有り。砂質土。4層と地山(基本層序VII層)の漸移層。

第10図 生目21号墳H調査区土層断面図(S=1/40)

いる。12~15は土師器二重口縁壺である。12は復元口径31.5cm、器高46.1cm、底径7.7cmを測る。胴部は中位よりやや上に最大径をもつ球形で、平底の底部を有する。肩部内面付近の指オサエが顕著である。底部は内底を充填することによって閉塞されており、充填部分がやや上げ底となっている。頸部は僅かに外斜しつつ立ち上がるが、直線的ではなく、中位付近で膨らむエンタシス状の形状である。第1次口縁はそこから大きく直線的に開き、第2次口縁との接合部はくの字状に屈曲する。口縁部が大きく歪んでいる。13は頸部から第1次口縁の破片である。12に類似する形態と思われる。14と15は接合しなかったが、胎土や出土地点からみると同一

27.00m

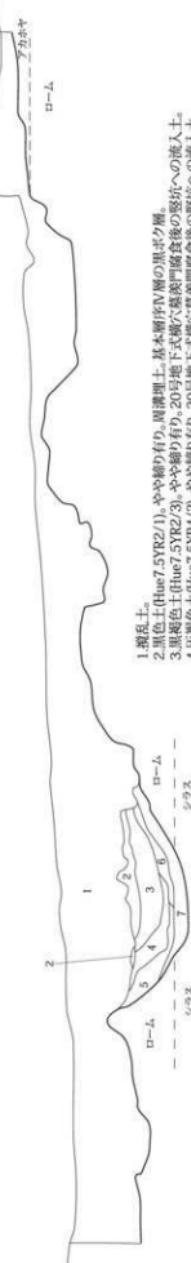
東壁



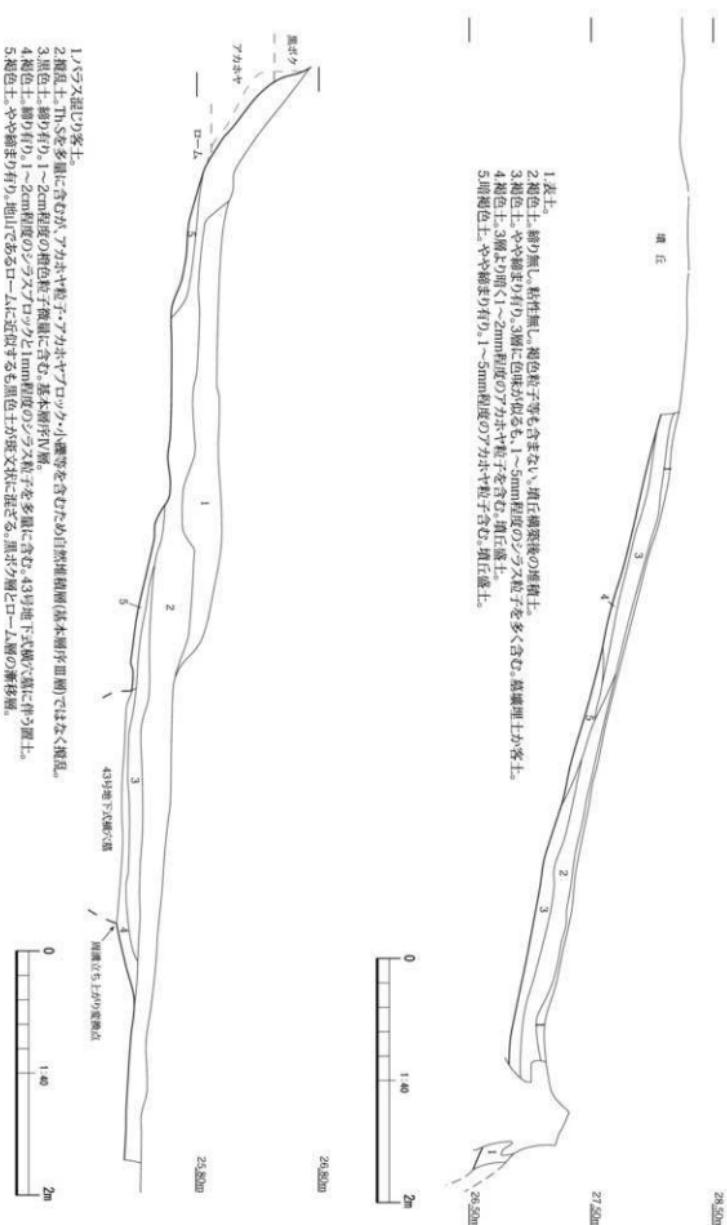
26.60m

17

東壁



第11図 生目21号墳D調査区土層断面図(S=1/40)



第12図 生目21号埴丘調査区北東壁土層断面図(S=1/40)

1. パラス混じり客土。泥質土中に含むが、アカホヤ粒子・アカホヤブロック・小礫等を含めたため自然地盤層(基本構造面Ⅲ面)ではなく類似。
2. 棚風土。In-Sを多量に含むが、アカホヤ粒子・アカホヤブロック・小礫等を含めたため自然地盤層(基本構造面Ⅲ面)ではなく類似。
3. 黒色土。細の有り。~2cm程度の褐色粒子を含む。基本構造面Ⅲ面。
4. 褐色土。細の有り。~2cm程度の褐色粒子を含む。基本構造面Ⅲ面。
5. 褐色土。やや細まで有り。地出であるロームに近似するも黒色土が斑文状に混ざる。黒ボク層とローム層の漸移層。

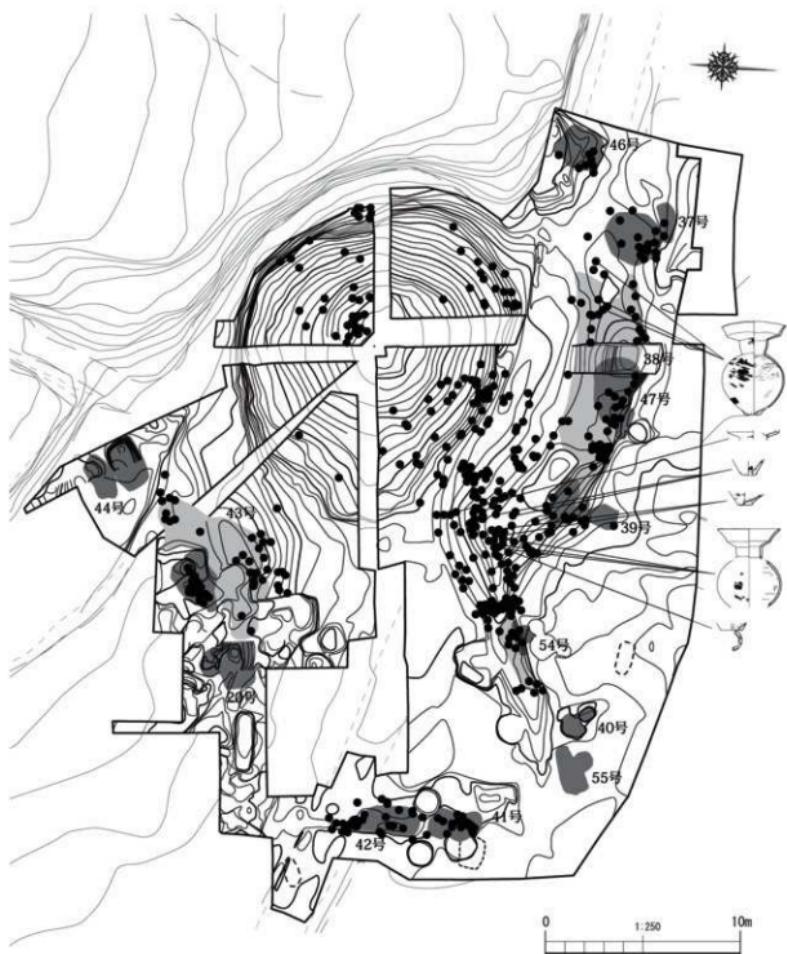
個体と思われる。14は口径30.1cmに復元できる。胴部は中位付近に最大径をもつやや扁平な球形であり、12とは異なり頸部は直立気味に立ち上がり高さも低い。第1次口縁よりも第2次口縁が長い形状で、接合部はくの字状に屈曲する。16～18は壺形埴輪の底部である。いずれも北側周溝くびれ部付近から出土であるが、各々製作技法が異なる。16は復元底径10.4cmであり、内底面に粘土を充填せず穿孔を成している。底部の断面形状は三角形状となりシャープに仕上げられている。技法としては12の底部充填をおこなわなかったものであるが、底部径は肥大している。17は底径6.8cmで、積み上げ成形によって穿孔を成している。底部に木葉圧痕がみられる。18は底径7.1cmで、平底の底部を有し、残存状況が悪いが、焼成前に工具で穿孔が施されたとみられる。底部に草枝状の圧痕がみられ、一部は焼成前に突き刺さっていたと思われる状況で確認される。

これらの遺物は時期幅が認められ、その帰属を明らかにする必要がある。7は概ね古墳時代中期中葉に位置付けられると思われ、9は今塙屋編年のⅢ期a～b段階（今塙屋2012）、古墳時代中期前葉に位置付けられる。このことから、これらの遺物は近接する地下式横穴墓からの流れ込みと想定される。10は河野編年V期（河野2015）、弥生時代終末期に位置付けられ、墳丘盛土内の遺物が流土と共に周溝内に流れ込んだものと想定される。12～15の二重口縁壺、16～18の壺形埴輪は、その性格上、本来は墳丘上に立て並べられたものが周溝内に転落したものと考えられる。問題はその時期で、12～15はやや形態差はあるものの、球形の胴部や第1次口縁と第2次口縁の接合方法から、集成編年2期後半から3期前半に位置付けられる。一方、16～18は穿孔方法が異なる個体であり、從来の編年観では、工具による穿孔（18）→底部未充填による穿孔（16）→積み上げ成形による穿孔（17）の流れで変遷すると理解されてきた。これらが時期的な変遷を示しているのか系統差なのか、複数時期の遺物を含む可能性をもつ周溝内（尚且つ地下式横穴墓が多数構築されている）という出土位置からは検討することは困難であるが、西都原13号墳など複数系統の底部を有する事例が確認されている古墳も存在することから、系統差と理解することが妥当と思われる。

第4節 地下式横穴墓の調査成果

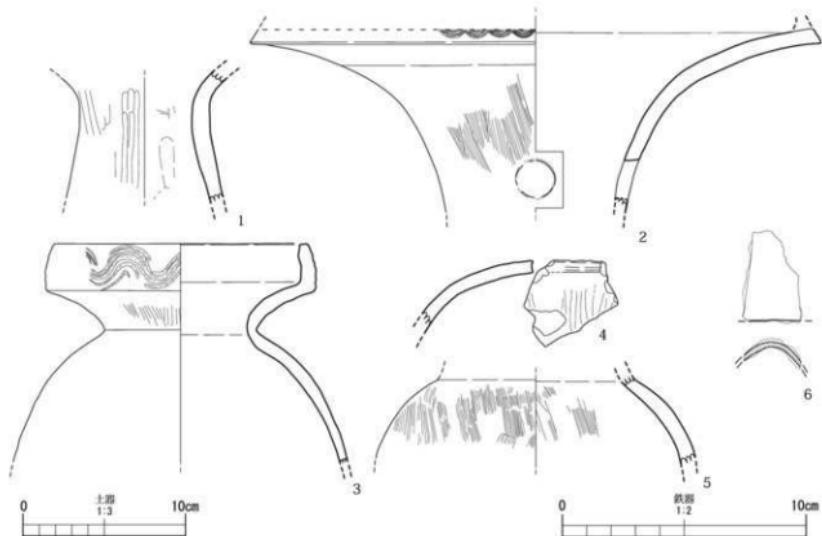
平成14年度のトレンチ調査を経て、平成19・20年度の全面的な発掘調査をおこなった結果、周溝内から13基の地下式横穴墓と地下式横穴墓の可能性がある遺構が検出された。墳長が40mに満たない小型前方後円墳の周溝内からの検出であり、非常に高密度な分布状況である。また後円部西側から南側は削平によって周溝が失われているため、本来はさらに多くの地下式横穴墓が構築されていた可能性がある。検出の状況や後の発掘調査結果から、これらの地下式横穴墓はすべて周溝底面に竪坑を設け、周溝外縁側の立ち上がり下に玄室を構築していると考えられる。周溝内、周溝外縁の近接地から10基の地下式横穴墓が検出された生目7号墳では、後円部と前方部それぞれ1基ずつ墳丘下に玄室を設ける地下式横穴墓が検出されているが、21号墳の場合はすべて古墳の外側に向け玄室を構築しており、前方後円墳に伴う地下式横穴墓のあり方が異なる。

なお、生目39号地下式横穴墓、40号地下式横穴墓、54号地下式横穴墓、55号地下式横穴墓



第13図 生目21号墳遺物出土状況(S=1/250)

に関しては検出状態のままであり、確実な地下式横穴墓かどうかは断定できない。これは地下式横穴墓の遺構としての特性であり、検出段階で判断ができるものとできないものがあるためである。地下式横穴墓は本来地中に玄室という空間を構築するもので、空間が保たれた状態で埋葬は完了する。生目古墳群の場合、それが長い年月によって天井が崩落し検出されるものがほとんどであるが、崩落の度合いによって検出状況が異なるため、一様に判断することができない。また、埋葬完了時にこの玄室掘削分の廃土が発生するわけであるが、それを堅坑上面や

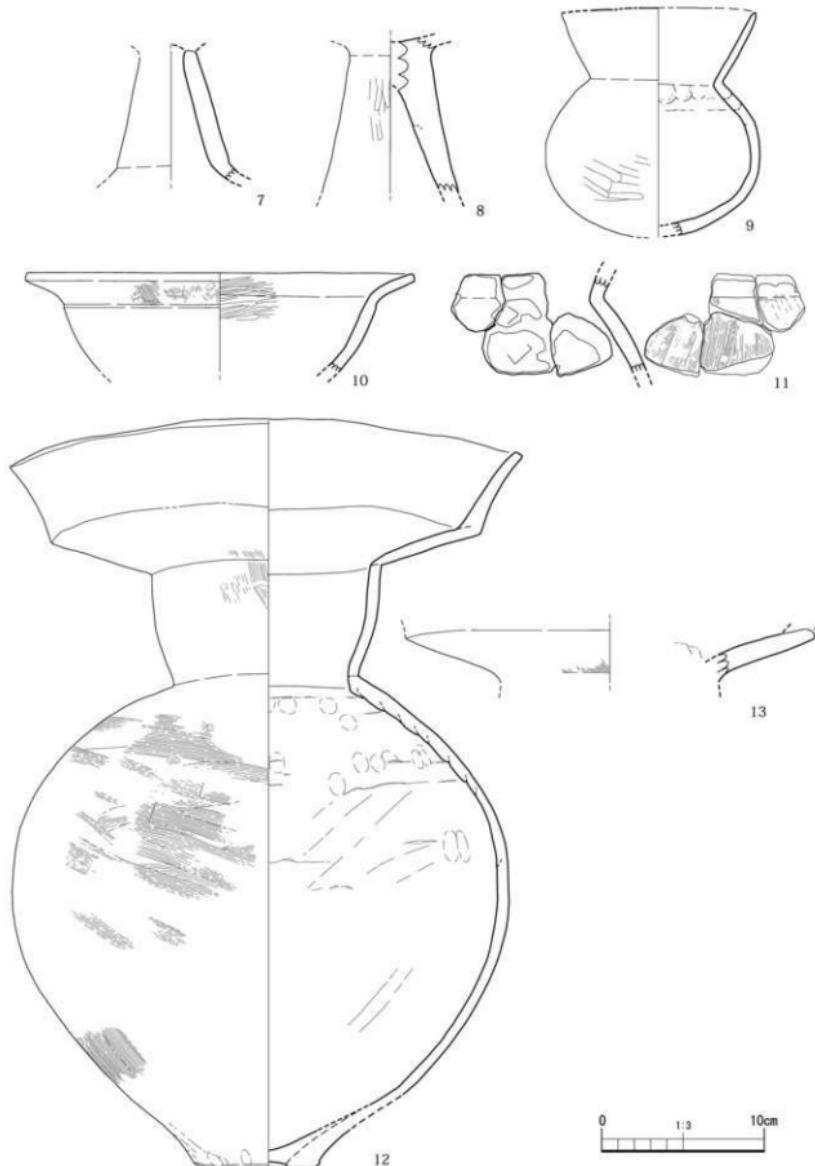


第14図 生目21号墳埴丘上堆積土出土遺物実測図(S=1/3・S=1/2)

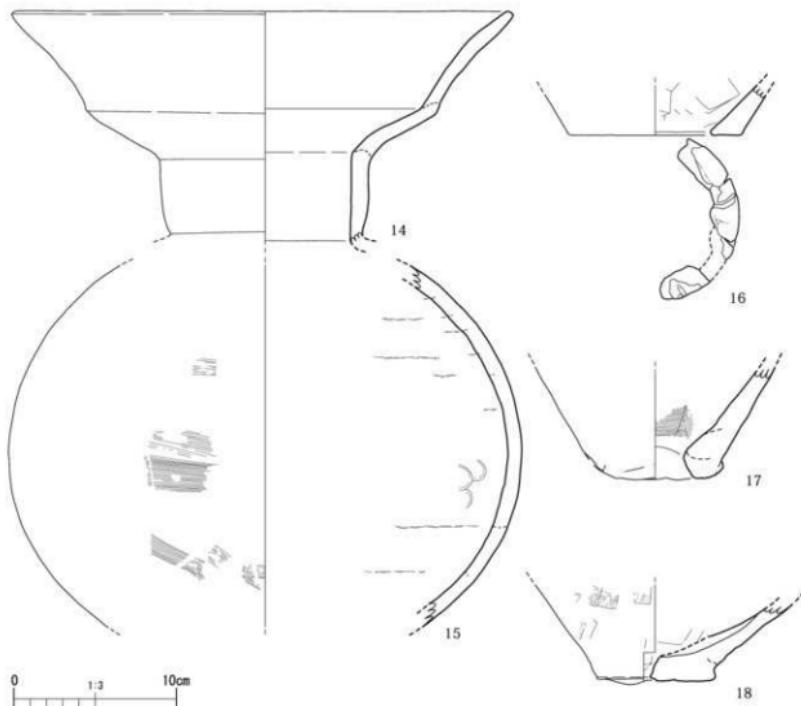
その周囲に小規模なマウンド、「置土」として広げている場合が生目古墳群では多くみられる。この置土は玄室規模が大きいと、廃土量も増えるため広範囲に広がることになり、先行して構築された地下式横穴墓を被覆する事例もみられる（生目7号墳周溝内の生目24号地下式横穴墓の置土が25号地下式横穴墓、26号地下式横穴墓を被覆する事例など）ため、置土の検出段階では正確な基数は判断できない。これらの理由から、13基という数は暫定数であることに留意いただきたい。

前述のとおり平成22年度にこれら13基の地下式横穴墓のうち7基の地下式横穴墓の発掘調査をおこなった。また平成14年度のトレンチ調査時に竪坑の半裁をおこなっている生目44号地下式横穴墓と、セクション位置に構築されていたため竪坑を僅かに掘り下げた37号地下式横穴墓に關しても情報が得られている。

発掘調査をおこなった7基の地下式横穴墓は、遺構そのものから土層堆積状況の再確認、再検討が可能なようにセクションにかかる部分に関しては掘削せず保存することにした。その上ですます、①「遺構検出面において竪坑、玄室それぞれに十字の軸を設定しサブトレンチによる発掘調査」をおこない、その段階で遺構形状や埋没過程が明らかになれば調査を終了した。サブトレンチ調査では十分なデータが得られない場合は、②「サブトレンチの拡張、もしくは軸の対角に位置する2ヶ所の完掘」をおこなった。さらに特殊な構造や遺構の復元が困難な場合において、完掘に近い調査をおこなった方が遺構復元や今後の研究に資すると判断された場合において、③「十字ベルトを残して完掘」する、という3パターンの調査方法による発掘調査をおこなった。以下個別に詳述をおこなう。



第15図 生目21号墳周溝出土遺物実測図①(S=1/3)



第16図 生目21号墳周溝出土遺物実測図②(S=1/3)

生目20号地下式横穴墓（第17図） 平成14年度のトレンチ調査によって検出された。前方部南側周溝内、前方部隅角とくびれ部の中ほどに位置する。遺構の半分近くが搅乱により失われていたため、その搅乱を拡張する形で半裁をおこなった。その後遺構の全体形状を把握するために追加で調査が必要と判断されたため、竪坑はセクションベルトを残し掘削をおこなった。玄室はセクション位置が偏っていたため、半裁の段階で2/3程度調査対象となっていたことから、それ以上の調査は見送った。

玄室平入り型の地下式横穴墓であり、竪坑は横に長い長方形形状の平面形を呈す。竪坑の規模は上端3.5m×1.8m、下端3.4m×1.3m、深さは0.7mである。上部の搅乱が著しいが、周辺の状況から21号墳の周溝底面は大きく削平されていないと判断される。しかし21号墳との時期差を勘案すると、20号地下式横穴墓は周溝内に一定程度土が堆積した後に構築されたと判断されることから、本来の竪坑の深さはもう少し深かった可能性がある。玄室はやや不整形の長楕円形で、検出面での幅は2.2m、奥行0.8mを測り、羨門幅は0.9m以上である。羨門は土層堆積状況から板閉塞と想定される。玄室、羨門共に崩落しているが、玄室右側壁に一部天井への変化点が残存しており、ここから復元すると天井高は0.6m程度と想定される。また玄室床面

には、掘削範囲内において2条の溝が玄室長軸に直交する形で検出された。溝は長さ0.7m、幅0.24m、深さが0.2～0.1mを測る。形態から後述する生目43号地下式横穴墓の玄室内石列のように、木材をこの溝に配置し、遺体を安置する板、もしくは遺体そのものを支えるまくら木状の構造物が想定されるが、土層堆積状況をみると、板閉塞が朽ちた際の流入土によってこの溝の埋土が閉められていることから、埋葬時は空洞であった可能性が高い。この点から溝はむしろ土によるまくら木状施設を削り出すために掘り込まれたと考えられる。

遺物は玄室内から刀子と土器片が出土した。19は刀子である。全長12.3cm、刃部幅1.8cm、刃部厚0.3cmを測る。片闊で茎はやや上方に向かいながら幅を僅かに減じていく。茎尻は直線的に仕上げられている。土器片は細片のため図化をおこなっていない。

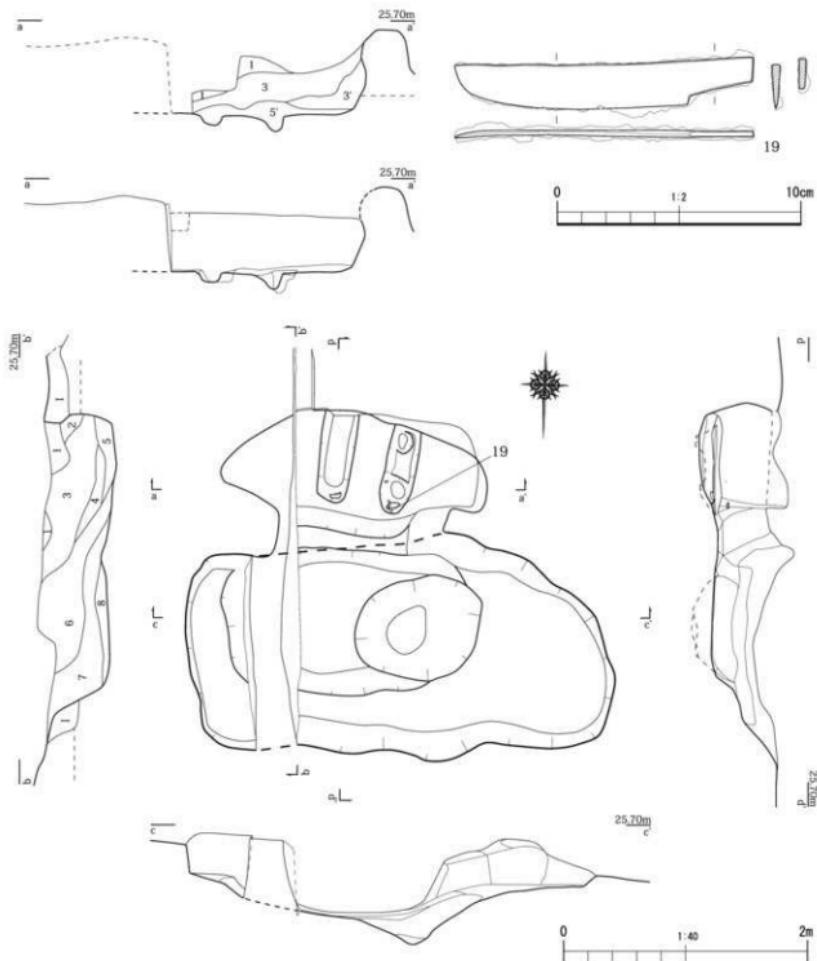
20号地下式横穴墓の時期を決定しうる材料は乏しいが、竪坑が43号地下式横穴墓の置土を掘り込んで構築されていることから、少なくとも43号地下式横穴墓に後出することは確実である。

生目37号地下式横穴墓（第18図） 後円部北西側周溝内で検出された。セクション位置にかかっていたため、サブトレントにより竪坑の一部を僅かに掘り下げている。竪坑はサブトレントの位置で縦軸長2.6mを測る。それ以外は未調査のため、形状、規模共に不明であるが、検出状況から玄室平入り型と推定される。

遺物は竪坑埋土内から土器が出土している。20は口径6.9cm、器高8.6cmを測る土師器小型丸底壺である。肩部最大径が下位にあり、口縁部の立ち上がりはやや外斜するが垂直気味となっている。口縁部が矮小化しており、今塙屋編年Ⅲ期c段階に位置付けられる。21は大型の器台である。口縁部が剥離して失われているが、垂直～内湾気味に立ち上がる想定される。弥生時代終末期に位置付けられ、竪坑埋め戻しの際に混入したものと思われる。

生目38号地下式横穴墓・生目47号地下式横穴墓（第19図～第24図） 後円部中心から墳丘主軸に直交する形で、北側周溝内まで延伸した位置で検出された。平成14年度のトレント調査の際に地下式横穴墓と認識できず、結果として縦断方向の断ち割りをおこなうことになった。スロープ状に降る竪坑壁面と、直立に近い玄室奥壁が、生目古墳群の他の古墳でみられる周溝の形状に類似していたため誤認していたが、平成19・20年度の調査で面的な検出をおこない、土層堆積状況を検討しなおした結果、地下式横穴墓と判断された。これが生目38号地下式横穴墓である。この調査で38号地下式横穴墓の置土は周溝内に長軸10m、短軸3.4mの範囲に広がっており、地下式横穴墓の正確な形状や、他の地下式横穴墓の存在の有無が判断できない状況にあることも明らかになった。そこで平成22年度の調査では、平成14年度のトレントを挟んで西側をそのまま保存し、東側を土層観察用のベルトを残して面的に掘り下げることにした。

38号地下式横穴墓は前述のとおり遺構の約半分を保存したため、正確な測定値は明らかではないが、竪坑は幅2.3m以上、長さ1.3m、深さ0.7mを測る。羨門幅は竪坑、玄室とほぼ同じであり、後述する43号地下式横穴墓と類似する。羨門高は天井が崩落しているため不明であ



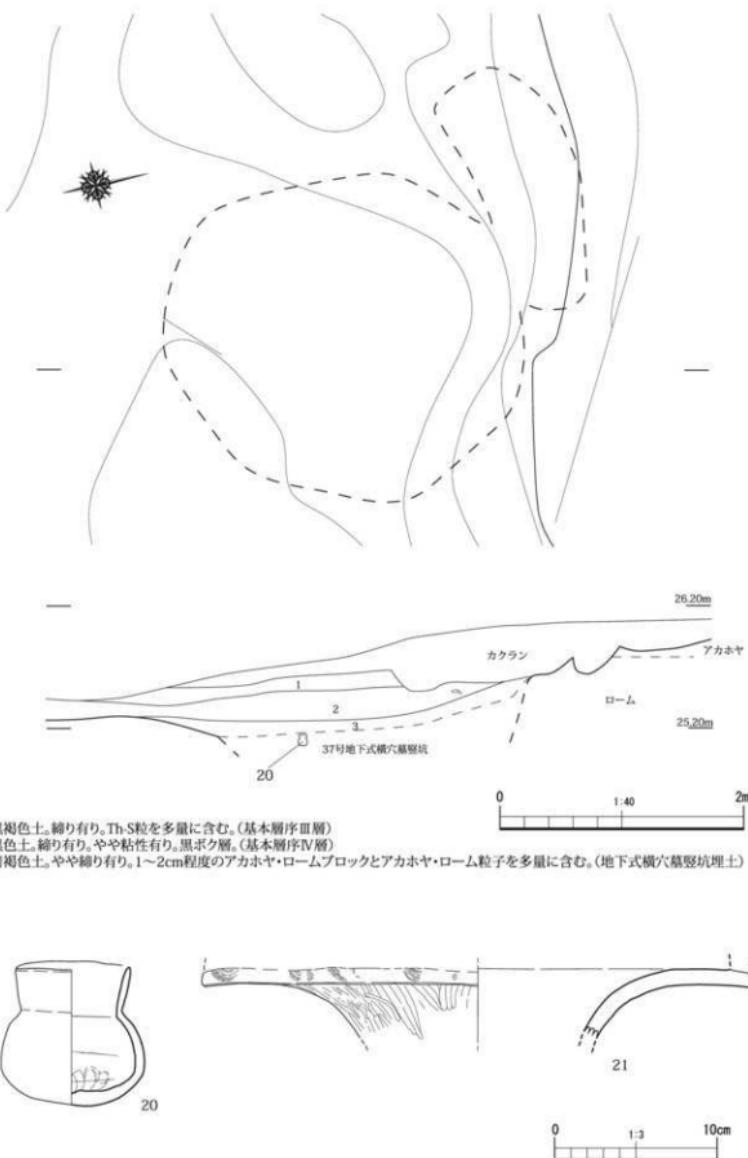
- 1.褐色土。縒り有り。地山ロームブロックを主体とする層。玄室天井崩落土。
- 2.暗褐色土。縒り有り。1~10mm程度のアカホヤ粒子を含む。褐色ロームを斑文状に含む。
- 3.黒褐色土。やや縒り有り。1~10cm程度のアカホヤブロック多量に含む。1cm程度のロームブロック含む。
- 3.5層と同質だがアカホヤ粒子が少ない。
- 4.褐色土。縒り有り。粒子、ブロックを含まず地山褐色ロームに質感が近い。玄室天井崩落土。
- 5.暗褐色土。縒り有り。1cm程度のアカホヤ、ロームブロックを微量に含む。
- 5.5層と同質だがアカホヤ粒子を含まず。1cm程度のシラスブロック含む。
- 6.暗褐色土。やや縒り有り。1cm程度のシラス、ロームブロックを少量、1~3cm程度のアカホヤ粒子を多く含む。竪坑埋土。
- 7.暗褐色土。やや縒り有り。1~3cm程度のシラスブロックを多量に、1~3cm程度のアカホヤ粒子、1cm程度のロームブロックを含む。竪坑埋土。
- 8.黄褐色土。縒り有り。1~5cm程度のシラスブロック非常に多く含む。竪坑埋土。
- 1.褐色土。縒り有り。地山ローム。

第17図 生目20号地下式横穴墓実測図(S=1/40)、出土遺物実測図(S=1/2)

る。竪坑と羨門の境界には板閉塞材を固定するものと思われる、径、深さ共に20cmのピットが検出されている。玄室は幅2.4m以上、奥行1.2m、高さは現状で0.6mを測る。羨門袖部も竪坑、玄室と同一幅まで掘削し、平面形は竪坑と玄室が一体となった方形を呈する。38号地下式横穴墓の竪坑掘削面は、周溝堆積土上から掘り込まれていることが、土層断面図から確認でき（第6図）、のことから21号墳築造後、一定の期間を経てから38号地下式横穴墓が構築されたことが明らかである。

遺物は主に置土の東端付近で一括して出土しており（第19図、第20図）、埋葬時の祭祀に伴うものと想定される。竪坑、玄室から距離が離れているが、43号地下式横穴墓においても、やはり置土端部で土器祭祀がみられる（43号地下式横穴墓の場合は追葬時のものと思われる）こと、47号地下式横穴墓は置土がみられなかったことから、これらの遺物は38号地下式横穴墓に帰属するものと判断した。22～29は土師器高环である。まず各個体の法量について記す。22は口径17.3cm、器高13.8cmを測る。23は口径19.0cm、器高14.9cmである。24は口径19.1cm、器高15.1cmを測る。25は口径19.8cm、器高14.8cmを測る。26は口径20.2cm、器高16.2cmである。27は口径20.6cm、器高15.3cmを測る。28は口径19.7cm、器高16.2cmである。29は口径19.2cm、器高16.1cmを測る。いわゆる布留式系高环で、22以外は坏部と脚部の接合を充填法により成している。充填部は脚内に大きく突出することはない。風化気味の資料もみられるが焼成は良好で、外面はミガキ調整が施されている。坏部の受部と口縁部の屈曲は明瞭である。法量をみると、坏部と脚部の接合方法が異なる22を除き、口径20cm±1cm、器高15.5cm±1cmに収まり、規格性の高い一群といえる。24は坏部の受部と口縁部の接合面において、接地面を広げるための刻目が確認された。いずれも胎土にアカホヤ火山灰に由来する（津曲2013）と思われる火山ガラスを含む。30～32は小型丸底壺である。30は口径7.5cm、器高8.2cmを測り、扁球状の胴部に直線的に長く立ち上がる口縁部を有する。口縁部下位に横ナデによって不明瞭ではあるが段を有する。31は復元口径8.6cm、器高8.6cmを測る。短く直線的に立ち上がる口縁部を有する。口縁が短く、いわゆる小型丸底壺の範疇から外すべきかもしれない。32は口径9.4cm、器高9.6cmを測る。やや平底気味の底部、逆ハ字状に直線的に開く口縁部を有する。胴部の中位やや下方に焼成後穿孔がみられる。33は口径12.5cm、器高15.6cmを測る小型の広口壺である。口縁部は内湾しつつ立ち上がる。34は口径14.6cm、器高16.7cmを測る小型の甕である。内外面共に粘土接合痕が顕著である。35は繩文時代早期、塞ノ神A式土器の壺である。外面に細かな刻目が施された低平な突帯がみられる。ローム層を掘削した際の混入であろう。

これらの出土遺物の中で、高环は坏部の屈曲が明瞭であり、脚部内面に充填による突出もほとんどみられないことから、今塙屋編年III期a段階に位置付けられる。小型丸底壺は30、32をみると口径と胴部最大径がほぼ等しく外開きの口縁部を保っていることから高环と同様に今塙屋編年III期a段階に位置付けられる。33の小型広口壺は宮崎平野部では器形の変化が緩慢であり、内湾する口縁部が長期間続く。そのため時期の比定は難しいが、胴部や底部の形態から今塙屋編年III期b段階までは下らないと思われる。34の小型甕は内外面共に接合痕が明瞭であり、やや時期が下る感もあるが、中型甕ほど出土量が多くなく、時期比定が難しい資料



第18図 生目37号地下式横穴墓実測図(S=1/40)、出土遺物実測図(S=1/3)

である。高坏、小型丸底壺の時期を重視すれば38号地下式横穴墓は今塩屋編年III期a段階、5世紀初頭の構築と考えられる。

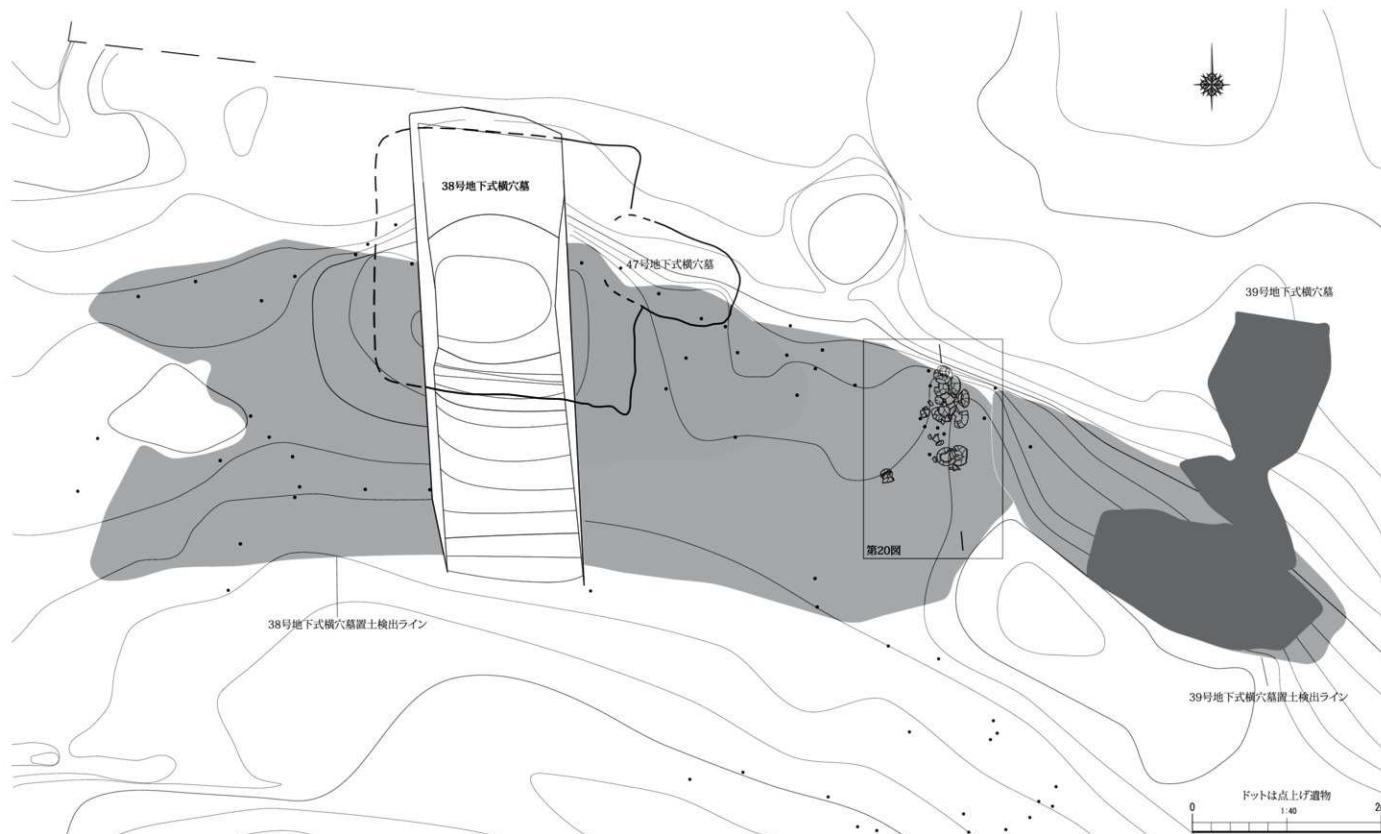
47号地下式横穴墓は、38号地下式横穴墓の置土、豊坑を掘り下げる過程で確認された。47号地下式横穴墓は周溝外縁の立ち上がりを削り込み、玄室を掘り込むための壁面を、周溝外縁の立ち上がりを垂直に近い形で掘り込み確保している。これは豊坑を深く掘らざとも、玄室空間を確保するための作業量の省力化と考えられる。47号地下式横穴墓の豊坑掘り下げ時は、38号地下式横穴墓の玄室のプランと誤認していたため、切り合い関係を確認するセクションベルトを設定することができなかった。ただし、38号地下式横穴墓の置土を掘り下げる過程でそのプランが確認できることから、47号地下式横穴墓が38号地下式横穴墓の置土を掘り込み、豊坑の一部を壊して構築されたと考えられる。47号地下式横穴墓の豊坑規模は、上端幅1.2m以上、長さ0.9m、下端幅1.0m以上、長さ0.6m、周溝床面からの深さ0.4m、義門は豊坑床面に接し、幅0.7m、高さ0.5mを測る。玄室は未調査のため不明である。閉塞は礫や土塊などみられないことから板閉塞と想定される。

遺物は豊坑埋土から36の弥生土器器台が出土した。細い胴部に大きくハ字状に開く脚部を有する。脚部に円形透孔がみられる。河野編年IV期、弥生時代後期後葉に位置付けられる。周辺遺構からの混入資料である。

47号地下式横穴墓の時期は、38号地下式横穴墓に後出することは明らかであるが、それ以上の絞込みは困難である。

生目41号地下式横穴墓（第26図～第28図） 前方部の前面、墳丘主軸からやや北寄りで検出された。前述のとおり、21号墳の周溝は前方部隅角で一度途切れ、隅角を陸橋状に残し、前方部前面では浅い溝として検出された。41号地下式横穴墓はこの溝内に豊坑を設け、墳丘とは逆方向に玄室を構築している。周囲は攪乱が著しく、玄室上部も攪乱を受けている。調査は豊坑を十字セクションの対角線上に掘削、玄室はほぼ半裁する形を採った。そこから得られたデータから復元すると、豊坑は横に長い梢円形で上端幅2.7m、長さ1.0m、深さは0.6m、玄室は幅1.3m以上、奥行0.5m、高さは天井が残存している部分では現状で0.3mを測る。豊坑、玄室共に角が明瞭ではない。義門は豊坑、玄室よりも大きく幅を減じるが、北側を掘削していないため幅の復元はできない。また天井も崩落している。豊坑、玄室の高低差はない。閉塞方法は僅かに義門部分に窪みがみられること、土層堆積状況から板閉塞と考えられる。

遺物は遺構が小規模であることに反比例し、土器、鉄器、玉類と豊富に出土した。37は土師器高坏である。口径は23.5cmに復元される。坏部の受部と口縁部の屈曲は弛緩し、明瞭ではない。今塩屋編年III期c段階に位置付けられる。38は小型の広口壺である。口縁部と底部を欠損しているため時期は明らかではない。39から42は特殊壺片と思われる。刻目突帯により区画し、その間に細かな波状文を施す。42では縱方向の刻目突帯もみられる。弥生時代終末期に位置付けられる。43は両面穿孔の碧玉製管玉である。44～57は滑石製白玉である。他と比較してややサイズが大きい44～46は算盤玉状の形状を呈し、放射状の調整痕がみられる。49、52～58は紐等に通した際の形状を考慮して片面に角度をつけてある。59は有闕の鉄鉢で



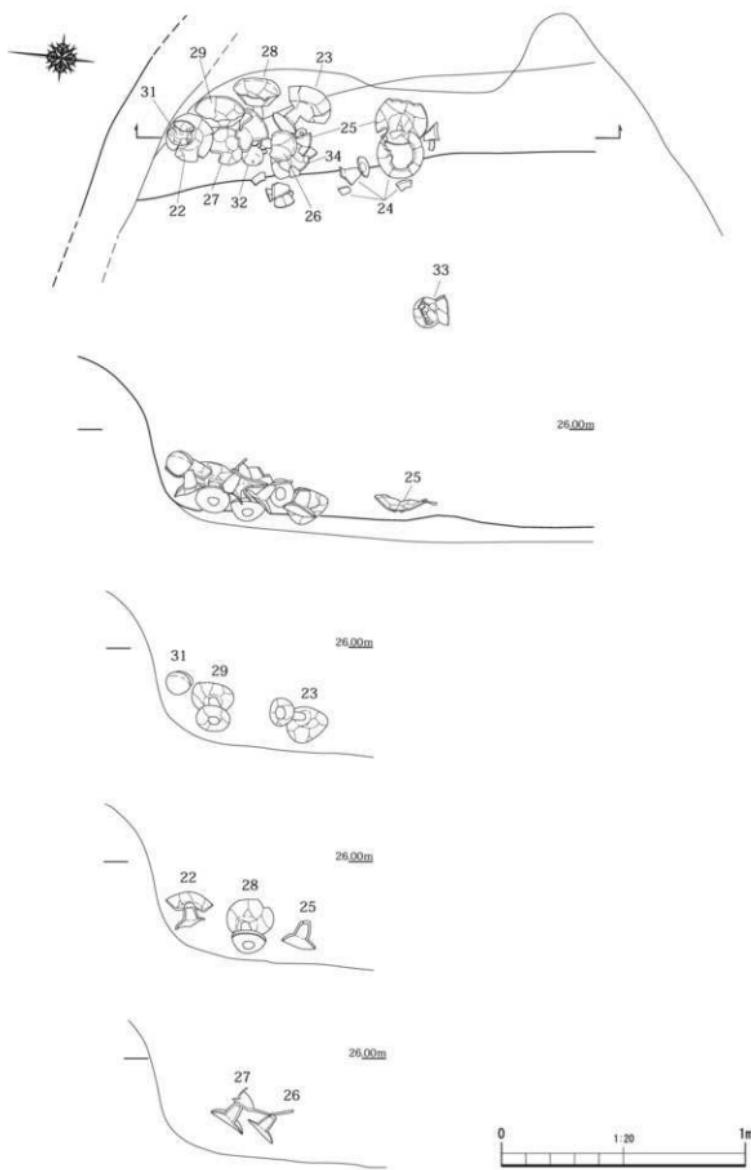
第19図 生目38号・47号地下式横穴墓遺物出土状況、出土範囲実測図(S=1/40)

ある。長さは25.1cmを測る。鉢身は銹により明瞭ではないが、断面菱形を呈しており鑄造りと思われる。袋部は円筒袋であり、袋端部は山形抉を呈す。60は大型の圭頭鎌である。残存全長16.3cm、刃部長2.5cm、頸部長9.2cm、茎長4.6cmを測る。刃部は平造りで、頸部断面は長方形、茎部断面は正方形である。樹皮による口巻きが一部残存している。橋本鉄嶺編年2段階（橋本2014）に位置付けられる。61は無肩袋状鉄斧である。全長16.8cm、刃部幅6.7cm、袋部幅5.3cm、袋部厚3.9cmを測る。平面形は袋部から刃部にかけて緩やかに開く。縦横の断面をみると、刃部は方形を呈し、背面側は比較的平坦に造られる。袋部の横断面は楕円形を呈し、袋部内底面は平坦になっている。62は方形板鍔鋒先である。全体的に刃部が大きく減じているが、袋部を上にして置いた際の右側が、左側と比較すると僅かに刃部が短くなっている、偏りがみられる。63、64は鉄鎌である。両者共に曲刃鎌で、63は全長17.8cm、刃部幅2.3cm、刃部厚0.6cmを測る。背全体が弧を描き、折り返しを上に向かた際、刃部は左を向く。64は背が直線的であり、先端が近くなると屈曲する。折り返しを上に向かた際、刃部は右を向く。また刃部先端部分は折り返しと逆方向に緩やかに湾曲しているが、副葬当初からか埋葬後の要因によるものか明らかではない。65は刀子の茎部である。茎尻は方形で1孔の目釘孔がみられる。66は不明鉄製品である。棒状の鉄製品の一方を敲き広げたと思われる。銹により先端部の状況は不明である。

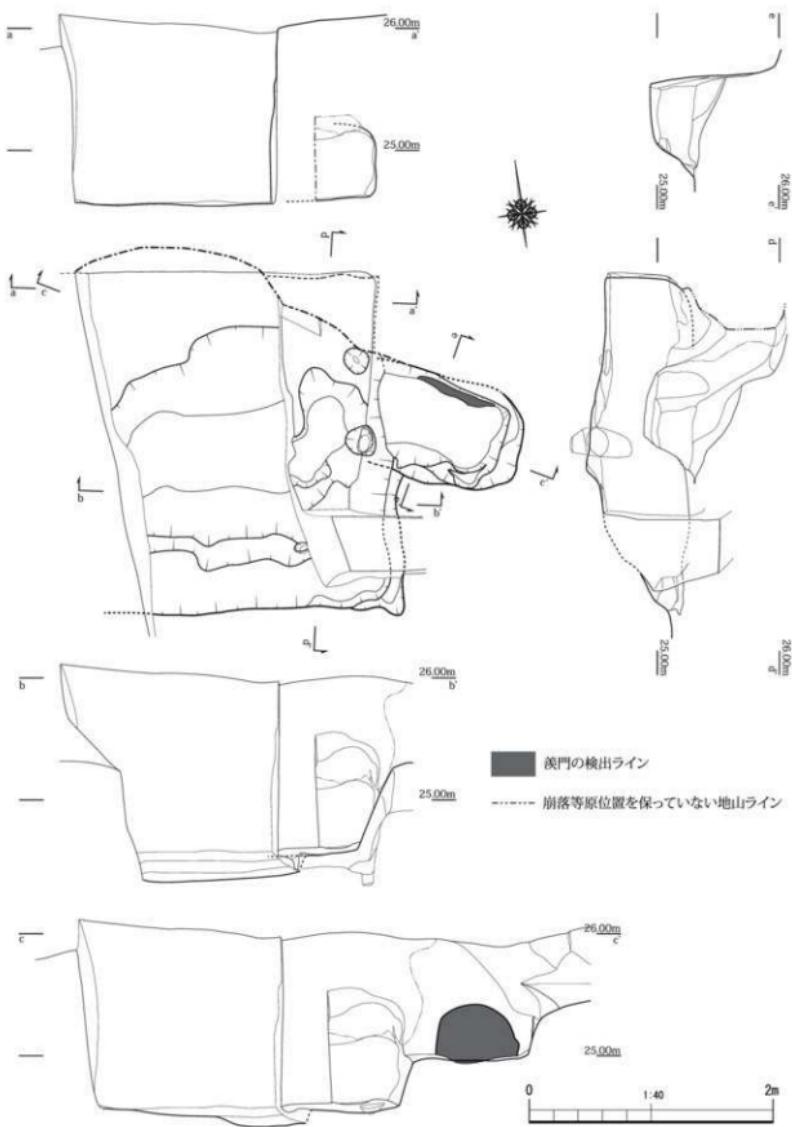
時期は、37の土師器高坏、60の圭頭鎌や62の方形板鍔鋒先、63、64の鉄鎌の組み合わせからみると、41号地下式横穴墓は古墳時代中期中葉、概ねTK216併行に位置付けられる。

生目42号地下式横穴墓（第29図、第30図） 41号地下式横穴墓の南側、前方部前面の周溝内、ほぼ墳丘主軸の延長上に位置で検出された玄室平入り構造の地下式横穴墓である。北に隣接して弥生時代に属すると思われる土坑墓が存在し、42号地下式横穴墓がその一部を切っている。非常に小型かつ特異な形状であったため、セクション観察用のベルトを残し発掘調査をおこなった。竪坑は平面不整形で、長軸2.0m、短軸1.0m、深さは0.2mと極めて浅い。玄室は非常に小型であり、幅0.9m、奥行0.4m、高さは0.25mを測る。平面形は歪な楕円形であり、玄室床面は竪坑床面より一段低い位置に設けられている。羨門の構造や土層堆積状況からみると、構造物を用いての閉塞はおこなわれていなかった可能性が高い。玄室内の埋土も均質であり、玄室を空間として保っていたのではなく、埋葬後土を充填したと想定される。羨門を覆うように検出された8層が羨門閉塞を意識した土と思われる。

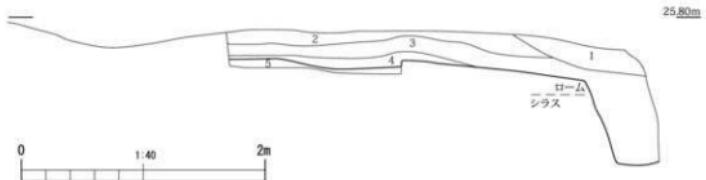
遺物は地下式横穴墓の周囲と竪坑埋土内から出土した。67は土師器直口壺の口縁部である。僅かに外斜しつつ直線的に立ち上がり、口縁端部は外面側へ丸く肥厚する。68は土師器広口壺である。小型の器形で胴部は扁球形を呈し、頸部から口縁部は逆ハの字状に開く。69は弥生土器特殊壺の肩部である。扁平な器形で、肩部は水平に近い角度で大きく開く。外面には細かな波状文が施されている。70は弥生土器の細頸壺である。倒卵形の胴部にやや外斜しつつ立ち上がる口縁部を有する。弥生時代終末期に位置付けられる。71は小型の壺甌類の底部、もしくは蓋と思われる。外面はミガキ調整が施されており丁寧な作りである。底部外面から外面へと横方向に突き抜ける穿孔がみられる。前述のとおり、42号地下式横穴墓は土坑墓を切っており、



第20図 生目38号地下式横穴墓置土上遺物出土状況実測図(S=1/20)



第21図 生目38・47号地下式横穴墓実測図(S=1/40)



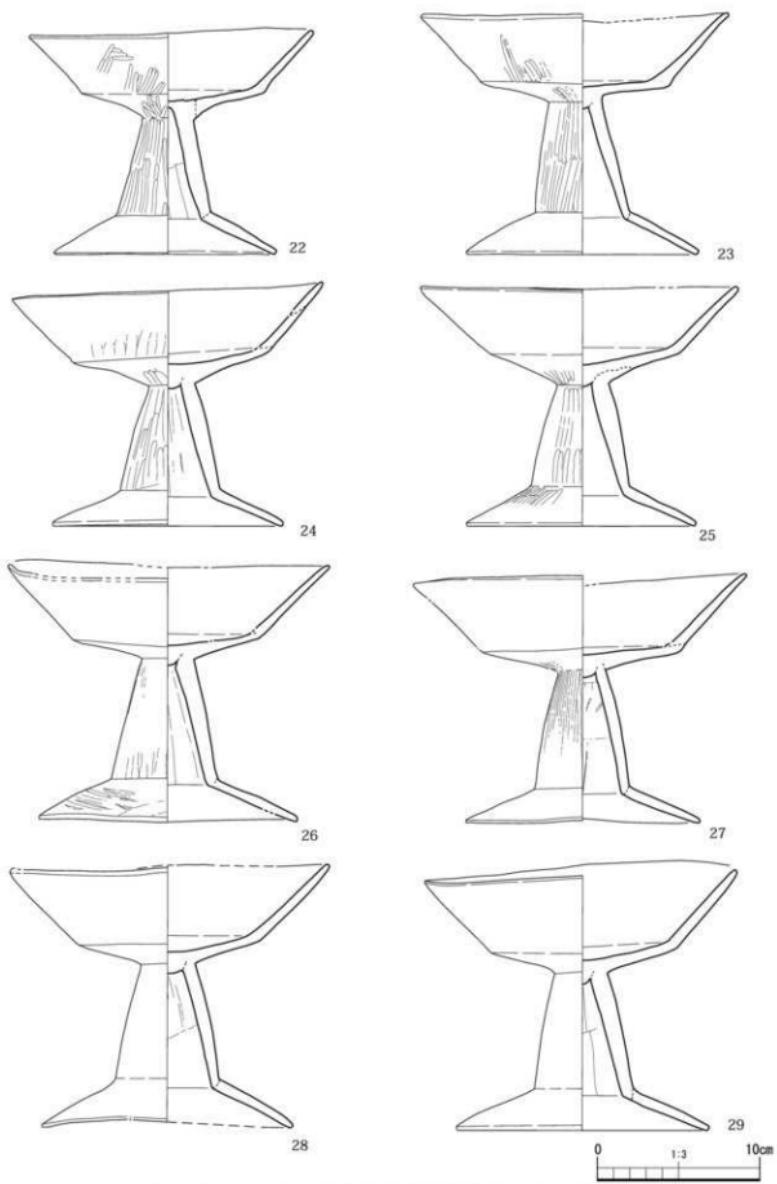
1. 黒褐色土。極めて軟質で3層由來の径数cmのシラスブロックを多量に含む。38号地下式横穴墓の閉塞崩壊、玄室内への豊坑埋土流入に伴って、上部堆積土が落ち込んだもの。
2. 暗褐色土。含有物、質共に1層に似るが、やや色調が暗く締まりも若干強い。38号地下式横穴墓埋葬後の自然堆積土であり、シラスブロックは3層のブロックが混ざりこんだもの。
3. 暗褐色土。極めて軟質。径10cm程度のシラスブロックを極めて多量に含む。38号地下式横穴墓豊坑埋土兼置土。
4. 黒褐色土。締り有り。古墳構築後の自然堆積土。地山ロームが斑文状に混ざる。
5. 地山ローム層。

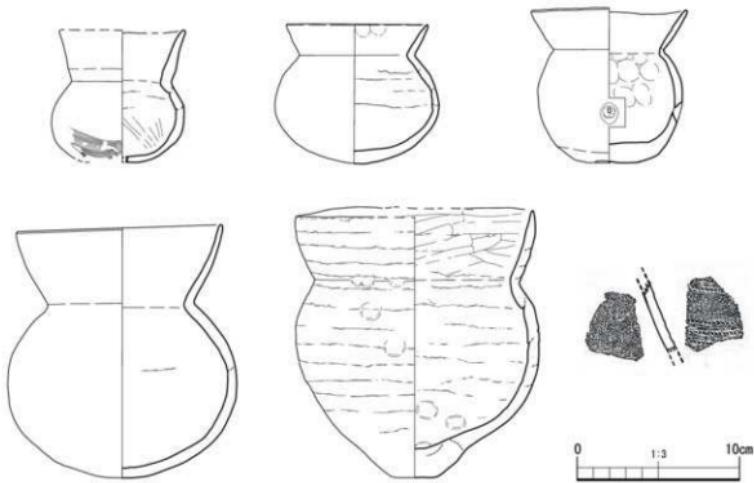
第22図 生目38号地下式横穴墓断面図(S=1/40)

弥生時代に属する遺物は土坑墓に伴う遺物の可能性がある。ただし42号地下式横穴墓自身も、不整形かつ極めて小型の形態から、地下式横穴墓というよりも、生目9号墳近接地（生目古墳群周辺遺跡9-2トレンチ）、生目19号墳近接地（生目古墳群周辺遺跡E-2トレンチ）で確認されている円形周溝墓の周溝内や、石ノ迫第2遺跡（35号土壤、40号土壤）で確認されている横口式土坑墓（横口式二段掘り土壤）と呼称される遺構との関係性を考慮すべきと思われる。平面形は横口式土坑墓が、豊穴部と埋葬部の規模がほぼ同じで羨門構造はみられないが、42号地下式横穴墓は豊坑から羨門状に狭まり、羨門幅のままで玄室が構築されるという違いがある。一方、断面形をみると、豊坑床面よりも玄室床面が一段下がる形状であり、この点は横口式土坑墓と共に通する。この横口式土坑墓の時期は判然としないが、周辺の遺構の状況から、弥生時代後期後半から終末期に位置付けられる可能性が高く、42号地下式横穴墓も同様に生目21号墳に先行して構築されていた遺構の可能性もある。

生目43号地下式横穴墓（第31図～第38図） 生目43号地下式横穴墓は、21号墳の南側周溝内くびれ部付近に豊坑を設け、周溝外縁側立ち上がり下に玄室を設ける。周辺は著しい搅乱を受けており、周溝の立ち上がりが残存しているのはごく一部である。サブトレンチ調査をおこなった時点では玄室の石列が確認され、特異な形態であることが明確であったため、セクションベルトを残し発掘調査をおこなった。

平面形は羨門の袖部がなく、豊坑、羨門、玄室がほぼ同様の幅で構築されており、豊坑と玄室を合わせると正方形に近い形状を呈する。豊坑は長方形で幅2.9m、長さ1.6m、深さ0.6mを測る。羨門には板閉塞のための幅0.2m、深さ0.1m弱の浅い溝が掘り込まれているが、床面に加え両側壁にも及んでいる。羨門は前述のとおりほぼ袖部がなく、玄室南西側が僅かに突出するものの、玄室の側面全面が開口しているような状況である。玄室は幅3.0m、奥行1.0mを測る。天井高は、天井の大半が崩落しているため復元値になるが、側壁に取り付く位置に僅かに残る天井部ラインから復元すると0.6mとなる。玄室床面には奥行方向に並ぶ6列の石列が検

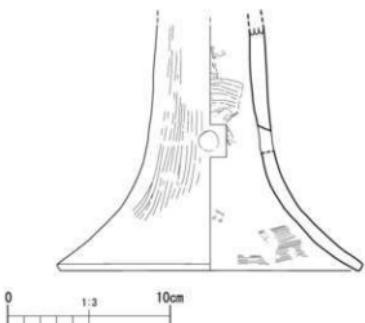
第23図 生目38号地下式横穴墓出土遺物実測図① ($S=1/3$)



第24図 生目38号地下式横穴墓出土遺物実測図② (S=1/3)

出された。形状から木棺を安置する棺台か、遺体を安置するための板を支える台として用いたと想定される。土層堆積状況からは棺や板の痕跡は確認することができなかつた。玄室中央より右側の地点において碧玉製管玉と滑石製白玉が出土しており、頭位を示していると思われる。

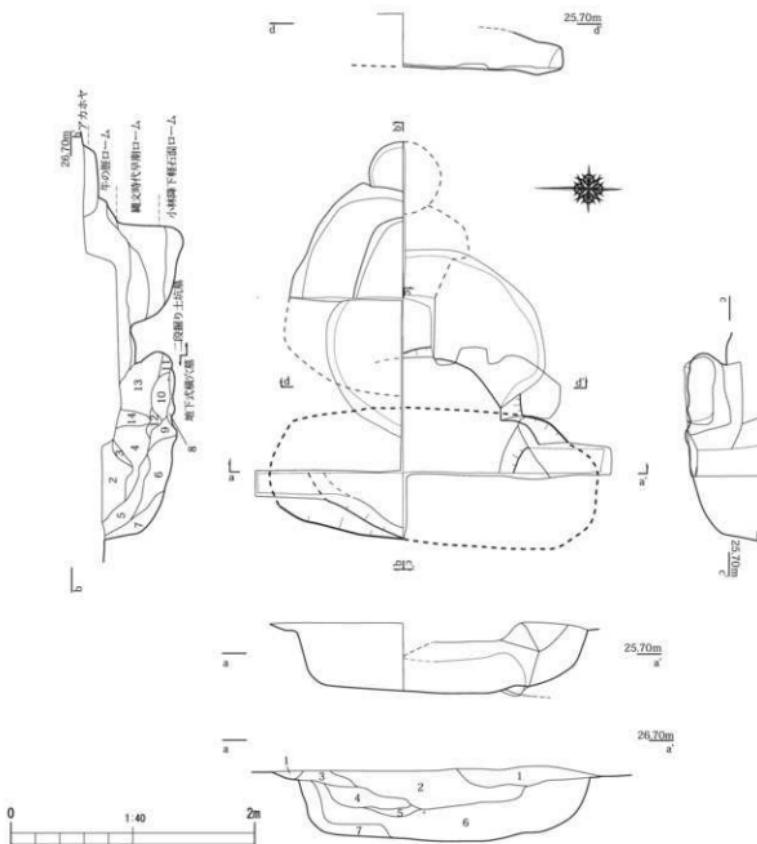
堅坑上には長軸8.4m、短軸4.6mの範囲に、アカホヤブロック、ロームブロック、シラスブロックを多量に含む置土が広がっていた。置土が広がっている範囲は三角形状であるが、これは周溝のくびれ部形状によ



第25図 生目47号地下式横穴墓出土遺物実測図 (S=1/3)

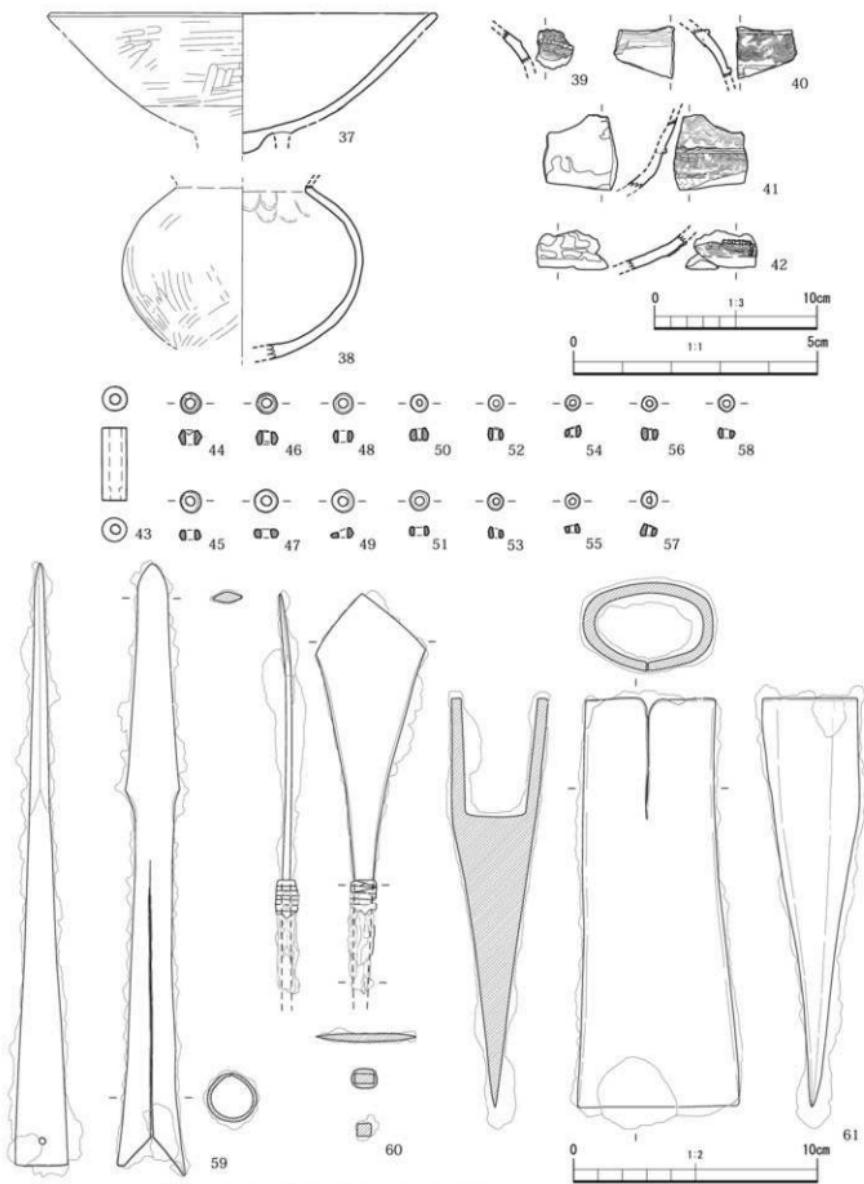
沿ったものである。置土を除去すると43号地下式横穴墓のプランと共に、それに切られる三角形状のプランをもつ掘り込みが検出された。この掘り込みの埋土は置土と同種のものであり、43号地下式横穴墓を中心広がっていることから、一連の遺構として捉えられる。掘り込みの範囲は、長軸5.8m、短軸4.3mで、周溝側は堅坑位置までである。ここから周溝外縁の立ち上がりは掘削していないということが明らかである。43号地下式横穴墓の堅坑がこの掘り込み埋土を掘削し構築されていることから、地下式横穴墓構築に先立つ整地のような役割があつたと考えられる。

本遺構の土層堆積状況をみると追葬の可能性がある人為的な掘り込みが確認される。初葬時の堅坑埋土はシラス主体の土であるが（第32図の7層）、それを掘り込み追葬時の堅坑が構築

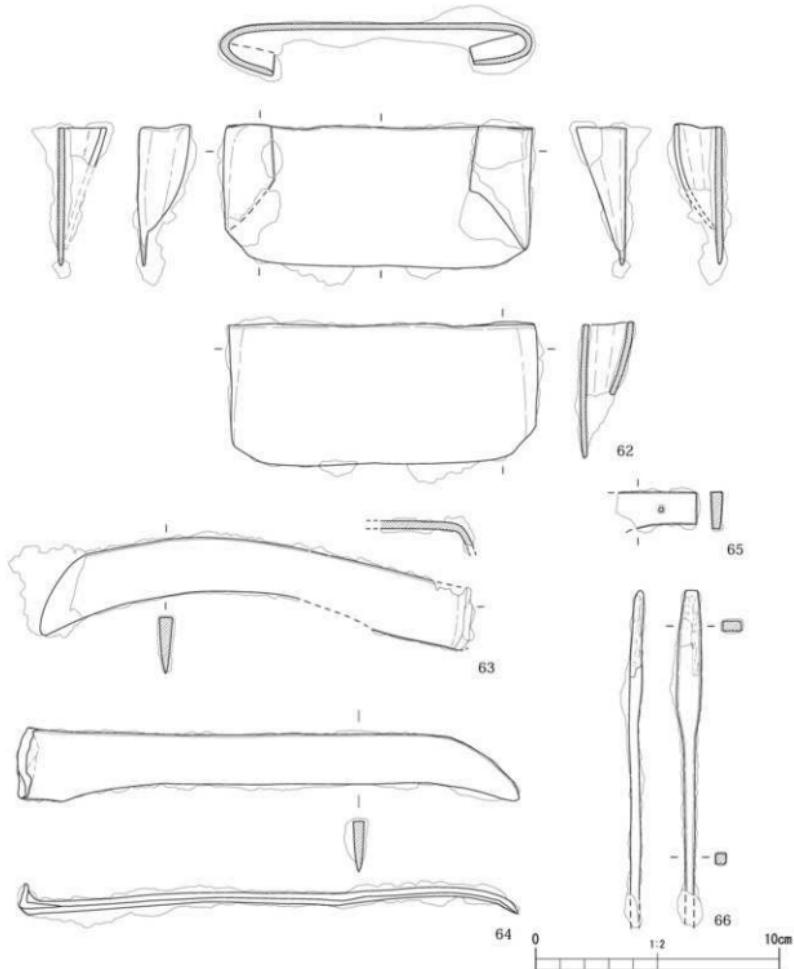


- 1.褐色土。径数cmのアカホヤ・ロームブロック含有。黒色土が斑文状に混ざる。堅坑埋土、置土。
- 2.黒褐色土。含有物は1層と同。堅坑埋土。
- 3.黒褐色土。含有物は1層と同。1層と同質の褐色土が混ざる。堅坑埋土。
- 4.黒色土。アカホヤ・ローム粒子多量に含む。1層に類似する褐色土が斑文状に混ざる。堅坑埋土。
- 5.暗褐色土。径数cmのアカホヤ・ロームブロック多量に含む。堅坑埋土。
- 6.黒褐色土。5層と同質であるが色調が暗い。堅坑埋土。
- 7.暗褐色土。5層と類似するがブロックの含有が僅か。堅坑埋土。
- 8.明黄褐色土。牛の脛ロームと褐色ロームの混合土。ブロックを含まないことから天井崩落土ではない。上面から刀子出土。玄室内の整地土か。
- 9.黒色土。含有物を含め1・2層に近似。堅坑埋土の玄室内流入土。
- 10.褐色土。下層ロームと褐色土の混合土。下層ロームのブロック含有。玄室天井崩落土。
- 11.褐色土。10層と類似するがブロック含まない。奥壁の崩落土。
- 12.黒色土。10cm弱のロームブロックが含まれる。このロームブロックは澳門崩落土と思われる。
- 13.黒色土。最大22cmのアカホヤ・牛の脣ロームの漸移層ブロック、ロームブロックを多量に含む。玄室天井部と周溝理土の混ざった土。2回目の天井崩落土。
- 14.黒色土。ロームブロックを少量、ローム・アカホヤ粒子多量に含有する。4層と13層の中間的な様相であるため両者の混合層ともされる。

第26図 生目41号地下式横穴墓実測図(S=1/40)

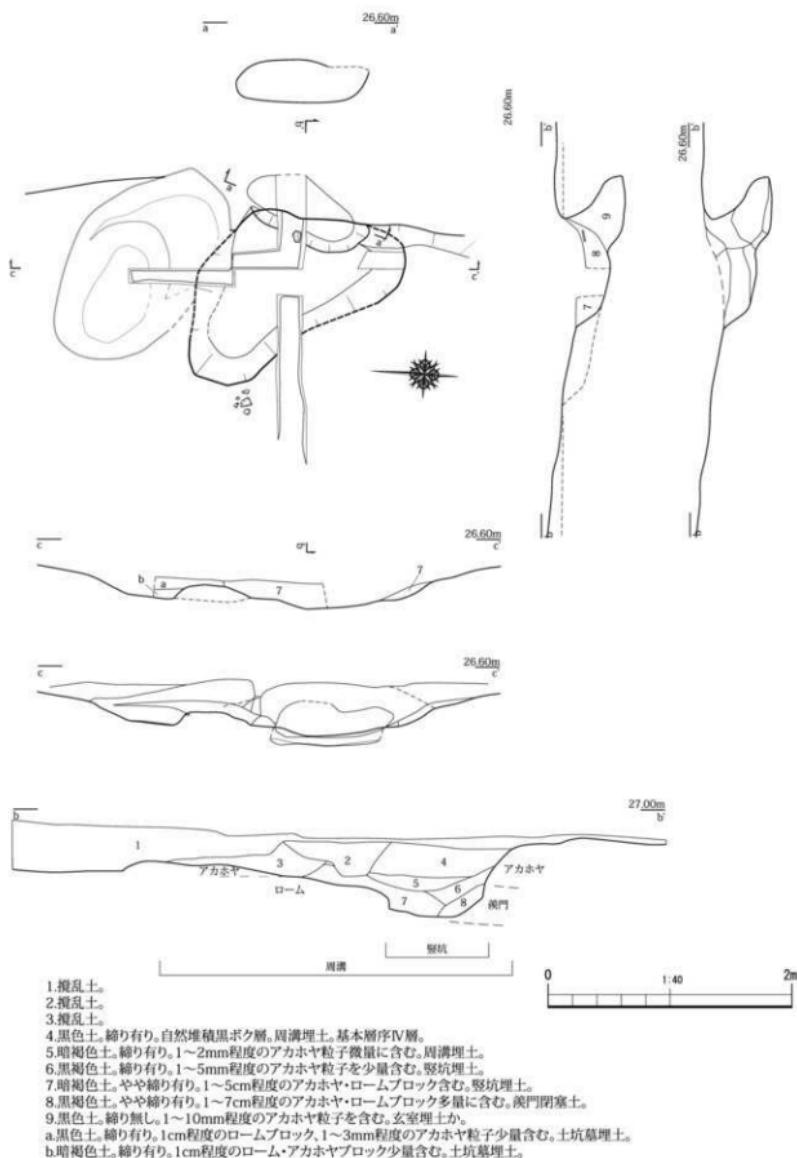


第27図 生目41号地下式横穴墓出土遺物実測図① ($S=1/3 \cdot S=1/1 \cdot S=1/2$)

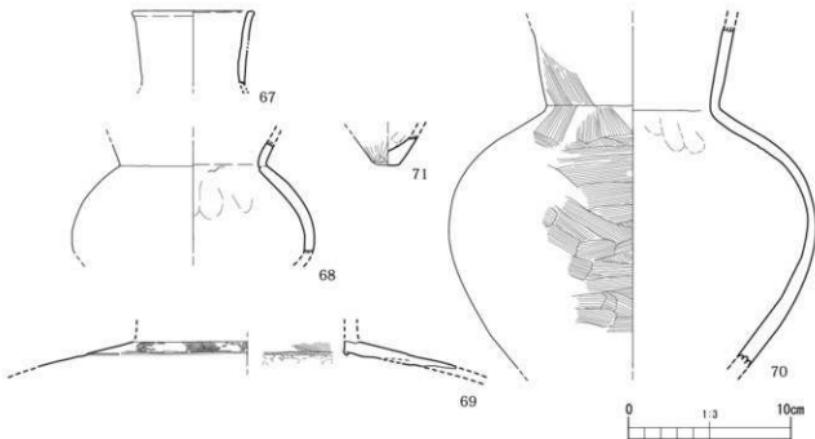


第28図 生目41号地下式横穴墓出土遺物実測図② (S=1/2)

されている（第32図5層）。追葬時堅坑埋土は置土や掘り込み地業の埋土と似ており、他の土の含有がみられないこと、また堅坑埋土との間に他の層が形成されていないことから、置土上に他の土が堆積しない状態で掘り込まれ、この掘り上げた土を用いて、時を置かずして埋め戻したと想定される。玄室内の石列をみると中央から右側付近で石列が乱れている状況がある。最も右側の石列とその隣の石列の間に石列よりも一回り大きい石が2石検出されている。また右



第29図 生目42号地下式横穴墓実測図(S=1/40)



第30図 生目42号地下式横穴墓出土遺物実測図 (S=1/3)

から3列目の石列の羨門側には石列と直交する方向にやはり大型の石が検出されている。さらに閉塞板を固定する溝上に20cm程度浮いた位置から1石検出されており、追葬に伴う石の乱れと想定される。この玄室の石列であるが、地下式横穴墓に類例は見出せない。43号地下式横穴墓より後出する玄室妻入り型地下式横穴墓などの一部にみられる蝶床に繋がる可能性はあるが、構造的にヒアスタスがみられる。時期、地域の相違を問わなければ、形態的に類似するものが、弥生時代終末期に広島湾岸に営まれた、西順寺墳墓群や梨ヶ谷墳墓群の竪穴式石槨内にみられるが、無論影響が想定されるものではない。遺体（遺体を納めた棺）を直接床面に触れさせないという思想的な共通性から発現したものであろう。

遺物は玄室内から出土した玉類と、玄室上（第35図）と置土端部（第31図）の2ヶ所から纏まって出土した土器がある。玄室上の土器は玄室天井崩落土と羨門板閉塞板の腐食に伴う流入土内から出土しており、出土した遺物がほぼ完形になるものばかりであることを鑑みると、玄室上に葬送祭祀に伴って配置されたものと考えられる。一方置土端部から出土したものは、38号地下式横穴墓と同様に置土端部で祭祀行為をおこなったものと、墳丘から転落したものが混在していると思われる。

72～82は玄室上から出土した遺物である。72～78は土師器高壺である。72は口径18.8cm、器高15.2cmを測る。73は口径19.4cm、器高15.2cmである。74は口径18.4cm、器高14.4cmを測る。75は口径18.3cm、器高15.4cmを測る。76は口径19.8cm、器高15.6cmを測る。77は口径20.5cm、器高15.3cmである。78は口径24.3cm、器高17.9cmである。72～77はいわゆる布留系の高壺である。壺部の受部と口縁部の屈曲は明瞭である。壺部と脚部の接合は、76は明瞭ではないが、すべて充填法によるものと思われる。外面は細かなミガキ調整が施され丁寧に製作されている。胎土は精良で、アカホヤ火山灰由来と思われる火山ガラスを含む。脚柱部と脚裾部の接合は、脚裾部の上に脚柱部が載る形である。口径が18.3cm～20.5cm、器高が14.4cm

～15.6cmと規格性の高い一群である。78は上記の一群と比較して口径、器高共に大きい値を示す。また脚部形態も直線的に開く72～77とは異なり、中位付近がやや膨らむエンタシス状の脚部を有する。外面はミガキ調整であり、胎土にはアカホヤ火山灰由来と思われる火山ガラスを含有する。出土状況から一括性は高く、両者は時期差ではなく系統差と考えられる。78は器形から六野原3号地下式横穴墓出土高坏と同系譜と考えられるが、坏部の受部と口縁部の屈曲をみると78が明瞭であり、六野原3号地下式横穴墓出土資料に先行するものと考えられる。これらの高坏は今塩屋編年III期a段階に位置付けられる。79は小型丸底壺である。口縁端部を欠損している。口縁部はやや内湾しつつ逆ハの字状に大きく開く。口径が胴部最大径をやや上回る。今塩屋編年III期a段階に位置付けられる。80、81は小型の広口壺である。80は扁球状の胴部にやや内湾しつつ立ち上がる短い口縁部を有する。口径12.0cm、器高15.2cm、胴部最大径18.2cmと胴部最大径が器高を上回る。体部外面はミガキ調整で、胎土はアカホヤ火山灰由来の火山ガラスを含有する。81は口径13.9cm、器高18.2cmを測る。口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。82は二重口縁壺である。口径21.4cm、器高37.4cmを測る。焼成後に底部を打ち欠き穿孔している。肩が張らずやや下膨れの胴部を有し、頸部は外斜しつつ、エンタシス状に中位付近で膨らむ。北側周溝内で出土した二重口縁壺12とは異なり頸部は短い。第1次口縁と第2次口縁の接合部の屈曲は明瞭である。胴部外面はハケメ後ミガキ調整が施されている。胴部内面は細かなハケメ調整が施されており、全体的に丁寧に作られている。これら玄室上から出土した遺物の中で位置付けに苦慮するのが82の二重口縁壺である。在地の土器系譜では追えない器形であるが、胴部や口縁部形状から概要報告書では集成編年2期後半～3期に比定しており（宮崎市教委2011）、その位置付けは現状でも変更の必要はないと思われる。しかし、共伴する高坏や小型丸底壺は今塩屋編年III期a段階、5世紀初頭に位置付けられ、年代に齟齬が生じる。玄室天井が崩落した位置からの出土であるため、墳丘上に立て並べられていた二重口縁壺が転落し、陥没坑に落ち込んだ可能性も全く否定はできないが、出土状況をみると複数の高坏に囲まれるように出土し、出土レベルも揃っていることから一括性は高いように思われる。地下式横穴墓に二重口縁壺が伴う事例としては、検出に留めているため確実とはいえないが、生目17号墳の周溝内から検出された生目50号地下式横穴墓が挙げられる（宮崎市教委2013）。ここでは堅坑を覆う埴土上から、二重口縁壺、高坏、小型丸底壺が出土した。二重口縁壺（遺物実測図未報告）は82とは異なり在地系譜のもので、倒卵形の胴部にやや丸みを帯びるが平底の底部、頸部に絡状突帯を有する。頸部はくの字に屈曲し、そのまま第1次口縁部となり、第2次口縁部との屈曲部分は不明瞭である。共伴する高坏や小型丸底壺から今塩屋編年III期c段階に位置付けられており、時期はやや降るが、二重口縁壺、高坏、小型丸底壺のセット関係も共通している。これらの点から82は21号墳に伴う土器として製作され、転落もしくは樹立状態の土器を43号地下式横穴墓が再利用した遺物と考えたい。

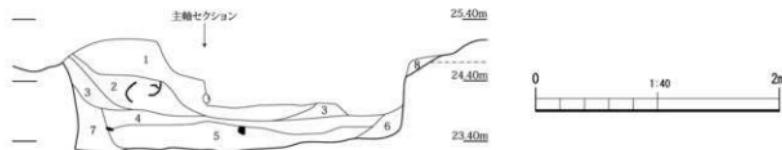
83～87は玄室内から出土した玉である。83は両面穿孔の碧玉製管玉である。図上で下方からの穿孔は斜めに施されている。84～87は滑石製臼玉である。

88～93は埴土端部で出土した土器である。88～90は土師器高坏である。88は口径22.7cm、器高15.9cmを測る。坏部の受部と口縁部の屈曲はやや丸みを帯び不明瞭になりつつある。坏



第31図 生目43号地下式横穴墓平面図及び遺物出土状況(S=1/40・S=1/20)

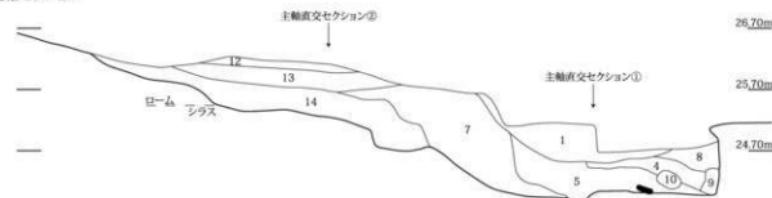
主軸直交セクション①



主軸直交セクション②



主軸セクション



1. 黒色土。綿り有り。自然堆積の黒ボク層(基本層序IV層)が地下式横穴墓の玄室天井崩落と羨門板閉塞の腐食に伴う流入土。竪坑上祭紀に伴う遺物が含まれる。

2. 黒色土。記述は1層同様だが色調がやや明るい。

3. 暗褐色土。やや綿り有り。ローム土に若干黒ボク土が混ざる層。シラス粒子含まない。1、2層と同様に流入土。

4. 暗褐色土。やや綿り有り。褐色ローム層の中に1~10cm程度のシラスブロックが帯状にみられる。崩落した玄室天井か。

5. 暗褐色土。やや綿り有り。褐色ローム層の中に1~10cm程度のシラスブロック少量含む。追葬時の竪坑埋土か。

6. 暗褐色土。やや綿り有り。褐色ローム層の中に1cm以下のシラスブロックを少量含む。

7. 黄褐色土。綿り有り。褐色ローム層の中に1~10cm程度のシラスブロックを密に含む。初葬時の竪坑埋土。

8. 暗褐色土。1~10mm程度のシラス粒子含む。

9. 黄褐色土。硬く綿まる。5~10cm程度のシラスブロックを密に含む。ロームを斑文状に含む。玄室天井崩落土。

10. 暗褐色土。硬く綿まる。褐質ローム土(小林降下軽石か)主体層。玄室天井崩落土。

11. 暗褐色土。綿り有り。褐色ローム層中に1~15cm程度のシラスブロック、1~3cm程度のロームブロック含む。地下式横穴墓構築前の造成土。

12. 暗褐色土。シラス粒子を多く含むため砂質性が高い。1~3cm程度のシラスブロックを多量に含む。置土。

13. 暗褐色土。シラス粒子を多く含むため砂質性が高い。1~3cm程度のシラスブロック、アカホヤ・ロームブロックを少量含む。置土。

14. 暗褐色土。綿り有り。1~10cm程度のシラスブロック多量に含む。地下式横穴墓構築直前の造成土。

a. 黑褐色土。

b. 黑色土。綿り有り。自然堆積の黒ボク層(基本層序Ⅲ層)。

c. 暗褐色土。綿り有り。10層と異なりシラス、アカホヤ粒子を含まずローム土が強い。黒ボク土と周溝床面のローム土との漸移層。

第32図 生目43号地下式横穴墓土層断面図(S=1/40)

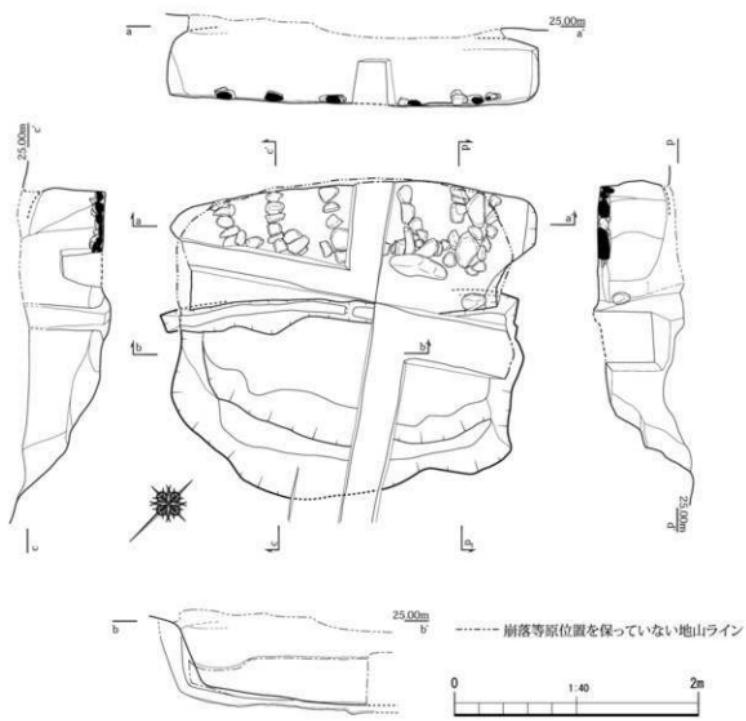
主軸セクション上



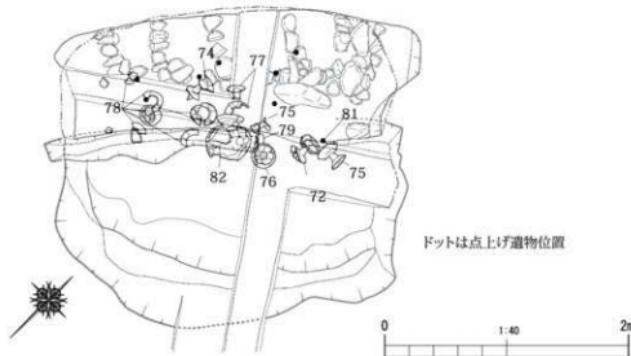
1. 第32図1層。

8. 第32図8層。

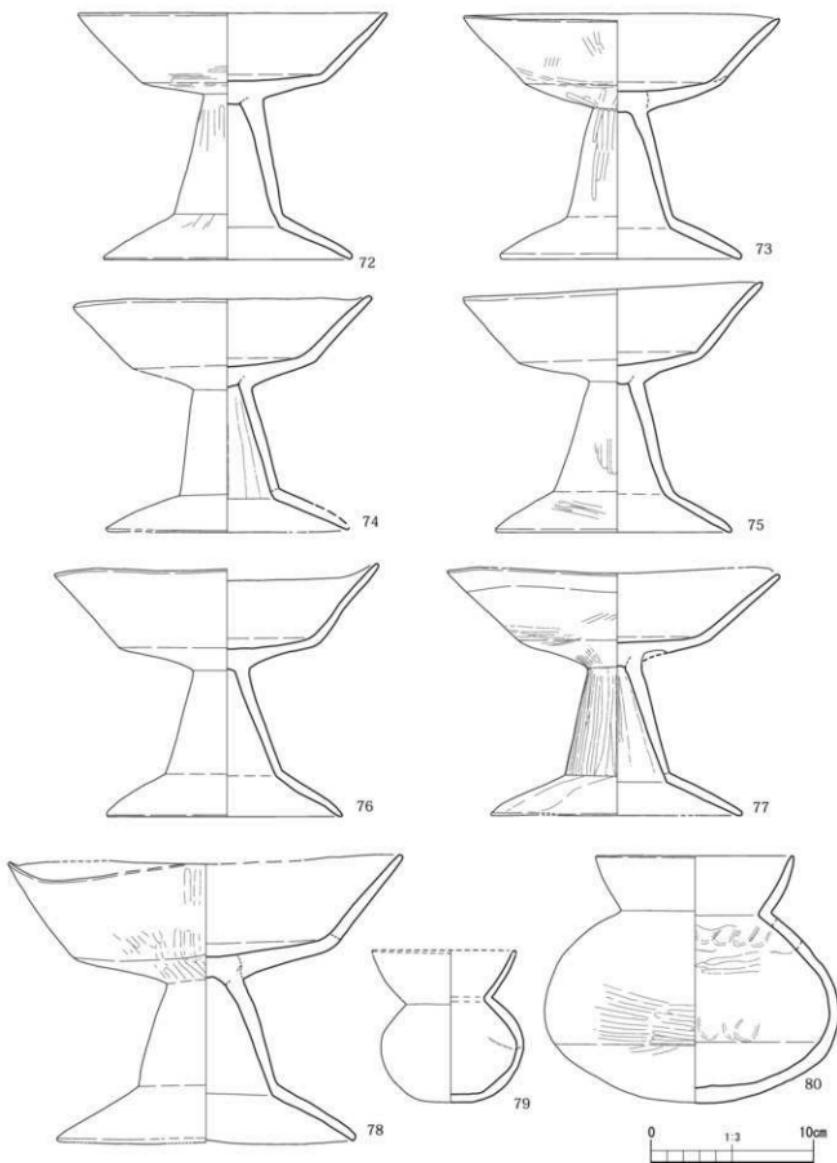
第33図 生目43号地下式横穴墓遺物取り上げ時土層断面図(S=1/20)



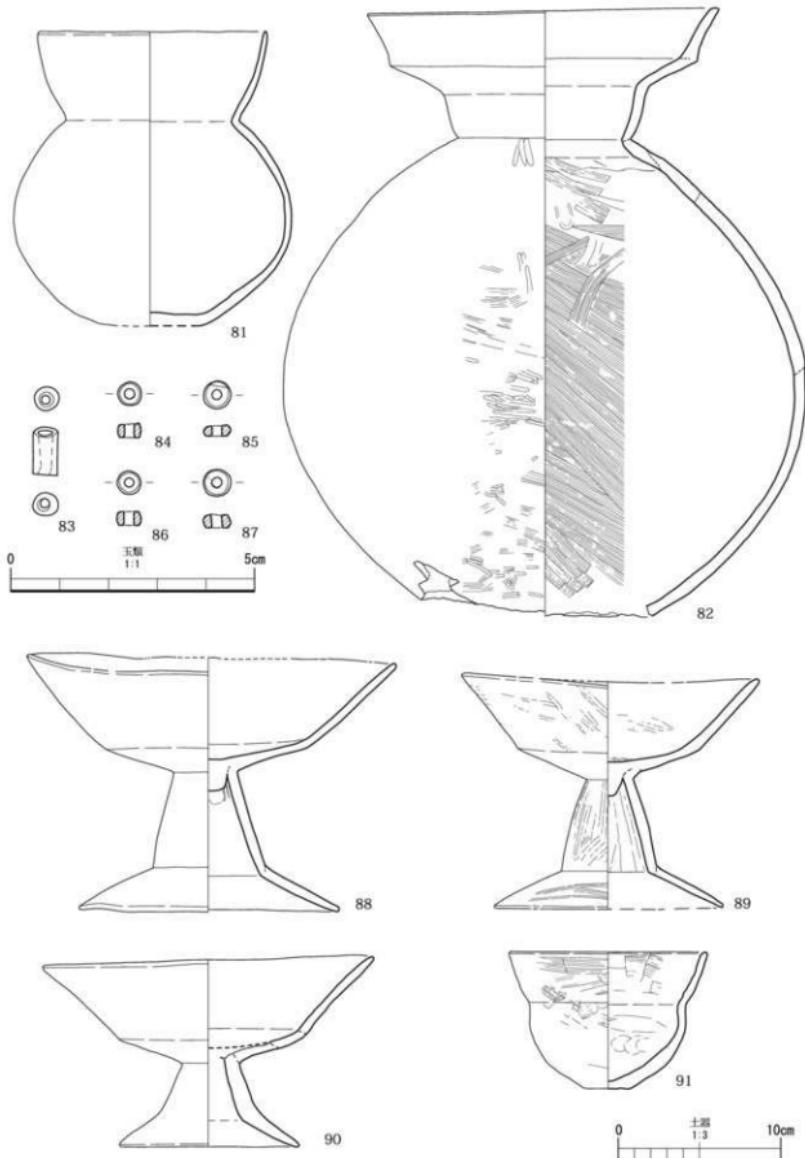
第34図 生目43号地下式横穴墓平面図及び立面図(S=1/40)



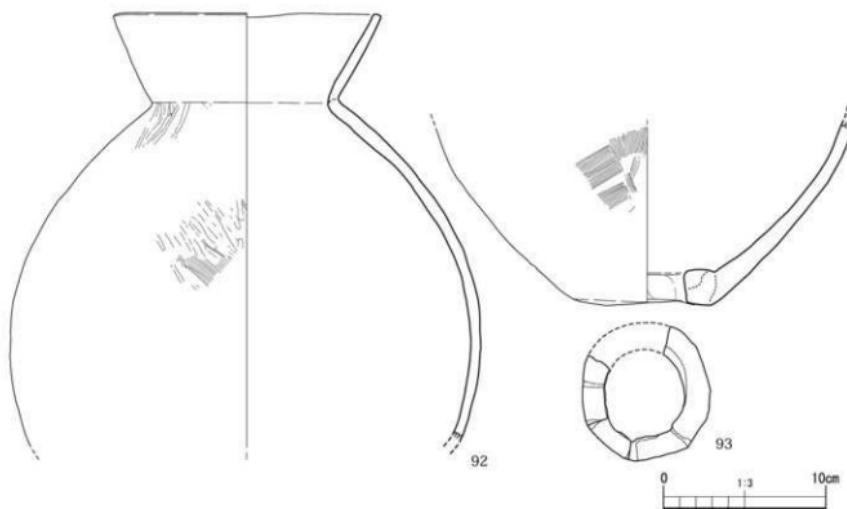
第35図 生目43号地下式横穴墓遺物出土状況実測図(S=1/40)



第36図 生目43号地下式横穴墓出土遺物実測図① (S=1/3)



第37図 生目43号地下式横穴墓出土遺物実測図② (S=1/3・S=1/1)



第38図 生目43号地下式横穴墓出土遺物実測図③ (S-1/3)

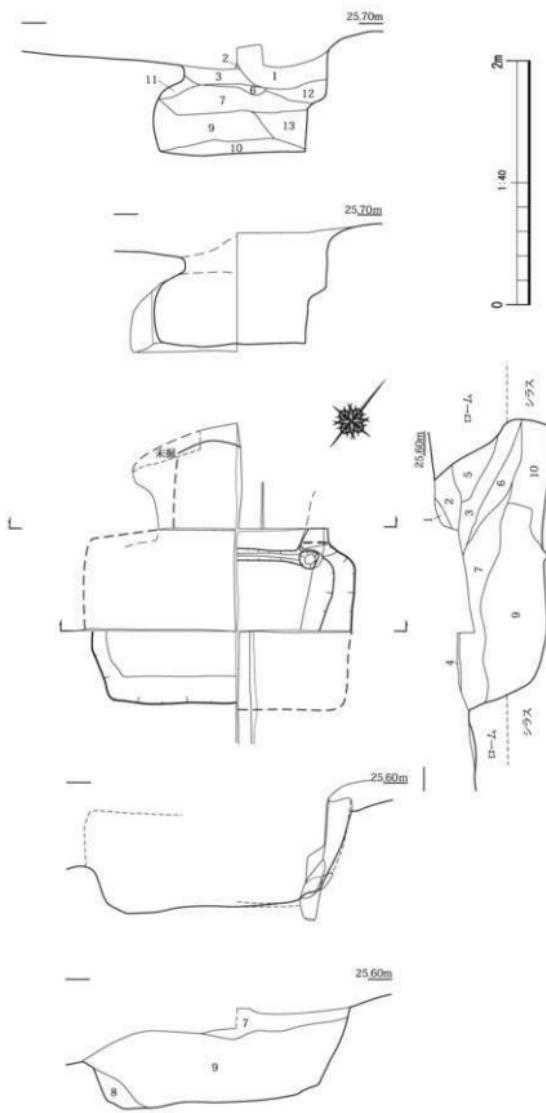
部と脚部の接合は充填法によるものであるが、脚部内面側に大きく突出している。脚部内面には擦り目痕がみられる。胎土はアカホヤ火山灰由来と思われる火山ガラスを含有する。89は口径18.3cm、器高14.6cmを測る。坏部と脚部の接合は充填法によるものであるが、脚部内面に大きく突出する。坏部の受部と口縁部の接合はやや丸みを帯びている。特に内面の稜は曖昧となり滑らかな弧を描く。外面は細かなミガキ調整が施されており、胎土にはアカホヤ火山灰由来と思われる火山ガラスが含まれる。88、89共に脚柱部と脚裾部の接合は脚部の外面側に脚裾部が取り付く形となる。90は口径20.1cm、器高11.7cmを測る。他の高坏と比較して脚部が短く器高が低い。坏部の受部と口縁部の屈曲は明瞭で、脚部の器壁が厚く裾部の開きは小さい。坏部内底面に剥離痕がみられ本来は充填法で接合されていたとみられるが、出土した際は充填部が失われ器台のような状況であった。その他は完形に復元できることから、意図的に充填部を抜いた可能性が高い。89、90は坏部の屈曲部が丸みを帯びている点や、充填部が脚部内面に大きく突出している点から今塩屋編年Ⅲ期b段階に位置付けられる。また脚部と脚裾部の接合方法が玄室上から出土した今塩屋編年Ⅲ期a段階の高坏群と異なることから、段階を分ける指標の一つになる可能性がある。91は土師器の小型鉢である。復元口径12.0cm、器高8.5cmを測る。頸部の締りは弱く、口縁部は内湾しつつ逆ハの字状に立ち上がる。92は土師器單口縁壺である。肩の張らない卵形の胴部を有し、頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は逆ハの字状に直線的に立ち上がる。口縁端部やや丸みを帯びているが面を有する。外面はハケメ後ミガキ調整で丁寧な仕上げである。93は壺形埴輪の底部から胴部片である。底部はドーナツ状の粘土輪を作り、そこから胴部を積みあげていくことで穿孔している。胴部外面はハケメ調整で、穿孔部内面には指オサエが残る。出土状況から高坏と小型鉢が置土端部の祭祀に用いられたもの

と考えられ、単口縁壺、壺形埴輪は墳丘上からの転落と位置付けられる。

このように玄室上と置土端部の土器群には時期差がみられることが明らかになった。前述のとおり、43号地下式横穴墓は、土層堆積状況や玄室の石列の乱れから追葬が想定されるが、玄室上の土器群が初葬に伴うものであり、置土端部の土器群が追葬に伴うものであると考えると理解しやすい。初葬は土師器高環と小型丸底壺の年代観から今塙屋編年III期a段階、5世紀初頭に位置付けられ、追葬は高環の年代観から今塙屋編年III期b段階、5世紀前葉（TK73段階併行）に位置付けられる。

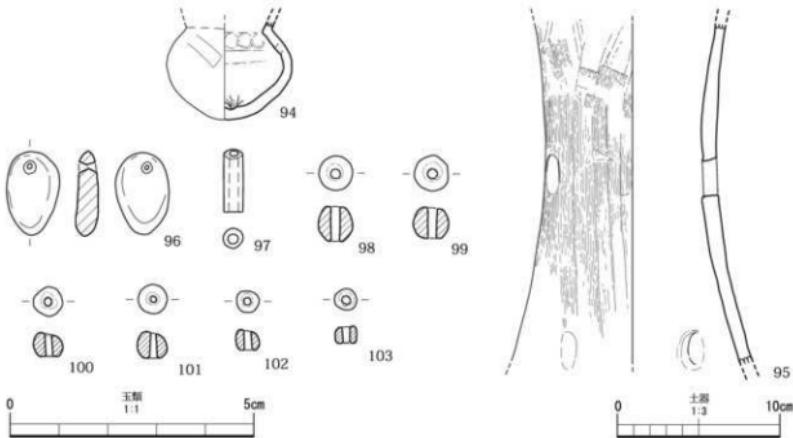
生目46号地下式横穴墓（第39図、第40図） 後円部北側周溝内、37号地下式横穴墓の西側で検出された。調査は竪坑を十字セクションの対面側2ヶ所を掘削し、玄室は半裁する予定であったが一部が調査区外に広がり、その上部に客土が厚く堆積していたことから、安全上の理由で左奥壁付近に掘り残した部分がある。調査によって得られたデータを基に形状を復元すると、玄室平入り構造の地下式横穴墓で、竪坑は平面形が横に長い長方形で長軸2.0m、短軸1.3m、深さ0.65mを測る。羨門は竪坑床面、玄室床面と同一レベルで幅1.25m、長さ0.6m、天井は崩落しているが高さは0.6mに復元される。玄室は平面形が歪な梢円形で、幅1.8m、奥行0.5m、高さは現況で0.4mである。玄室内に天井を構成するロームが厚く堆積していたことから（第39図10層）天井が剥離していると思われ、本来は高さがさらに低かった可能性が高い。竪坑と羨門の境界に板等の閉塞材を固定する溝とピットが検出されている。溝は幅10cm、深さ3cm程度、ピットは径15cm、深さ24cmを測る。竪坑、羨門は角を意識した形状となっているが、玄室は平面、立面共に丸みを帯びた葉巻状の形状で、奥壁と天井の境界も不明瞭である。また竪坑に接し、シラスブロックを多量に含有した埋土をもつ平面不整形の人為的な掘り込みが広がっていたことから、地下式横穴墓に付随する施設の可能性を想定してサブトレンチによる調査をおこなった。結果、シラスブロック含有土の下層からTh-Sを含有する黒色土が検出されたことから、地下式横穴墓に関連する遺構ではないと判断された。

遺物は竪坑埋土内から土器が、玄室埋土内から玉類が出土した。94は竪坑上での墓前祭祀に用いられたと想定される小型丸底壺である。算盤玉状の胴部を有し、頸部はくの字状に屈曲する。口縁部を欠くため判然としないが、大きく聞く形態ではないと思われる。口縁部が胴部径を上回ることはないと思われ、今塙屋編年III期b段階からIII期c段階に位置付けられる。95は器台である。1段に4孔の透かし孔が施されている。口縁部と底部を欠くため判然としないが弥生時代終末期から古墳時代初頭に位置付けられる。96は緑色凝灰岩製の両面穿孔の垂玉である。原石の形状を残し不整形である。97は緑色凝灰岩製の片面穿孔の管玉である。98～102は瑪瑙製丸玉である。直径が0.75cmの一群（98、99）、0.6cmの一群（100、101）、0.45cmの一群（102）に分けられる。いずれも片面穿孔で、開始面側と到達面側の径の差異は小さい。到達面側（図上方）に僅かに圧力剥離がみられる。色調は98が白濁しているが、他は鮮やかな橙色で透明感はほとんどない。103はガラス製丸玉である。色調はオリーブ黄色で、気泡は不明瞭ではあるが、孔方向に揃っていることから引き伸ばし法によるものと思われる。



1. 黒褐色土。繊りあり。1~2mm程度のコリア粒を含む。
 2. 黒褐色土。繊りあり。3. 繊りあり。1mm程度の褐色粒子を多量に含む。1cm程度の褐色ロームブロック含む。
 3. 黒褐色土。繊りあり。1mm程度の褐色粒子を少量含む。
 4. 黑褐色土。繊りあり。1mm程度の褐色粒子を微量に含む。
 5. 黑褐色土。繊りあり。1mm程度の褐色粒子であるが黒褐色土を主体。
 6. 黑褐色土。繊りあり。粒子の細かいローム主体。
 7. 黑褐色土。繊りあり。ローム中に径20cm以下20cm以上20%程度含む。堅防壁上。
 8. 黑褐色土。繊りあり。ローム中に径3cm以下3cm以上20%程度含む。堅防壁上。
 9. 黑褐色土。繊りあり。ローム中に径20cm以下20cm以上70%程度含む。堅防門上。
 10. 黒褐色土。繊りあり。ローム中の牛糞の黒褐色土下層の褐色土との混合。1cm以下のシラスブロック含む。
 11. 黒褐色土。繊りあり。堅防門上牛糞の黒褐色土上層の黒褐色土主体。
 12. 黒褐色土。繊りあり。ローム主体。
 13. 黒褐色土。7.9層より色濃いやや暗い。3cm以下シラスロームブロック含む。

第39図 生目46号地下式構築実測図(S-1/40)



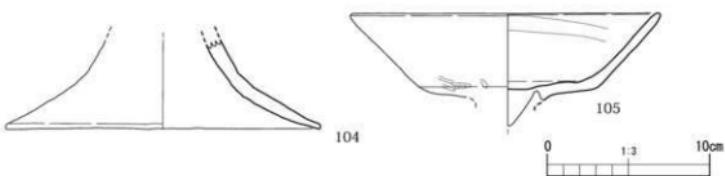
第40図 生目46号地下式横穴墓出土遺物実測図 (S=1/3・S=1/1)

46号地下式横穴墓の時期は94の小型丸底壺から中期中葉に位置付けられる。98～102の瑪瑙製丸玉が山陰系であれば、その生産の開始が後期中葉前半（大賀2013）となり時間的齟齬が生じるが、半島系であれば時間的な祖語は生じない。近接地では大淀川を挟んで対岸側の下北方5号地下式横穴墓から半島系の瑪瑙製管玉が出土している（大賀2013）。

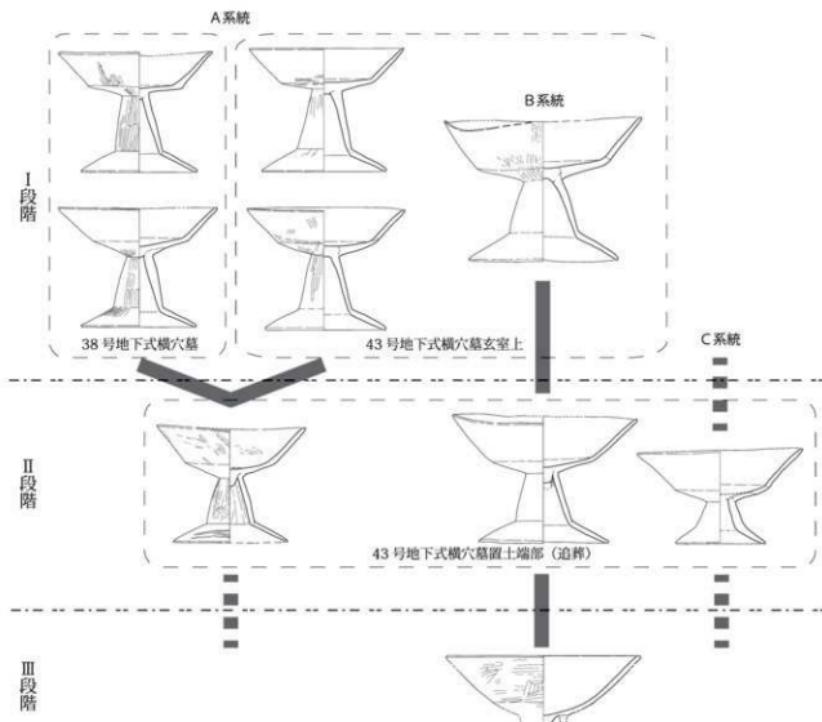
その他地下式横穴墓出土遺物（第41図） 第41図は地下式横穴墓検出の際に、堅坑上や置土上から出土した遺物である。104は生目39号地下式横穴墓から出土した土師器高坏脚部である。脚据部は屈曲せずスカート状に広がる。105は生目54号地下式横穴墓から出土した土師器高坏部である。内底面はほぼ水平に広がり受部と口縁部の屈曲は明瞭である。坏部と脚部の接合は充填法によるものである。今塩屋編年III期a段階に位置付けられる。

生目21号墳周溝内の地下式横穴墓出土高坏の変遷について（第42図） 前述のとおり生目21号墳の周溝内からは13基の地下式横穴墓が検出された。その中の一部の地下式横穴墓では良好なセット関係を有する土師器が出土しており、特に宮崎平野部において時期による変化を追やすい高坏も一定量出土している。ここではその高坏の変遷を示しておき、地下式横穴墓を位置付ける際の基礎としたい。なお高坏の形態変化の視点は今塩屋編年を援用する。

第1段階：21号墳周辺の地下式横穴墓の中で最も時期が遅いものは、38号地下式横穴墓と43号地下式横穴墓の初葬である。両者共に複数の高坏が出土しており、38号地下式横穴墓は置土端部、43号地下式横穴墓は玄室上でおこなわれた祭祀に伴う土器である。43号地下式横穴墓では、口径が18～20cm程度で脚柱部が細身のA系統、口径が23～24cm程度で脚柱部が幅広のB系統の高坏が出土している。38号地下式横穴墓はすべてA系統である。両系統共に坏部は内底面が平坦に近く、受部と口縁部の屈曲は内外面共に明瞭である。A系統の高坏は、坏



第41図 生目39号地下式横穴墓・54号地下式横穴墓出土遺物実測図(S=1/3)



第42図 生目21号墳周溝内地下式横穴墓出土高環変遷図(S=1/6)

部と脚部の接合の大半が充填法によるものであるが、脚部内面側への突出はほとんどない。B系統の高環は明瞭ではないが环と脚部の接合は脚部頂部凸面付加法によるものと思われる。A系統の中で25は环部の形態から僅かに新しい傾向がみられ、一括資料ではあるが一定の時期幅を有するものと思われる。ただし資料全体をみて今塩屋編年III期a段階に収まるものである。54号地下式横穴墓もこの段階に位置付けられる可能性がある。

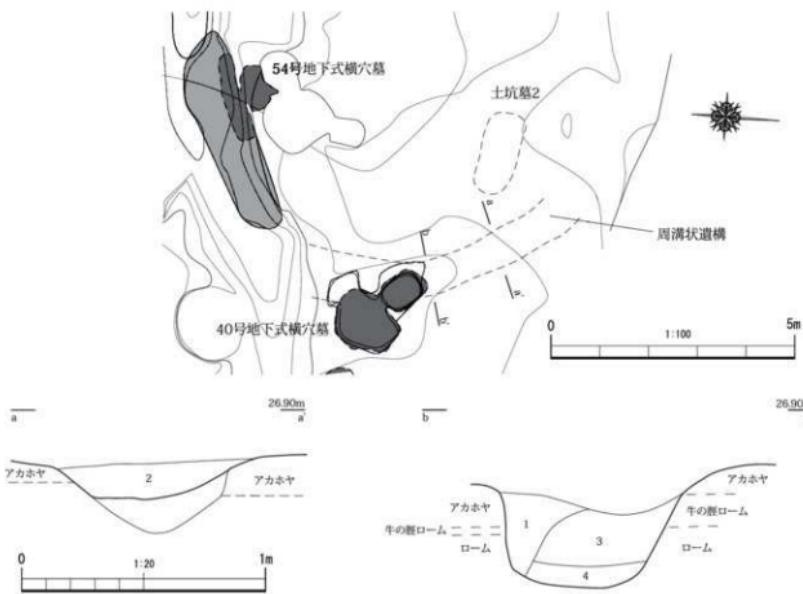
第II段階：第II段階に位置付けられる資料は43号地下式横穴墓の追葬に伴うものと思われる置土端部で出土した土器群である。ここではA系統、B系統に加え、器高が低い短脚の高壺も出土している。これをC系統とする。前段階からの変化が追えるA、B系統は壺部が深くなり、受部と口縁部の屈曲が外面共に緩くなる。壺部と脚部の接合は充填法によるものであるが、脚部内面側に大きく突出する。この段階は今塩屋編年III期b段階に位置付けられる。

第III段階：第III段階は41号地下式横穴墓で壺部のみが出土している。脚部を欠くため判然としないが口径からB系統と思われる。壺部の受部と口縁部の屈曲は非常に緩くなり、特に内底面は脚部側に落ち込み、そこから緩やかに立ち上がるため稜線がみられない。壺部と脚部の接合は充填法によるものである。今塩屋編年III期c段階に位置付けられる。

以上のように21号墳の周溝内に構築された地下式横穴墓出土高杯は3段階に分類される。特に注目されるのは本書でA系統、B系統とした高壺の共伴である。従来併行関係が判断しづらい資料であったが、43号地下式横穴墓の事例が1定点と成り得る。

第5節 その他遺構の調査成果

その他遺構の調査として、周溝状遺構と思われる緩やかな弧を描く溝をサブトレンチにより調査をおこなった。遺物は出土せず切り合いから21号墳に先行するものの時期は不明である。



1. 黒褐色土(Hue10YR2/2)。繊り無し。2cm以下の中明褐色粒子を少量含む。40号地下式横穴墓玄室天井崩落に伴う流入土。
2. 黒褐色土(Hue10YR2/3)。やや繊り無し。1cm以下の中明褐色粒子を少量含む。周溝状遺構埋土。
3. 増褐色土(Hue10YR3/3)。やや繊り無し。3cm以下のアカホヤロックを微量に含む。周溝状遺構埋土。
4. 増褐色土(Hue10YR3/3)。繊り無し。5mm以下の明褐色粒子を微量に含む。周溝状遺構埋土。

第43図 周溝状遺構1実測図(平面S=1/100、断面S=1/20)

第2表 生目21号墳周辺地下式横穴墓整理表

地番頁	画面番号	遺構番号	全長(m)	玄室 平面 形状	玄室天井 高さ(m)	壁状 態	壁状態(0)	時期	調査	構造位置	開口	出土物	備考	
p-25 第17区	20号	2.8m	平入り	楕円形	2.2×0.8×0.6	△—△	楕長 楕円	3.5×1.8×0.7	63号に 後出し	七ヶ所ジョーブレット 前方部隔壁びく れ面等	奥門・板	土器片・刀子	北窓内に2箇の窓、裏には窓が2箇、奥は窓が1箇、土のため施用時は空でついた。	
p-27 第18区	37号	—	平入り	長方形	—	円形?	未調査	TG208 併行	構出のみ	後円部北側	奥門・板	未調査	小型瓦底・器台	
p-29-30 第19区~ p-32-36 第24区	38号	2.7m	平入り	未調査	2.4以上×1.2×0.6 以上	△—△	楕長 長方形	2.3×1.8×1.3×0.7	TG232 併行	後円部北側 中央	奥門・板	土器片・小型瓦・出口 蓋土層付近から土壌層が繋まって 土	47号に切らせる 後円部北側	
p-55 第41区	39号	—	平入り	未調査	—	楕長 圓形?	未調査	柱出のみ	後方部北側 中央	奥門・板	未調査	土的磨耗部	玄室底部・底盤付近	
—	40号	—	平入り	未調査	—	楕円	未調査	柱出のみ	後方部北側 中央	奥門・板	未調査	未調査	玄室底部・底盤付近	
p-37-39 第25区~ 第26区	41号	1.6m	平入り	楕円形	1.3×1.1×0.5×0.3	△—△	楕長 楕円形	2.7×1.0×0.6	TG216 併行	楕底・玄室半段 前立面前面	奥門・板	直口壺・広口壺・継ぎ口 棒状軸付・鉢形(銀器等上) 新介・柳葉鏡・刀子・唐玉・鏡五 ・骨刀鞘(玉王15(文部))	玄室底部・底盤付近 二段壠上に轟に伴るものと思われる 特異片出土	
p-40-41 第29区~ 第30区	42号	1.9m	平入り	楕円形	0.9×0.4×0.25	△—△	不整形	2.0×1.0×0.2	生時代 終末期?	七ヶ所ジョーブレット 剥し・縫割	前立面前面 中央	奥門・土	直口壺・広口壺・継ぎ口 棒状軸付	玄室内部を切る 玄室底部
p-43-49 第31区~ 第38区	43号	2.6m	平入り	未調査	3.0×1.0×0.6	△—△	楕長 長方形	2.9×1.6×0.6	TG232 併行	七ヶ所ジョーブレット 剥し・縫割	後円部前面 中央	生時代 中期?	壁体を走る伝播管勾列の石柱 淮灰土上に通路等	
p-13-14 第9区	44号	—	平入り	未調査	—	楕長 長方形	—	TG232 併行	後円部前面 中央	奥門・板	未調査	生時代 中期?	生時代 中期?	
p-51-52 第39区~ 第40区	46号	2.3m	平入り	楕円形	1.8×0.5×0.4以上	△—△	楕長 長方形	2.0×1.3×0.65	TG216 併行?	半蔵	後円部北側	後円部北側 楕底	褐色埴跡留痕・1・棕色 青黄管玉・2・青黄管玉・3・ガラス 小管玉底(底丸)	
p-29-33 第19区~ p-36 第21区 第25区	47号	—	平入り	未調査	—	楕長 長方形	—	TG232 併行?	後円部北側 楕底	奥門・板	—	35号の壁块・玄室の一部を掘り込み 壁		
p-53 第41区	54号	—	平入り	未調査	—	楕長 圓形?	未調査	TG232a 併行	柱出のみ	未調査	未調査	未調査	玄室上から土壌層剥離部分出 上	
—	55号	—	平入り	未調査	—	楕長 圓形?	未調査	柱出のみ	後方部北側 中央	未調査	未調査	未調査	未調査	

第3表 出土土器観察表①

編號 番号	遺構 等	種 別	法規cm () : 深度	色	調 外 面 内 面	施成	調 焦		胎土(上:mm 下:mm)					備 考	実 測 番 号
							外 面	内 面	A	B	C	D	E		
p. 21 第14回	1	弥生土器 器台	— — —	にぶい・緑	緑	良好	ミガキ	工具ナダ、ミガキ	1 多						23-15
	2	弥生土器 器台	— — —	緑	緑	良好	ハケメ、ナダ	工具ナダ 多	1 多					施文あり(重底文)	27-8-1
	3	墳丘上堆 積土	13.4 —	にぶい・緑	黄灰	良好	ハケメ、ナダ	ナダ	3 多	1 少	1 少			施文あり(波状文)、内面 風化気味	23-26
	4	弥生土器 器	— — —	緑	緑	良好	ナダ、ミガキ ナダ	ナダ	3 多	1 少	1 少				23-16
	5	弥生土器 器	— — —	緑	黒緑	良好	ナダ、ハケメ ナダ、ハケメ	ナダ	3 多	1 少	1 少				23-14
p. 22 第15回	7	土師器 高环	— — —	緑	緑	良好	ナダ	ケズリ	微 少					窓部との接合面に剥落あり	20-17
	8	土師器 高环	— — —	緑	緑	良好	ナダ後ミガキ	ナダ	1 多	1 少				外表面風化気味	20-13
	9	土師器 壺	11.9 —	にぶい・緑	にぶい・緑	良好	ヨコナダ後ミ ガキ	ヨコナ ダ						内面風化気味	27-29
	10	周溝 鉢	(33.7) —	明赤陶	赤陶	良好	ハケメ	ナダ、ミガキ	1 多					内外面風化気味	27-17
	11	土師器 壺	— — —	緑	にぶい・黄緑	良好	ナダ、ハケメ	ナダ、工具ナ ダ	2 多						27-33
p. 23 第16回	12	土師器 壺	(CH. 6) 7.7	46.1	浅黄緑	褐灰	良好	ナダ後ハケメ	ナダ、工具ナ ダ	微 多					20- 11+12
	13	土師器 壺	— — —	にぶい・黄緑	にぶい・黄緑	良好	ヨコナダ、ハ ケメ	ナダ、ハケメ	1 多						27-28
	14	土師器 (30.1)	— —	浅黄緑	黄灰	良好	ナダ、ヨコナ ダ、ハケメ	ヨコナダ	3 多	2 少	1 少				20-20
	15	土師器 壺	— — —	にぶい・黄緑	黄灰陶	良好	ハケメ後ナダ	ナダ	3 多					外表面風化気味	27-35
	16	周溝 壺輪	— (10.4)	にぶい・緑	褐灰	良好	ナダ	工具ナダ	3 多	1 少	1 少			底部未充溝により穿孔	27-32
p. 27 第18回	17	周溝 壺輪	— 6.8	にぶい・黄緑	にぶい・緑	良好	ナダ	ハケメ	3 多					積み上げ成形により穿孔 底面に木薙庄籠があり	27-27
	18	周溝 壺輪	— 7.1	にぶい・黄緑	暗灰黄	良好	工具ナダ、ハ ケメ	工具ナダ	2 多	2 少				地成前の工具により穿孔 底面に草薙庄籠があり	27-34
	20	土師器 壺	6.9 —	8.6	明黄陶	緑	良好	ナダ	工具ナダ	3 多	1 少	1 少			20-10
	21	弥生土器 器台	(34.0) —	にぶい・緑	SYR7/6	良好	ミガキ	ナダ、工具ナ ダ	3 多					施文あり(重底文)	27-12
	22	土師器 高环	17.3 13.4	13.8	SYR8/3	浅黄緑	良好	ナダ、ミガキ	ナダ、ケズリ ナダ	2 少					20-1
p. 25 第23回	23	土師器 高环	19.0 14.3	14.9	SYR8/4	浅黄緑	良好	ヨコナダ後ミ ガキ	ナダ、ケズリ ナダ	2 少					20-4
	24	土師器 高环	19.1 14.1	15.1	SYR8/3	にぶい・黄緑	良好	ナダ、ミガキ	ナダ、ケズリ ナダ	1 少				环縫部接合面に剥落あり	20-8
	25	38号地下 式横穴墓	19.8 14.1	14.8	SYR8/3	浅黄緑	良好	ナダ、ミガキ ナダ	ナダ、工具ナ ダ、ケズリ風 ナダ	2 少					20-3
	26	土師器 高环	20.2 15.9	16.2	SYR8/4	にぶい・黄緑	良好	ミガキ	ナダ、ケズリ ナダ	1 少					20-9
	27	土師器 高环	20.6 14.4	15.3	SYR8/4	にぶい・黄緑	良好	ナダ後ミガキ	ナダ、ケズリ ナダ	1 少					20-15
p. 36 第24回	28	土師器 高环	19.7 15.4	16.2	SYR8/4	浅黄緑	良好	ナダ、ミガキ	ナダ、ケズリ ナダ	1 少				外表面風化気味	20-7
	29	土師器 高环	19.2 15.4	16.1	SYR8/6	明黄陶	浅黄緑	ナダ、ヨコナ ダ、ケズリ風	ナダ、ヨコナ ダ、ケズリ風 ナダ	2 少					20-6
	30	土師器 壺	7.5 —	8.2	にぶい・緑	緑	良好	ナダ、ハケメ	ナダ、工具ナ ダ	微 少					27-13
	31	土師器 壺	(8.6) —	8.6	緑	灰白	良好	ナダ、ヨコナ ダ、ヨコナ	ナダ、ヨコナ ダ	微 少				外表面風化気味	27-10
	32	38号地下 式横穴墓	9.4 2.9	9.6	SYR6/5	SYR8/2	浅黄	ナダ	ナダ、ヨコナ ダ、ヨコナ	1 少	2 多			外表面風化、地成後穿孔あり	20-5
p. 36 第25回	33	土師器 壺	12.5 —	15.6	2. SYR8/3	洪灰	良好	ナダ	ナダ、ヨコナ ダ、工具ナダ	微 少					23-7
	34	土師器 壺	14.6 2.8	16.7	7. SYR6/4	SYR8/4	にぶい・黄緑	ナダ	ナダ	1 多					27-6
	35	縄文土器 壺	— — —	にぶい・黄緑	灰黄緑	良好	ナダ	ナダ	1 少						27-14
	36	47号地下 式横穴墓	(18.4) —	7. SYR6/6	にぶい・緑	7. SYR6/4	良好	ナダ、ミガキ	ナダ、ミガキ	2 少	1 少	1 少		穿孔あり、外表面に赤色顔料 が一部残存	27-11

第4表 出土土器観察表②

発掘区 番号	構 造 等	種 別	法量cm () :復元		色		焼成	調 査		胎土(上:mm下:mm)					備 考	実 番 号	
			器 種	口径 底径 高さ	器高	外 面		外面	内面	A	B	C	D	E			
p.38 第27回	41号地下 式横穴墓	土師器 高坪	(23.5)	—	—	灰白 7.5YR8/2	にぶい黒 7.5YR6/3	良好 ヨコナダ、ミ ガキ	ヨコナダ、ミ ガキ	2	無 少	多				27-5	
		土師器 高 壁	—	—	—	にぶい黒 7.5YR6/4	にぶい黒 7.5YR6/4	良好 工具ナダ後ミ ガキ	ナダ	1	2				無 多	27-21	
		旁生土器 高	—	—	—	にぶい黄 10YR7/4	にぶい黄 10YR5/3	良好 —	—	1	1				施文あり(櫛痕状況)、 内面風化	23-19	
		旁生土器 壁	—	—	—	にぶい黒 7.5YR6/4	にぶい黒 10YR5/3	良好 ナダ	ナダ、ハケメ	1	微 少	強			施文あり(櫛痕状況)	27-22	
		旁生土器 高	—	—	—	にぶい黒 10YR6/4	にぶい黒 5YR1	良好 ナダ	ヨコナダ	1	1				施文あり(櫛痕状況)	27-23	
		旁生土器 壁	—	—	—	にぶい黒 7.5YR6/4	にぶい黒 10YR5/3	良好 ナダ	ナダ	1					施文あり(櫛痕状況)	27-15	
p.41 第30回	42号地下 式横穴墓	土師器 曲	(7.2)	—	—	橙 7.5YR7/6	にぶい黄 10YR7/4	良好 ヨコナダ	ヨコナダ	微 少	強				内外面風化気味	23-10	
		土師器 曲	—	—	—	橙 7.5YR7/6	7.5YR6/6	良好 ナダ	ナダ	3	2					23-11	
		旁生土器 曲	—	—	—	橙 7.5YR6/6	にぶい黄 10YR5/3	良好 ナダ後ミガキ	ナダ、ハケメ	1	強					27-24	
		土師器 曲	—	—	—	浅黄橙 10YR8/6	7.5YR8/4	良好 ハケメ	ハケメ	1					内面は風化気味	23-9	
		旁生土器 曲	—	—	—	にぶい黒 10YR8/4	10YR3/1	良好 ミガキ	ナダ	1					2箇所に穿孔あり	27-25	
		不明	—	1.7	—	10YR8/4	10YR3/1	良好 ミガキ	ナダ	1	強						
p.47 第36回	43号地下 式横穴墓	土師器 高坪	18.8	15.1	15.2	浅黄橙 10YR8/4	10YR8/4	良好 ナダ、ミガキ	ナダ後ミガ キ、ケズリ風 ナダ	1	1	多				23-5	
		土師器 高坪	19.4	14.7	15.2	浅黄橙 10YR8/4	10YR8/4	良好 ナダ後ミガキ	ナダ後ミガ キ、ケズリ風 ナダ	微 少	強	多				23-1	
		土師器 高坪	18.4	15.0	14.4	橙 7.5YR6/6	7.5YR6/6	良好 ミガキ、ナダ	ミガキ、工具 ナダ、ナダ							27-31	
		土師器 高坪	18.3	14.3	15.4	浅黄橙 7.5YR6/8	7.5YR6/8	良好 ミガキ	ヨコナダ	1					内外面風化気味	23-4	
		土師器 高坪	19.8	14.3	15.6	黄 7.5YR7/8	7.5YR7/6	良好 ヨコナダ	ヨコナダ	1	1	強				23-3	
		土師器 高坪	20.5	15.4	15.3	橙 7.5YR6/4	10YR6/4	良好 ナダ後ミガキ	ナダ後ミガ キ、ケズリ風 ナダ							27-30	
		土師器 高坪	24.3	18.1	17.9	明灰灰 7.5YR7/2	7.5YR7/3	良好 ナダ後ミガキ	ナダ、ケズリ 風ナダ							27-16	
		土師器 高坪	—	2.4	—	橙 7.5YR6/8	7.5YR6/8	良好 工具ナダ	ナダ	1		強				23-2	
		土師器 高坪	12.0	—	15.2	にぶい黄 10YR7/4	10YR7/4	良好 ミガキ、ナダ	ナダ後エ 工具ナダ							20-2	
		土師器 曲	13.9	5.3	18.2	橙 5YR6/8	5YR6/8	良好 —	—	1		強			内外面風化気味	23-6	
p.48 第37回	43号地下 式横穴墓	土師器 曲	21.4	—	37.4	にぶい黄 10YR7/4	10YR7/3	良好 ハケメ後ミガ キ	ハケメ	3	3				底部は焼成後穿孔	20-1	
		土師器 高坪	22.7	16.0	15.9	橙 7.5YR6/6	7.5YR6/4	にぶい黒 ナダ後ミガキ	ナダ、ケズリ 風ナダ		1	強					27-19
		土師器 高坪	18.3	14.1	14.6	にぶい黒 7.5YR6/4	7.5YR6/4	にぶい黒 ナダ後ミガキ	ナダ、ケズリ 風ナダ							27-20	
		土師器 高坪	20.1	10.9	11.7	にぶい黒 7.5YR7/4	7.5YR6/4	にぶい黒 ナダ後ミガキ	ナダ、ミガキ ナダ、ケズリ 風ナダ	2	1	強				20-2	
		土師器 曲	(12.0)	(2.7)	8.5	にぶい黄 10YR6/4	7.5YR8/2	良好 ナダ後ハケメ	ナダ、ハケメ	3						27-2	
		土師器 曲	16.5	—	—	にぶい黒 7.5YR5/4	7.5YR5/4	良好 ナダ、ハケメ 後ミガキ	ナダ	3	1	多				27-18	
p.49 第38回	43号地下 式横穴墓	土師器 曲	—	7.9	—	にぶい黄 10YR6/4	7.5YR5/3	明灰 ナダ、ハケメ	ナダ	1	多				ドーナツ状底部	27-1	

第5表 出土土器観察表③

揭露頁 図番号	遺構 等	種別	法量cm ()	復元 底径 厚さ	外 面	内 面	焼成	調査					備考	実 番 号
								外面		内面		紹士 (上: ■ 下: □)	E	
								A	B	C	D	E		
p. 52 第40回	94 66号地下 施	土師器	—	—	浅黄褐色	浅黄褐色	良好	ナゲ、ヨコナ デ	ナゲ	無 傷	1	多	表面に赤色顔料が生存	20-16
	95 式横穴墓	手生土器	—	—	10YR8/3 10YR8/3	10YR8/3 10YR8/3	良好	ハケメ後 年	ナゲ	1	少	多	局部的に灰白釉土がマーブル状、一部表面に見られる	27-26
p. 53 第41回	104 39号・54 号地下式 横穴墓	土師器 壺	—	19.4	粗	粗	良好	ナゲ	ナゲ	3	少	1	内外面風化気味	20-19
	105 高环	土師器 壺	18.8	—	にぶい壺 10YR8/3	浅黄褐色	良好	ナゲ、ミカキ	ナゲ	1	少	多		20-18

紹土: A:宮崎小石 B:長石、石英 C:鈣石、角閃石 D:雲母 E:火山ガラス

第6表 出土玉類観察表

揭露頁	図番号	揭露番号	遺構等	器種	石材	長(高さ) (cm)	幅(長径) (cm)	厚(径) (cm)	重量 (g)	備考	実 番 号
p. 38	第27回	43	41号地下式横穴墓	管玉	碧玉	1.50	0.50	0.25	0.61	両面穿孔	27-60
		44	41号地下式横穴墓	白玉	滑石	0.30	0.45	0.20	0.05		27-48
		45	41号地下式横穴墓	白玉	滑石	0.20	0.45	0.20	0.05		27-57
		46	41号地下式横穴墓	白玉	滑石	0.30	0.45	0.20	0.07		27-56
		47	41号地下式横穴墓	白玉	滑石	0.15	0.50	0.25	0.04		27-55
		48	41号地下式横穴墓	白玉	滑石	0.21	0.43	0.20	0.06		27-58
		49	41号地下式横穴墓	白玉	滑石	0.20	0.47	0.25	0.04		27-54
		50	41号地下式横穴墓	白玉	滑石	0.25	0.35	0.15	0.04		27-51
		51	41号地下式横穴墓	白玉	滑石	0.17	0.41	0.20	0.04		27-53
		52	41号地下式横穴墓	白玉	滑石	0.21	0.32	0.12	0.03		27-49
p. 48	第37回	53	41号地下式横穴墓	白玉	滑石	0.20	0.32	0.10	0.04		27-46
		54	41号地下式横穴墓	白玉	滑石	0.20	0.30	0.10	0.03		27-59
		55	41号地下式横穴墓	白玉	滑石	0.20	0.32	0.10	0.03		27-61
		56	41号地下式横穴墓	白玉	滑石	0.25	0.60	0.12	0.03		27-47
		57	41号地下式横穴墓	白玉	滑石	0.25	0.33	0.15	0.03		27-62
		58	41号地下式横穴墓	白玉	滑石	0.20	0.35	0.15	0.02		27-50
		83	41号地下式横穴墓主室	管玉	碧玉	1.00	0.50	0.30	0.41	両面穿孔	27-75
		84	41号地下式横穴墓主室	白玉	滑石	0.30	0.50	0.20	0.09		27-74
p. 52	第40回	85	41号地下式横穴墓主室	白玉	滑石	0.20	0.55	0.20	0.10		27-73
		86	41号地下式横穴墓主室	白玉	滑石	0.30	0.47	0.20	0.12		27-72
		87	41号地下式横穴墓主室	白玉	滑石	0.25	0.57	0.20	0.15		27-71
		96	46号地下式横穴墓	墨玉	緑色凝灰岩	1.70	1.10	0.45	0.91	両面穿孔	27-64
		97	46号地下式横穴墓	管玉	緑色凝灰岩	1.30	0.40	0.20	0.25	片面穿孔	27-62・63
		98	46号地下式横穴墓	丸玉	瑪瑙	0.70	0.75	0.20	0.47	他の周縁より色濃い	27-69
		99	46号地下式横穴墓	丸玉	瑪瑙	0.65	0.75	0.20	0.46		27-65
		100	46号地下式横穴墓	丸玉	瑪瑙	0.50	0.60	0.15	0.21		27-66
		101	46号地下式横穴墓	丸玉	瑪瑙	0.55	0.60	0.15	0.26		27-67
		102	46号地下式横穴墓	丸玉	瑪瑙	0.40	0.45	0.12	0.11		27-68
p. 39	第41回	103	46号地下式横穴墓	丸玉	ガラス	0.45	0.45	0.15	0.11	丸玉・ガラス兼用	27-70

第7表 出土鉄器観察表

揭露 頁	図 番 号	揭露 番 号	遺構等	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	実 番 号
p. 21	14	6	21号植柱上堆積上	鉄鋸or小型鉄斧	(3.7)	(2.4)	(0.2)	8.8		27-36
p. 25	17	19	20号地下式横穴墓玄室	刀子	12.3	1.8 (刃部)	0.3 (刃部)	17.0		27-43
p. 38	27	39	41号地下式横穴墓	鉄鋸	25.1	1.3 (刃部)	0.5	148.0	山形抉	27-40
	27	60	41号堆下式横穴墓埴輪上	鉄鋸	16.3	4.5 (身)	0.25 (身)	56.1	手彌彌	27-45
	27	61	41号地下式横穴墓玄室	鉄斧	16.8	6.7 (刃部)	3.9 (刃部)	800.0		27-39
p. 39	28	62	41号地下式横穴墓玄室	方形鐵劍先	5.8	12.5	0.3	155.0		27-38
	28	63	41号地下式横穴墓壁上	鉄鍔	17.8	2.3 (刃部)	0.6	75.1		27-41
	28	64	41号堆下式横穴墓壁上	鉄鍔	20.6	2.0 (刃部)	0.5	78.0		27-42
	28	65	41号地下式横穴墓玄室	刀子	(3.3)	(1.0)	0.5	3.9		27-37
	28	66	41号堆下式横穴墓壁内	不削鉄製品	(18.9)	1.1	0.4	15.5		27-44

第III章 総括

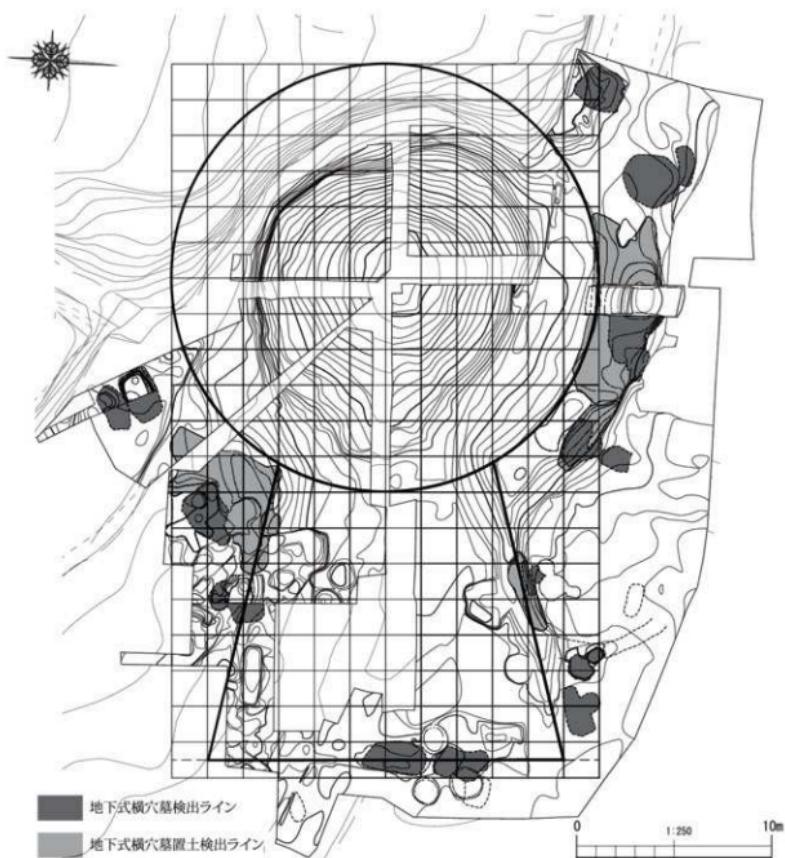
第1節 生目21号墳の墳形について

発掘調査の結果、生目21号墳の墳丘、周溝は大きく搅乱を受けていることが明らかになった。特に前方部は削平が著しく、立面形の復元は不可能であるため、本節では墳丘平面形の復元のみをおこなうことにした。第44図が21号墳の墳丘平面復元図である。前述の理由から段築や墳頂平坦面の形状は復元できないため、墳丘外形の復元のみに止まっている。墳丘の復元に当たっては、沼澤氏の24等分値企画法（沼澤2005）を参考にした。北側周溝は後円部西側を除いて比較的良好に残存しており、墳端の位置を捉え易い。特に北側くびれ部から38号地下式横穴墓が構築されている地点までは、後円部墳端の円弧が明瞭であり、そこから復元される後円部径は22mとなる。前方部はくびれ部から隅角に向け周溝が徐々に浅く狭くなり、隅角で収束するため墳端が不明瞭であるが、前方部長14m、前方部幅18mに復元される。前方部前端は、周囲が削平を受けているため位置の復元が困難であったが、41号地下式横穴墓の玄室が周溝外縁下に構築されているとの想定で位置を復元した。これらの復元により墳長は36m、くびれ部幅11mとなる。後円部径と前方部長の比率だけをみると生目14号墳と近似する値であるが、くびれ部幅、前方部幅は21号墳が広く、平面形は大きく異なる。くびれ部から前方部隅角に向け大きく開く、いわゆる撥形の前方部となる。

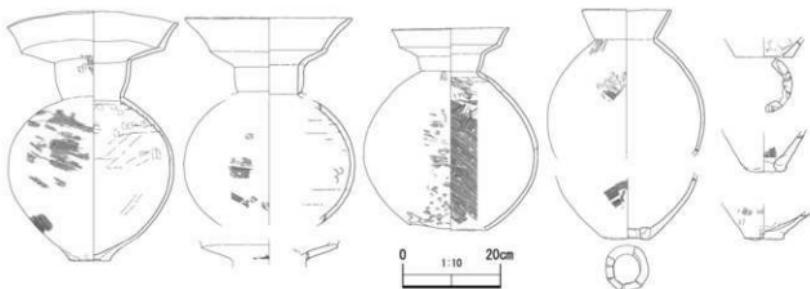
周溝の平面形は墳丘形状に沿った鍵穴形であるが、後円部側の周溝が幅広く深い。前述のとおり前方部側ではくびれ部から前方部隅角に向け徐々に周溝が狭くなり、前方部隅角で一旦周溝が収束し、前方部前面の周溝は浅い区画溝程度である。これは橋本氏によって「九州南部型前方後円墳」の一つの特徴（橋本2012）として挙げられている周溝形態である。生目古墳群では生目3号墳、5号墳、14号墳が類似する周溝形態であり、橋本氏は7号墳も含めている。これらの前方後円墳の墳丘形態は各々異なるが、4世紀前半の21号墳から5世紀後葉の7号墳まで踏襲される周溝形態は、生目古墳群において前方後円墳を構築する上で重要な要素であったと考えられる。

第2節 生目21号墳の出土遺物について

生目21号墳からは墳長36mの小型前方後円墳としては多くの遺物が出土している。しかしその大半は、周溝内に寄生する地下式横穴墓や、周囲に存在する21号墳構築以前の遺構に帰属する遺物であり、確実に21号墳に伴う遺物量は多いものではない。尚且つ墳丘が大きく削平されているため原位置を留めている21号墳に伴う遺物はなく、いずれも周溝内に転落した状況で出土している。周溝出土遺物の中で21号墳に伴う可能性が高いものは12～18の二重口縁壺、壺形埴輪である。また43号地下式横穴墓において再利用されたと思われる二重口縁壺（82）も、本来は21号墳に伴う遺物と想定される。個別の記述は前章でおこなったため再記しないが、12、14、82のエンタシス状の頸部や12、16～18の底部形状をみると、近接地では西都原13号墳出土資料が近似する。底部のバリエーションが、無穿孔、底部未充填による穿孔、積み上げ成形による穿孔（西都原13号墳の12-30は積み上げ成形の範疇に含めた）と雑多な状況である点も一致する。また二重口縁壺に加え單口縁壺が墳丘に樹立されていたと想定される点も同様である。生目古墳群では、21号墳に後出する14号墳、5号墳の壺形埴輪においても單口縁と二重口縁が共存し



第44図 生目21号墳平面復元図(S=1/250)



第45図 生目21号墳に伴う二重口縁壺・単口縁壺・壺形埴輪(S=1/10)

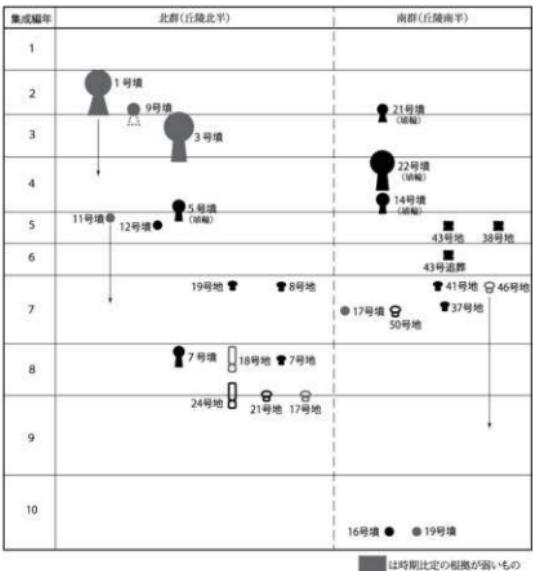
ており、21号墳に始まる系譜と考えられる。西都原13号墳は久住編年ⅢA期に位置付けられており（久住2010）、集成編年では3期に相当する。集成編年2期後半～3期の21号墳に僅かに後出する資料であり、宮崎平野部における本段階の古墳祭祀の一端を示しているといえる。

第3節 生目21号墳周溝内の地下式横穴墓について

生目21号墳の周溝内からは13基の地下式横穴墓が検出された。すべての地下式横穴墓の調査をおこなったわけではなく、不明瞭な点も残るが検討をおこなうことにする。I期（5世紀初頭）には38号、43号地下式横穴墓が構築される。両者共に竪坑と玄室の幅がほぼ等しく、羨門が未発達の形態を呈する。玄室内の出土遺物は43号地下式横穴墓において玉類が出土しているのみで、副葬品が乏しい点も共通する。その構築位置は38号地下式横穴墓が後円部の中心を意識した主軸直交位置、43号地下式横穴墓が左くびれ部と前方後円墳の構造を意識した位置であることが注目される。II期（5世紀前葉）には43号地下式横穴墓の追葬がおこなわれる。III期（5世紀中葉）には41号地下式横穴墓が構築される。38号、43号地下式横穴墓と異なり羨道が明瞭な土壌系の地下式横穴墓である。小型の玄室にも関わらず、多量の鉄器、玉類が出土した。出土した鉄器は、津曲氏が生目古墳群の地下式横穴墓の傾向として指摘したとおり農耕具が目立つ（津曲2015）。また小型丸底壺を重視すれば46号地下式横穴墓がこの期に属する。IV期（5世紀中葉～後葉）には未調査であるが、検出時に出土した小型丸底壺から37号地下式横穴墓が構築されたと想定される。

38号、43号地下式横穴墓の構築年代が5世紀初頭に位置付けられることによって、加久藤盆地の小木原・藪地下式横穴墓群における地下式横穴墓の成立との時間差が解消された。横口式土坑墓である藪ST1007は38号・43号地下式横穴墓と形態が類似し、従来は43号地下式横穴墓の祖形として捉えられたこともある。しかし、小木原・藪地下式横穴墓群において、この形態の横口式土坑墓は主体的ではなく、他の横口式土坑墓と異なり竪坑と玄室の床面が同レベルとなっている点、出土遺物がないため遺構そのものの時期は不明瞭である点も考慮すると、むしろ38号・43号地下式横穴墓が藪ST1007に影響を与えた可能性が指摘できる。一方で、いわゆる土壌系の地下式横穴墓は、出現期まで遡る事例が現段階では生目古墳群は確認されていないため、この点においては小木原・藪地下式横穴墓群から生目古墳群への影響が想定される。このように、地下式横穴墓の成立には両地域間の相互作用が関わっているものと思われる。この背景には、柳沢氏が指摘しているように、倭王権によっておこなわれた南九州における朝鮮半島交渉に関わる軍士の微発が、4世紀代の後半までは地域の盟主であった生目勢力をを通しておこなわれた可能性があり、生目勢力と加久藤盆地の勢力が共に北部九州や朝鮮半島の横穴系の墓制に触れる機会を得ていたためと考えられる（柳沢ほか2011）（註1）。また38号、43号地下式横穴墓にみられる羨門が不明瞭な地下式横穴墓は、その後継続して構築されていないため、南九州における横穴系墓制の導入期に限定してみられた形態と考えられる。

生目古墳群における地下式横穴墓という横穴系墓制の導入は、前方後円墳周溝内に構築されるものの、新規に墳丘を構築することがない「中間層」とでも呼ぶべき階層から始まり、横穴式石室が首長墓である前方後円墳に導入される北部九州や、当初は下位階層である土坑墓を構築する階層に地下式横穴墓が導入される加久藤盆地とは異なる結果となった背景を検討する必要がある。



第4図 生目古墳群主要古墳・主要地下式横穴墓変遷図

が構築されたと考えられる。50～60年という年代差は、世代に換算すると2世代程度であり、伝え聞いた始祖の墓に同族が地下式横穴墓を構築する、という図式と理解される。5世紀初頭から後葉までの約100年間に13基という数を鑑みると、血縁を有する同族である可能性が高い。始祖墓とそれに付随する地下式横穴墓という観点からみると、土生田氏が挙げた他地域の事例とは異なり、始祖墓である21号墳のみではなく、後続する22号墳や14号墳においても少数ではあるが地下式横穴墓の寄生がみられることは、地域的な特性も含めた検討が必要といえる。

（註1）津曲氏は土師器編年を再考し、小木原遺跡地区の横口式土坑墓編年を見直した上で、横口式土坑墓の成立が北部九州において初期横穴式石室が出現する以前であることを提示し、横口式土坑墓と地下式横穴墓を分離して考えるべきとの見解を示している（津曲 2013）。

【引用・主要参考文献】

- 今堀塙毅行 2011 「第IV章総括 IV古墳時代」『板平遺跡第3・4次調査』宮崎県埋蔵文化財センター。
- 大賀克彦 2013 「2玉と石製品の形式学的研究①玉類」「副葬品の形式と編年」古墳時代の考古学4、同成社。
- 河野裕次 2015 「宮崎平野南部における弥生時代後期～古墳時代初期の土器編年試案」『宮崎考古』第26号、宮崎考古学会。
- 久住猛雄 2010 「筑前地方における首長墓系列の再検討」『九州における首長墓系譜の再検討』九州前方後円墳研究会。
- 津曲大祐 2013 「横口式土壙墓と地下式横穴墓」-宮崎内陸部における地下式横穴墓の出現めぐる諸問題-、福岡大学考古学論集2。
- 津曲大祐 2015 「地下式横穴墓の成立と展開」『第12回古代武器研究会発表資料集』古代武器研究会・山口大学考古学研究室。
- 沼澤 登 2005 「前方後円墳の墳丘規格に関する研究（上）」『考古学雑誌』第89巻第2号、日本考古学会。
- 橋本達也 2012 「3地域の展開①九州南部」『古墳出現と展開の地域相』古墳時代の考古学2、同成社。
- 橋本達也 2014 「九州南部における古墳時代鉄器の基礎的研究」鹿児島大学総合研究博物館。
- 土生田純之 2010 「始祖墓としての古墳」『古文化談叢』第65集、九州古文化研究会。
- 柳沢一男ほか 2011 「生目古墳群と日向古代史」宮崎平野の巨大古墳が語るもの、鉱誠社。

第4節 生目21号墳と地下式横穴墓

以上のように21号墳周溝内の地下式横穴墓は、5世紀初頭に構築が開始されて以降、5世紀後葉まで継続的に構築されている。21号墳の築造時期が4世紀前半であるため、最初に構築された38号、43号地下式横穴墓との時間差は、短く見積もっても50～60年程度あり、当時では地下式横穴墓の被葬者が、直接21号墳の被葬者を認識し得た可能性は低い。21号墳は墳長36mの小規模な前方後円墳であるが、生目古墳群の南群で最初に構築された前方後円墳であり、「始祖墓」（土生田2010）としての役割を担ったため、小規模古墳にも関わらず、周溝内に多数の地下式横穴墓



写真図版





生目21号墳遠景
(空撮: 北から)



生目21号墳調査終了時遠景
(空撮: 垂直)



生目21号墳調査終了時（前方部北隅角から）



生目21号墳調査終了時（後円部北西から）



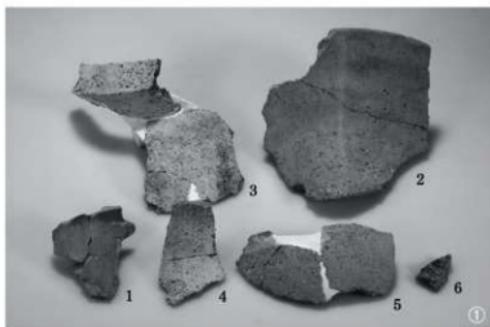
北側周溝遺物出土状況
(北東から)



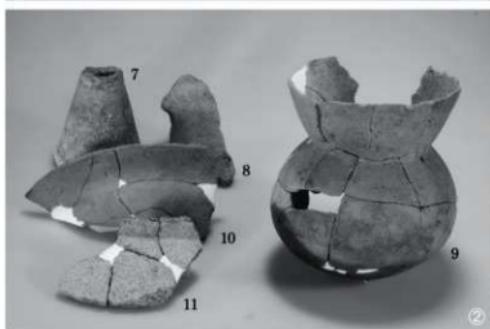
北側周溝くびれ部付近
二重口縁壺出土状況
(西から)



北側周溝38号地下式横穴墓
付近二重口縁壺出土状況
(北から)



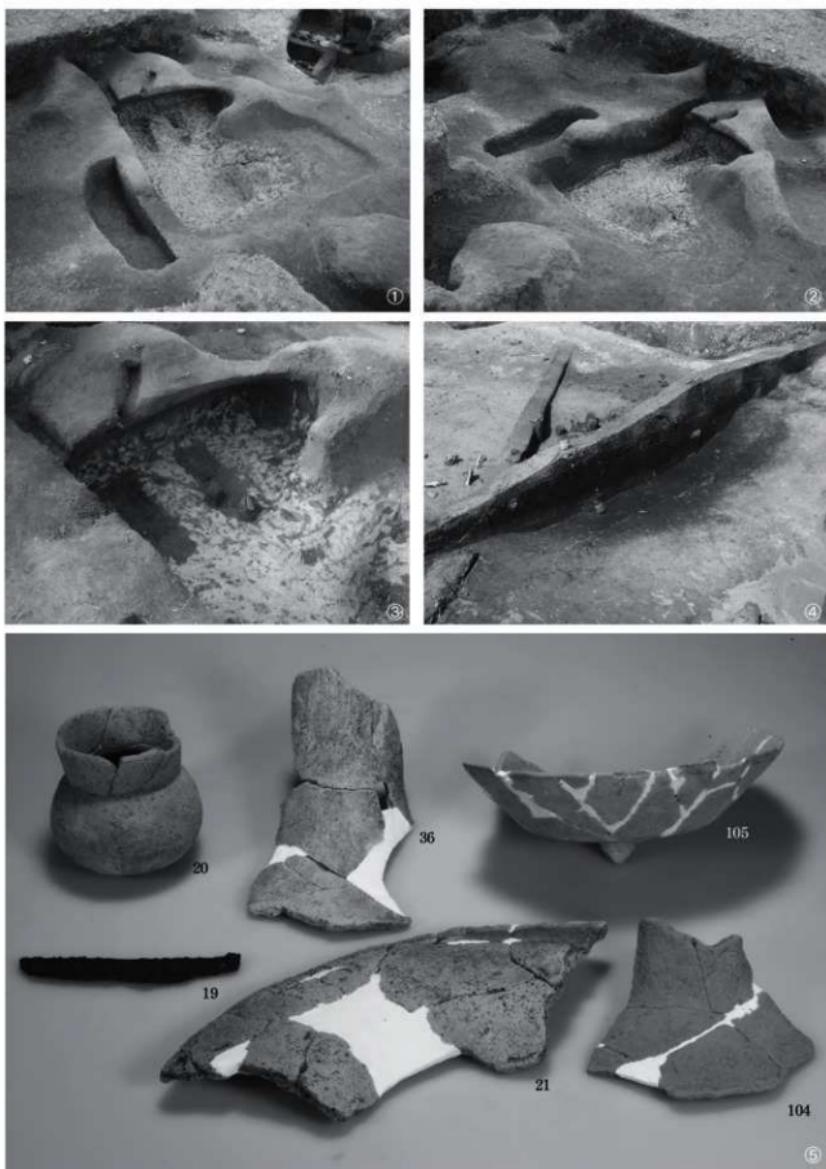
①



②

①填丘上堆積土出土遺物
②周溝出土遺物 1
③周溝出土遺物 2





①20号地下式横穴墓調査終了時状況（北から） ②20号地下式横穴墓調査終了時状況（北西から）
③20号地下式横穴墓玄室調査状況（北から） ④37号地下式横穴墓竪坑検出状況（南東から）
⑤20号・37号・39号・47号・54号地下式横穴墓出土遺物

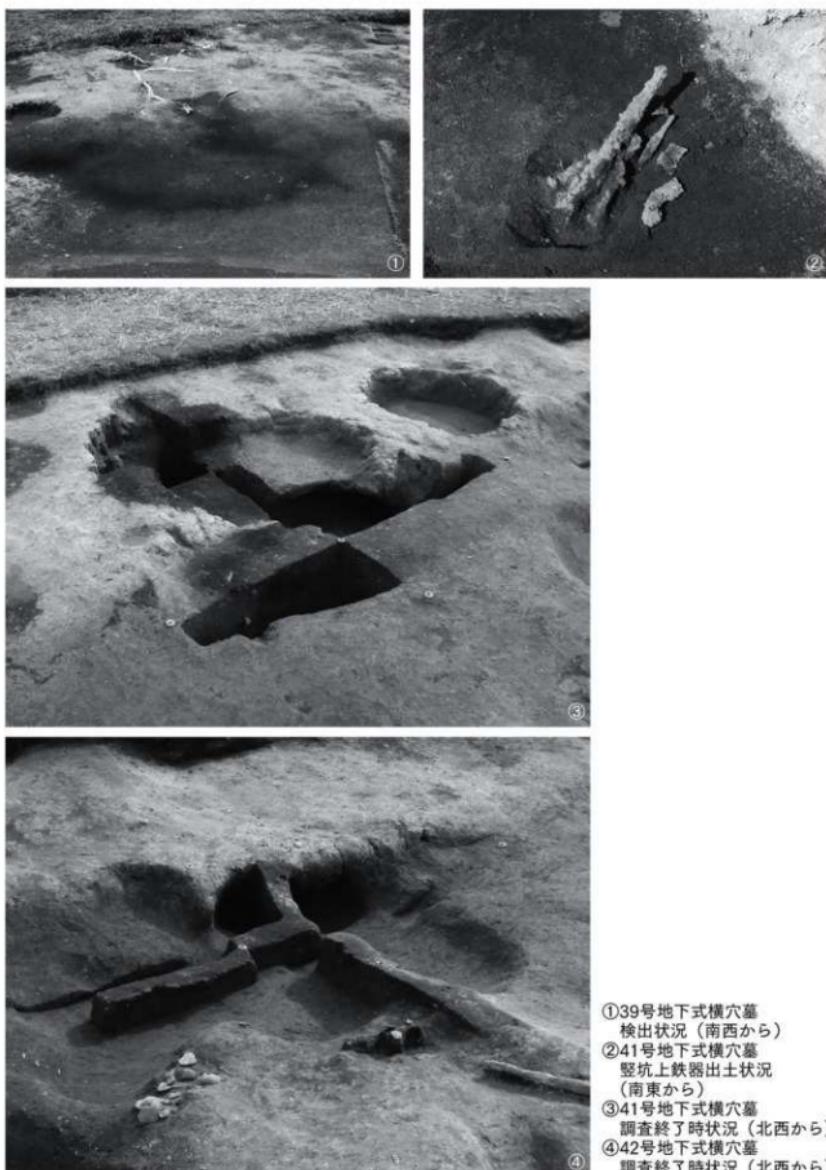


①38号地下式横穴墓置土検出状況（南から）

②38号地下式横穴墓置土上遺物出土状況（南西から）

③38号・47号地下式横穴墓調査状況（南西から）

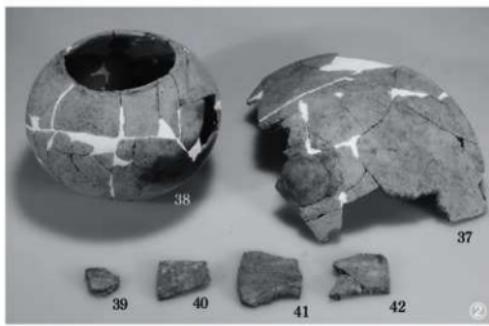
⑤38号地下式横穴墓出土遺物



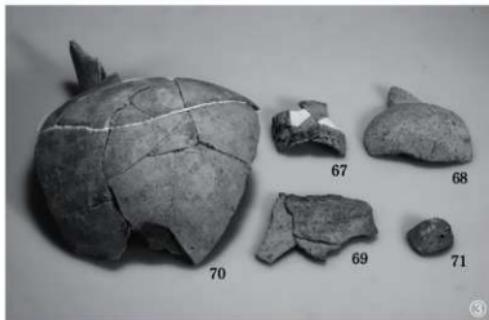
①39号地下式横穴墓
検出状況（南西から）
②41号地下式横穴墓
竪坑上鉄器出土状況
(南東から)
③41号地下式横穴墓
調査終了時状況（北西から）
④42号地下式横穴墓
調査終了時状況（北西から）



①

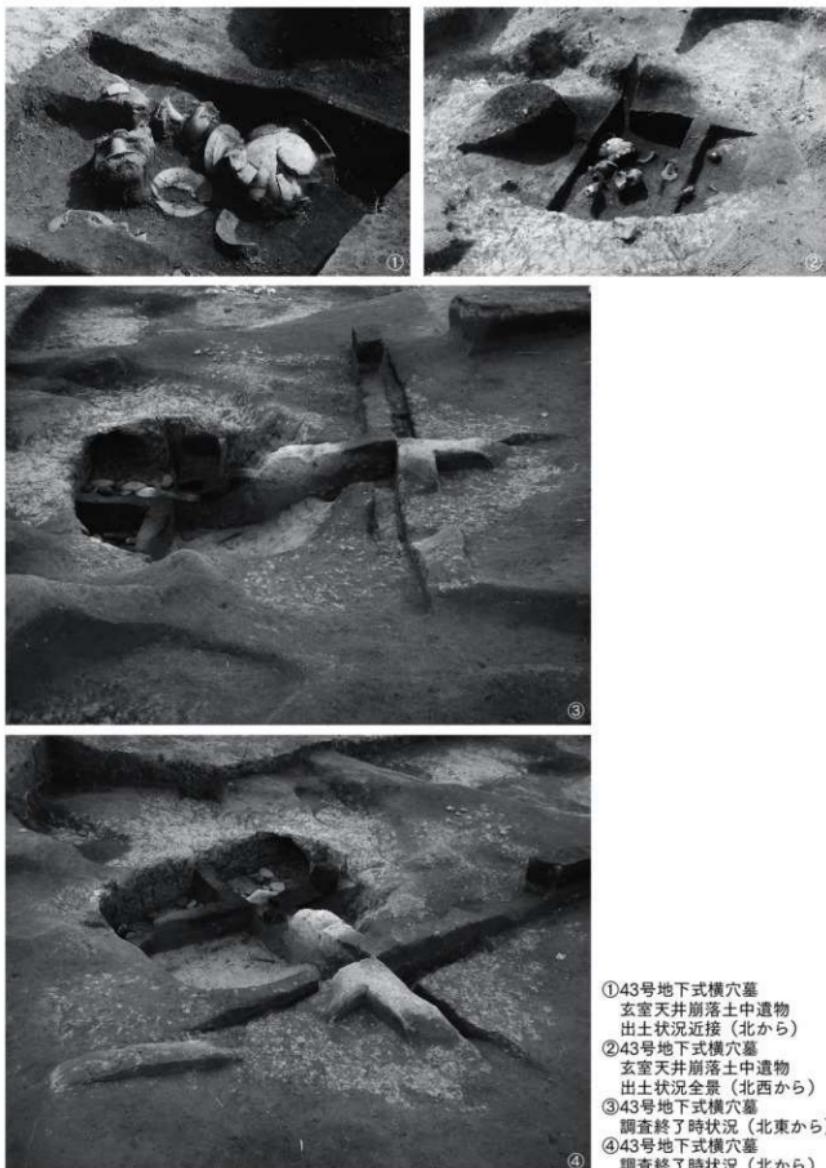


②



③

①41号地下式横穴墓出土遗物 1
②41号地下式横穴墓出土遗物 2
③42号地下式横穴墓出土遗物



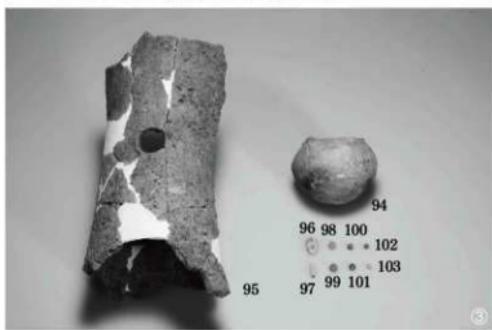
①43号地下式横穴墓
玄室天井崩落土中遺物
出土状況近接（北から）
②43号地下式横穴墓
玄室天井崩落土中遺物
出土状況全景（北西から）
③43号地下式横穴墓
調査終了時状況（北東から）
④43号地下式横穴墓
調査終了時状況（北から）



43号地下式横穴墓出土遗物1



43号地下式横穴墓出土遗物2



①44号地下式横穴墓
竖坑半裁状况（北西から）
②46号地下式横穴墓
調査終了時状況（南から）
③46号地下式横穴墓
出土遺物

報告書抄録

ふりがな	いきめこふんぐんろく							
書名	生目古墳群VI							
副書名	生目21号墳発掘調査報告書							
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第113集							
編著者名	石村 友規							
発行機関	宮崎市教育委員会							
所在地	〒880-0805 宮崎市橘通東1丁目14番20号							
発行年月日	2016年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因	
生目21号墳	宮崎市大字勝江	45201	24-059	31° 56' 54" 付近	131° 23' 15" 付近	2002. 12. 13 ~2003. 3. 31 2007. 8. 19 ~2008. 3. 31 2008. 12. 1 ~2009. 3. 31 2010. 11. 29 ~2011. 3. 31	816m ²	保存整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な出土遺物	特記事項			
生目21号墳	古墳	古墳時代	古墳墳丘・周溝 地下式横穴墓	土師器・弥生土器・ 壺形埴輪・鉄器・玉類	5世紀初頭に位置付けられる出現期の地下式横穴墓を検出			
要約	生目21号墳	<p>国指定時は円墳としての指定であったが、発掘調査の結果、墳長36mの小型の前方後円墳であることが明らかになった。その時期は出土した二重口縁壺、壺形埴輪から4世紀前半に位置付けられる。</p> <p>周溝内から13基の地下式横穴墓が検出され、その内2基が5世紀初頭の最古段階の地下式横穴墓に位置付けられ、地下式横穴墓の成立を考える上で非常に重要な成果が得られた。</p> <p>21号墳の周溝内では地下式横穴墓がその後も少なくとも5世紀後半まで継続的に構築されるが、最も遡る地下式横穴墓でも、21号墳とは半世紀以上の時期差がみられる。21号墳に「始祖墓」の役割をもたせ、周溝内に近親者が地下式横穴墓を造り続けた結果と考えられる。</p>						

宮崎市文化財調査報告書 第113集

生目古墳群VI

生目21号墳
発掘調査報告書

2016年3月
発行 宮崎市教育委員会

